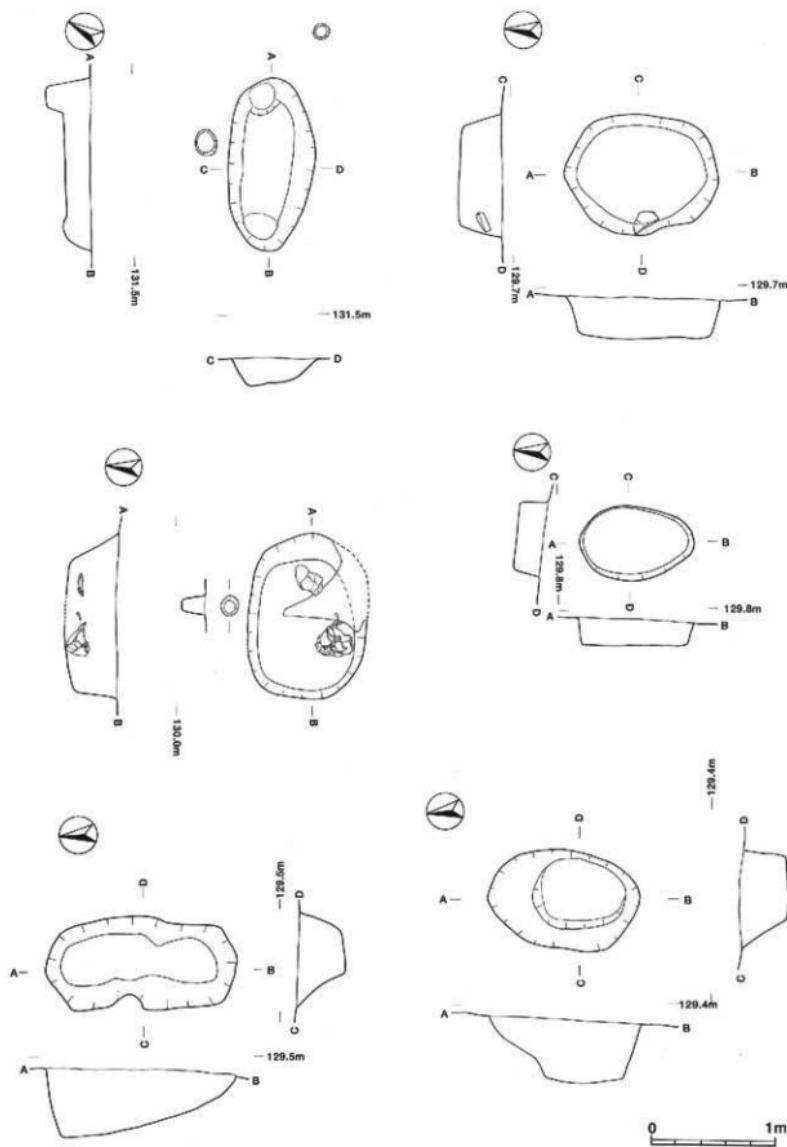
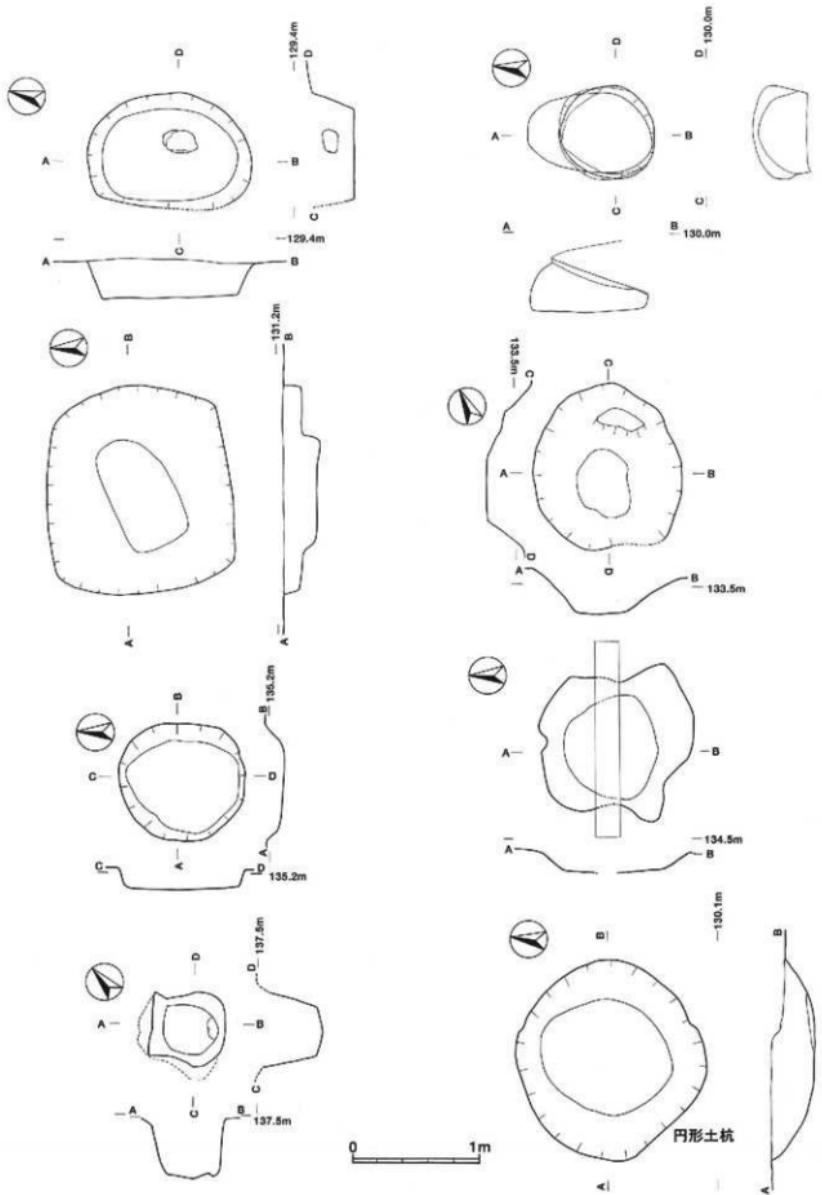


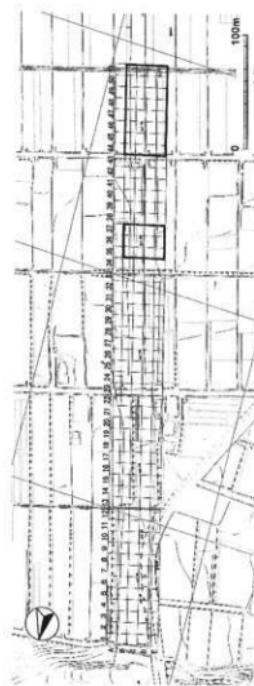
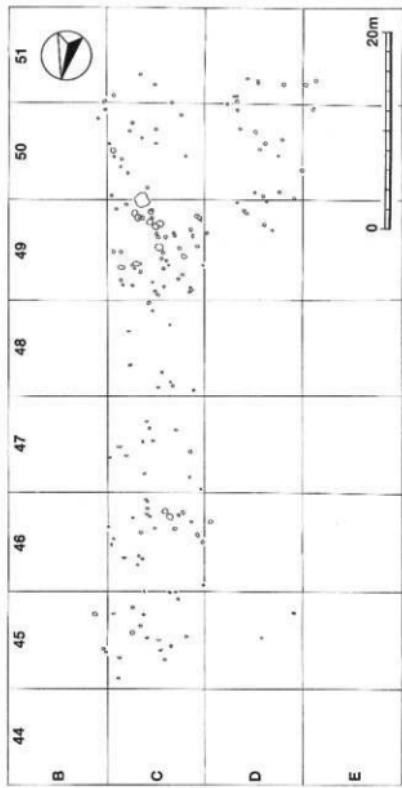
第88図 溝状造構 (2)



第89図 土坑1~6



第90図 土坑7・8, 円形土坑



第91図 ピット立地図

住居跡出土石器（第92～95図、491～512）

検出された住居内の埋土から、成川式に伴い数十点の石器が出土した。その中から状態の良いものをそれぞれ図化した。

住居1号内からは、5点の遺物が出土した。包含層での分類を基に遺物を判断した。凹石が3点・敲石が2点であり、いずれも花崗岩である。

491～493は凹石である。491・493は表面と上部・下部に敲打痕がみられ、裏面には6mmほどのくぼみがある。ほぼ全面に擦痕がみられる。492は、上下と表裏に敲打痕がみられる。また、表裏の敲打された所に凹みが入り、全面が研磨されている。

493・494は敲石に分類した。いずれも敲打面が中心にあり、その後研磨がほどこされている。

住居2号からは、5点の遺物が出土した。

497は、うすく扁平な頁岩を用いた礫器である。右側辺から下辺、左側辺にかけて規則性の無い粗い剥離によって刃部が形成されている。一部に階段状の剥離がみられる。また刃部には、使用によるつぶれがみられる。497は凹石である。砂岩を用いており、表裏面に共に4mm弱の深さのくぼみを呈する。擦痕や敲打痕はみられない。498は花崗岩を用いた敲打痕が強く残り、表裏面には擦痕を呈する。499は黒曜岩を用いた磨石である。角の取れた三角柱を呈し、全ての面に強く擦痕がみられる。500は軽石製品である。楕円形の柱状を呈し、上部に向かってやや狭くなっている。下部は欠損しているように見えるが、擦痕がみられる。全面に擦痕がみられるが、詳しい情報は不明である。

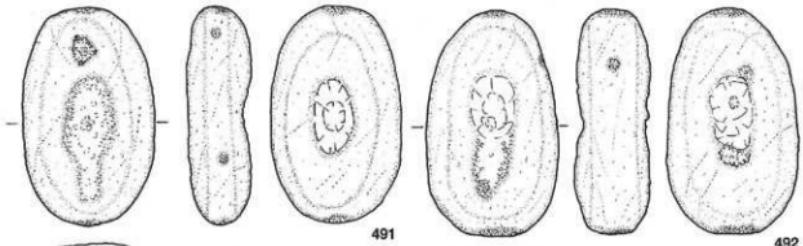
住居3号からは敲石2点、磨石1点が出土した。

501は、花崗岩の円盤を用いている。側辺に敲打がみられるが、連続性はなく左側辺に敲打が特に強くみられる。表裏に擦痕がみられ、また、側辺部には敲打面をのぞいた所に擦痕がみられる。

502は、花崗岩を用いた磨石である。表裏と両側面にわずかに敲打がみられるが、裏面は平滑化が強くあらわれるなどの擦痕がある。503は、黒曜岩を用いた小柄な敲石である。側辺全てに敲打がみられ、表裏面には弱く擦痕がみられる。

住居2・3・4号は、検出面が切り合っており、それに準じて遺物も住居番号が判断できないものが存在する。95図に住居番号不明遺物として掲載する。

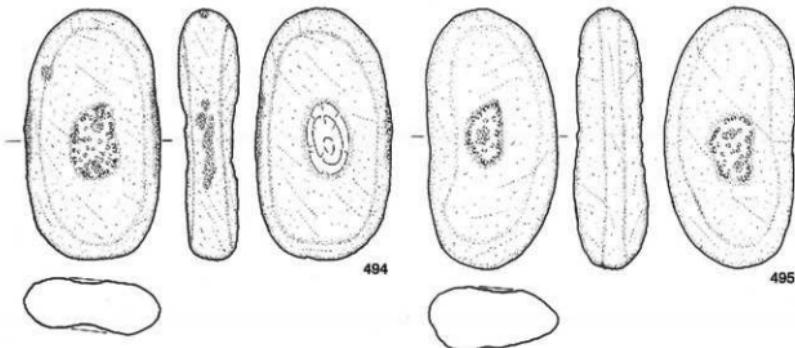
501～504は、敲石である。全て花崗岩を用いているが、形状には大きな差がある。側辺に敲打痕がみられ、全体に擦痕がみられる。503は、中央にも敲打痕がみられ、台石の可能性を考えさせる。505は、花崗岩の小円盤を用いた磨石である。表面には、2箇所の磨面がみられ、その切り合により、稜が作られている。裏は研磨により、平坦な面が作られている。506は、花崗岩を角盤を用いた台石である。表面のみ使用痕がみられ、その他の面には自然面が残る。表面中央部に敲打痕がみられ、表全面に擦痕がみられる。507・510は軽石製品である。510は方形、507は楕円形を呈しているが、全ての面に擦痕がみられる。



491

492

493

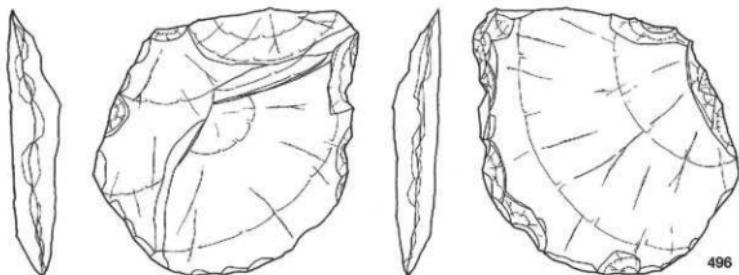


494

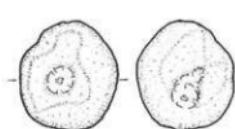
495

0 10cm

第92図 遺構出土石器 (1)



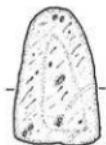
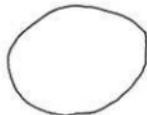
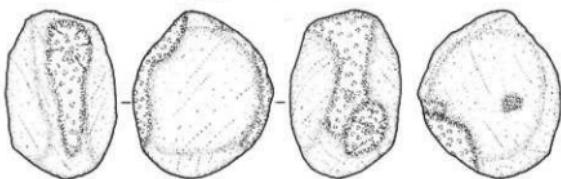
0 5cm



497



498



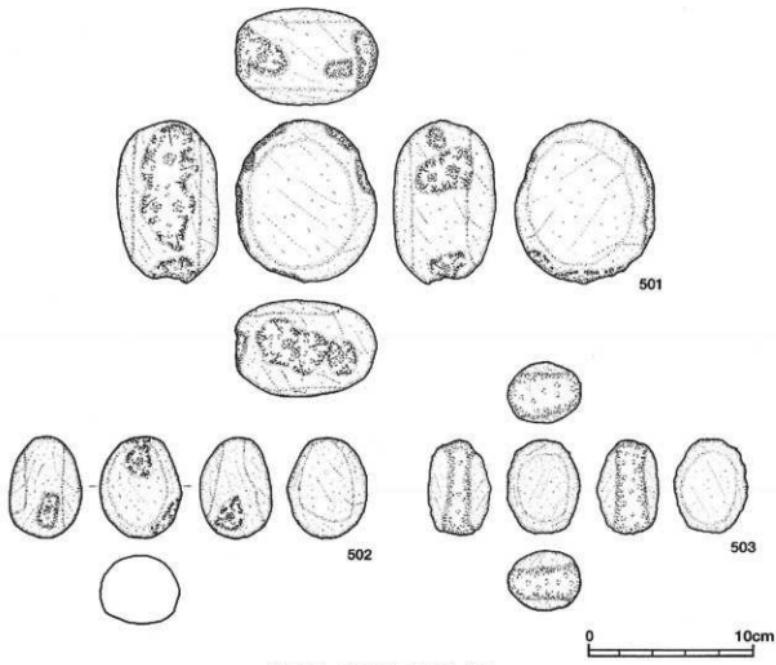
499

500

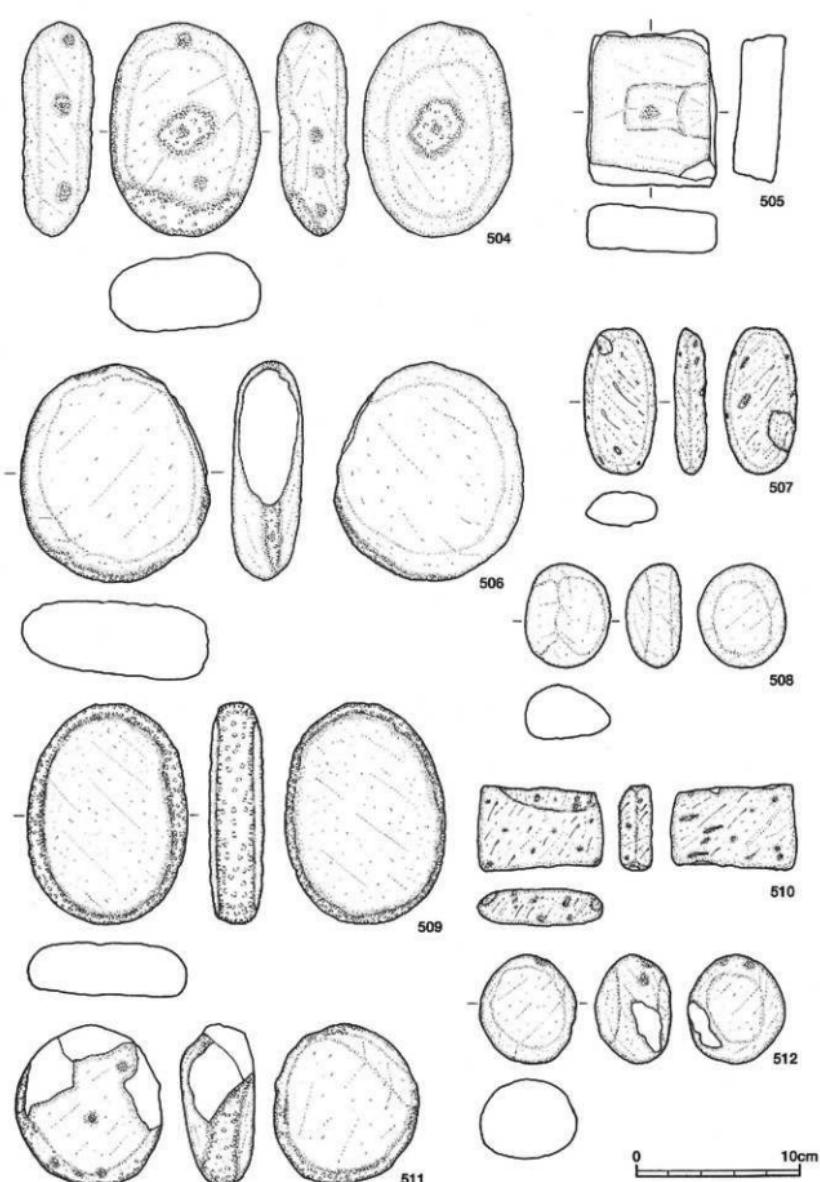


0 10cm

第93図 遺構出土石器 (2)



第94図 遺構出土石器（3）

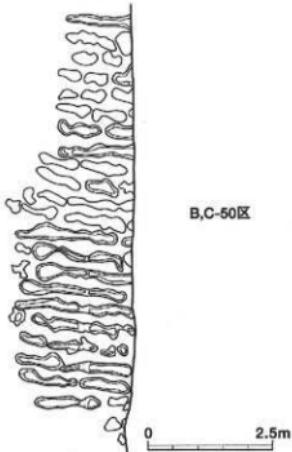


第95図 遺構出土石器 (4)

第18表 鶩ヶ迫遺跡造構内石器観察表

標団 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
92	491	12542	凹石	花崗岩	C-D27	住1	13.3	8.0	4.1	690.0	
	492	12546	門石	花崗岩	C-D27	住1	12.6	8.0	4.5	760.0	
	493	12544	凹石	花崗岩	C-D27	住1	13.0	8.1	4.9	840.0	
	494	12551	敲石	花崗岩	C-D27	住1	15.2	8.2	3.6	730.0	
	495	12543	敲石	花崗岩	C-D27	住1	16.0	7.9	4.4	800.0	
	496	9605	癧器	頁岩	C2	住2	9.5	7.4	1.2	95.0	
93	497	3158	凹石	砂岩	C2	住2	6.8	5.8	3.8	190.0	
	498	8244	敲石	花崗岩	C2	住2	10.2	8.4	6.2	670.0	
	499	7755	敲石	花崗岩	C2	住2	7.5	6.8	6.1	470.0	
	500	8065	鉛石製品	燧石	C2	住2	8.3	5.2	3.6	50.0	
94	501	1922	敲石	花崗岩	D5	住3	10.2	8.5	6.0	730.0	
	502	2191	敲石	安山岩	D5	住3	6.2	4.8	4.7	175.0	
	503	7250	敲石	黑曜岩	D5	住3	5.8	4.5	3.8	125.0	
95	504	13146	敲石	花崗岩	—	—	13.3	9.2	4.4	820.0	
	505	15910	台石	花崗岩	—	—	9.5	7.5	3.0	495.0	
	506	7355	敲石	花崗岩	—	—	13.3	11.6	4.3	1030	
	507	415	鉛石製品	燧石	—	—	8.9	4.4	2.0	30.0	
	508	—	磨石	花崗岩	—	—	6.4	5.2	3.3	155.0	
	509	7218	敲石	花崗岩	—	—	13.6	9.8	3.3	670.0	
	510	1661	鉛石製品	燧石	—	—	5.3	7.6	2.0	30.0	
	511	1645	敲石	花崗岩	—	—	9.9	8.8	4.3	450.0	
	512	3466	敲石	花崗岩	—	—	6.2	5.3	4.6	275.0	

Ⓐ



畝跡（第96図）

B・C-50区、Ⅱ層上面で検出された畝跡である。圃場整備等により削平されていたため、全体はつかめなかったが、残存面積は約23m²であった。畝と畝間の比高差は約5cm程しかない。畝幅は約30cmで、長さ約2.5m程検出されたものが、23条残っていた。畝跡の使用時期は層位等から中世から近世と考えている。

第96図 畝跡

北原中遺跡

第V章 北原中遺跡

第1節 発掘調査の概要

北原中遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成11年度から確認調査及び本調査を行ったが、用地買収に手間取り変則的な発掘調査になってしまった。そのため、平成11・12・16・18年度に発掘調査を行った。

その結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレーナーを設定し、下層確認を行った結果、古墳時代・縄文時代晚期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため、Ⅲ層までは全面調査を行った。

第2節 縄文時代の調査

Ⅲ層からは、縄文時代晚期から古墳時代の遺構・遺物が出土した。遺物はC・D-10・11区、C-12~17区、C・D18~24区に集中し、遺構は集石遺構が5基検出された。

遺構

集石遺構1（第98図）

C-20区、Ⅲ層上面で、検出したものである。21個の拳大の角礫が、70×50cmの楕円状の範囲に集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

集石遺構2（第98図）

集石遺構2より南西約6mのC-21区、Ⅲ層上面で検出されたものである。約60×60cmの円形の範囲に、16個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、集石遺構1同様、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

集石遺構3（第98図）

集石遺構2より北西23mのD-19区、Ⅲ層上面で、検出したものである。89個の拳大の円・角礫が、約140×100cmの楕円状の範囲に集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

集石遺構2-1（第99図）

集石遺構2より南東約26mのE-23区、Ⅲ層上面で検出されたものである。約50×40cmのほぼ円形の範囲に、14個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、他の集石遺構同様、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

集石遺構2-2（第99図）

集石遺構2-1より西約26mのB-23区、Ⅲ層上面で検出されたものである。約40×20cmの範囲に、5個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、他の集石遺構同様、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

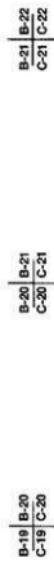
これらの集石遺構の周辺からは、縄文時代晚期の土器や石器が共伴したことから、この集石遺構の時期は縄文時代晚期と想定される。



集石(2)
1号集石



集石(1) 1号集石



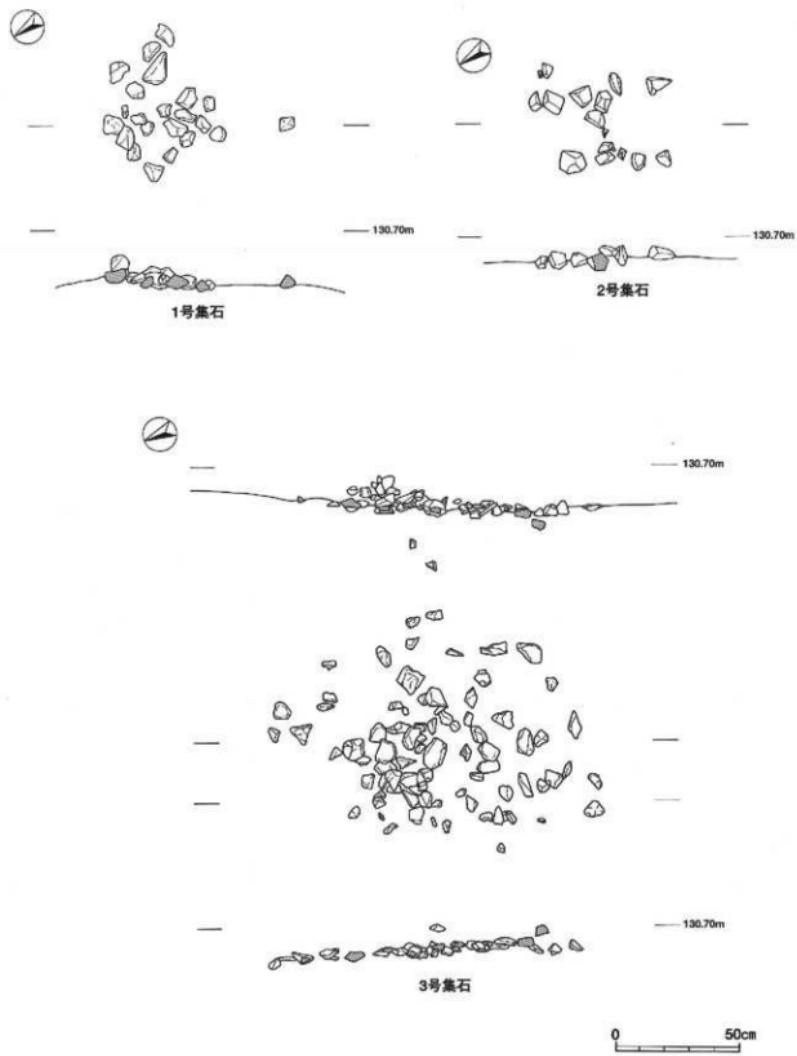
集石(1) 2号集石



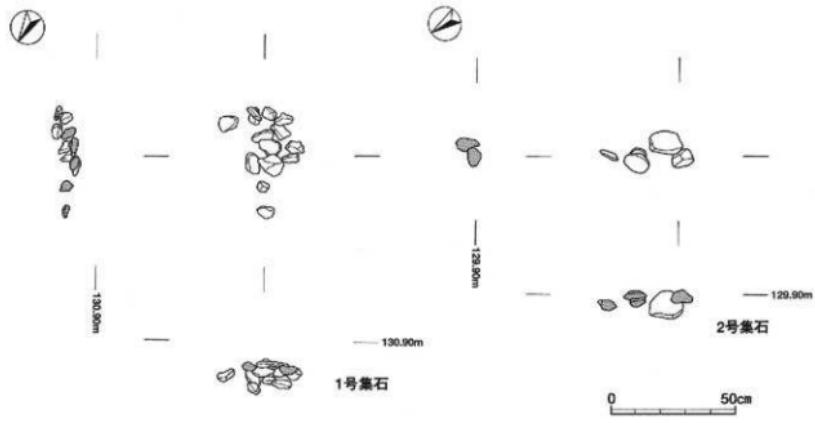
集石(1) 3号集石



第97図 遺構配置図

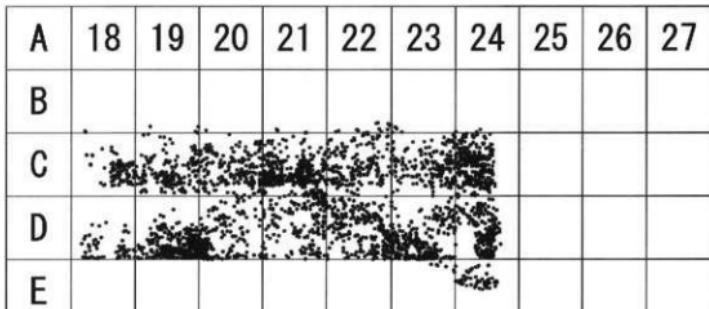
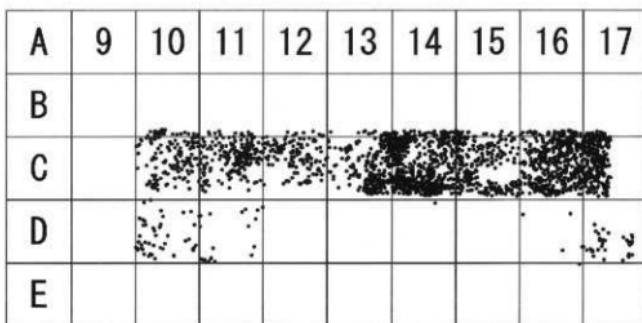


第98図 集石 (1)



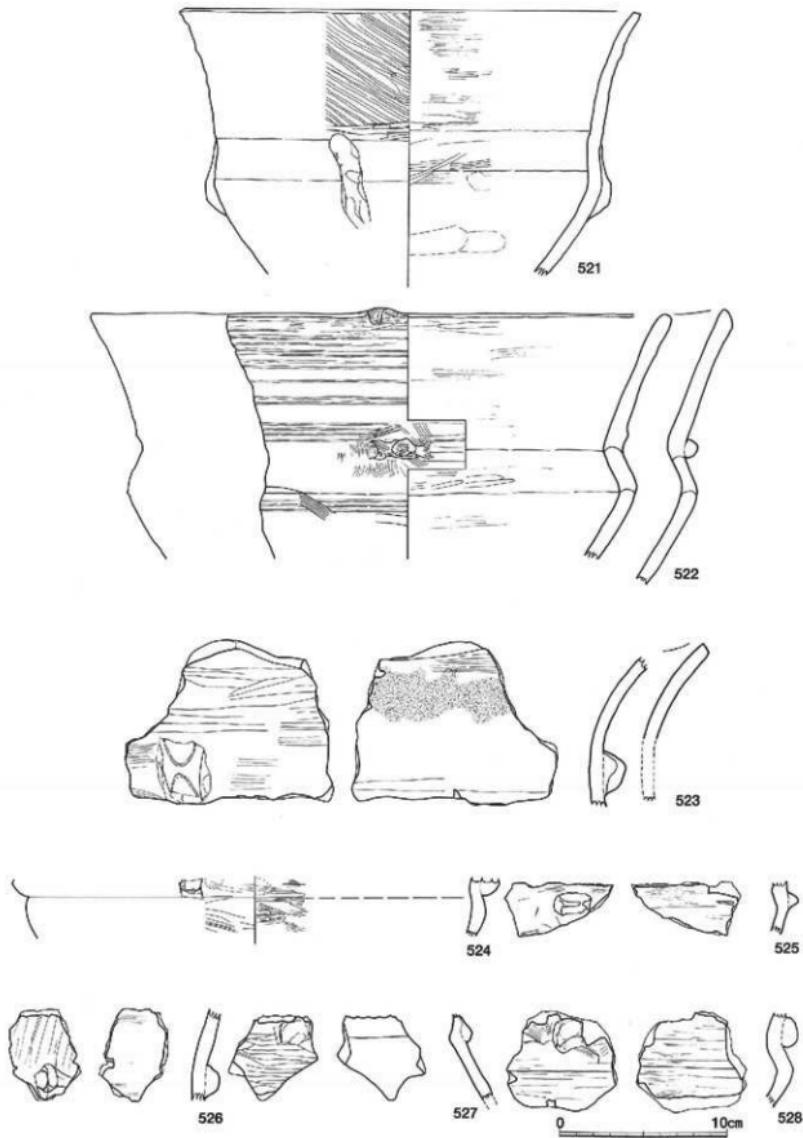
第99図 集石 (2)

A	1	2	3	4	5	6	7	8
B	●	.						
C	..	.					??	
D								
E								

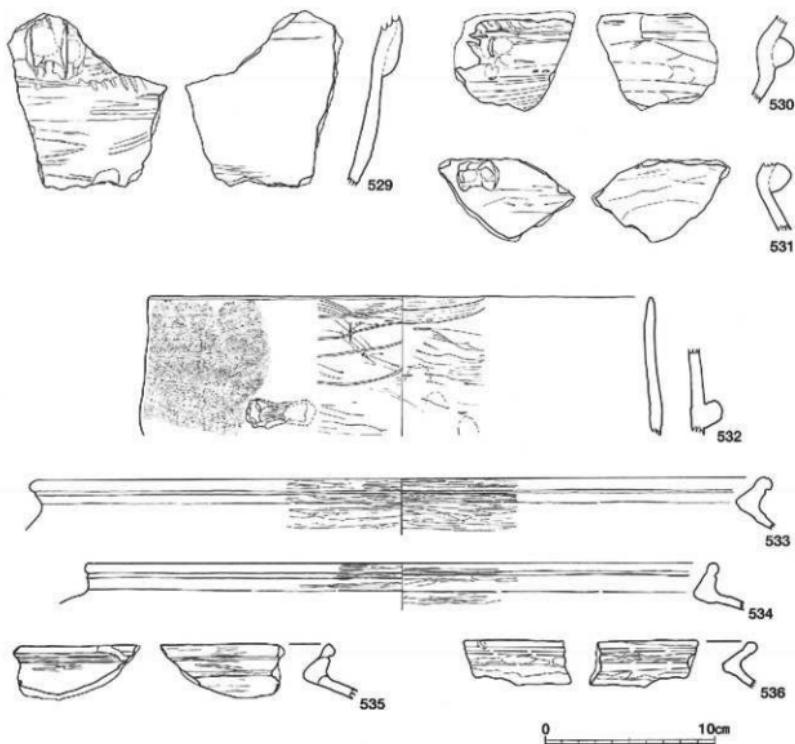


0 50m

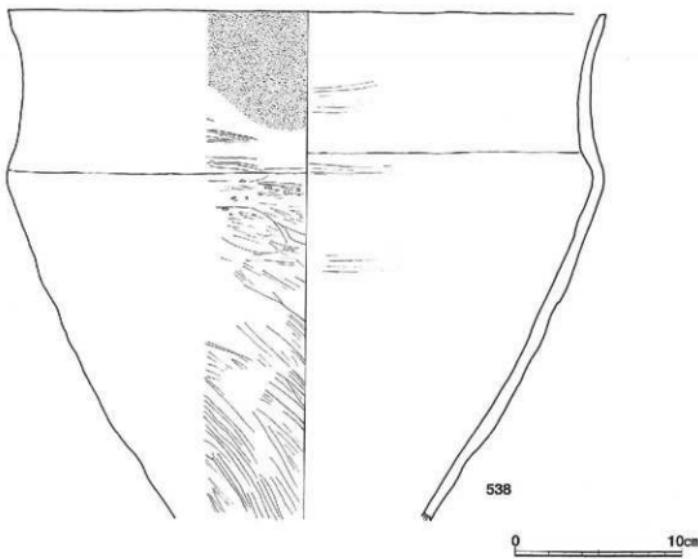
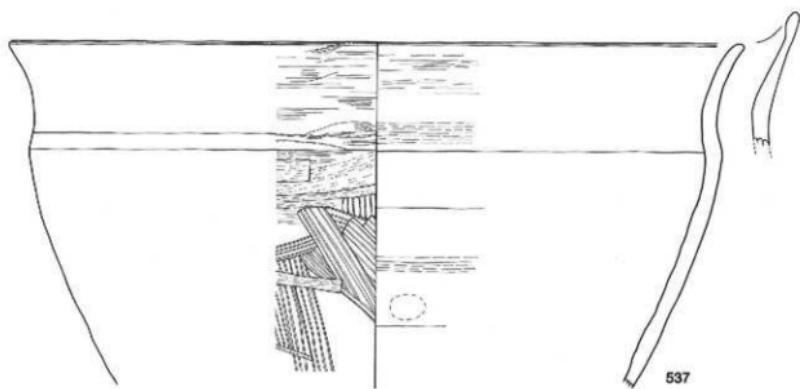
第100図 IV層遺物出土状況



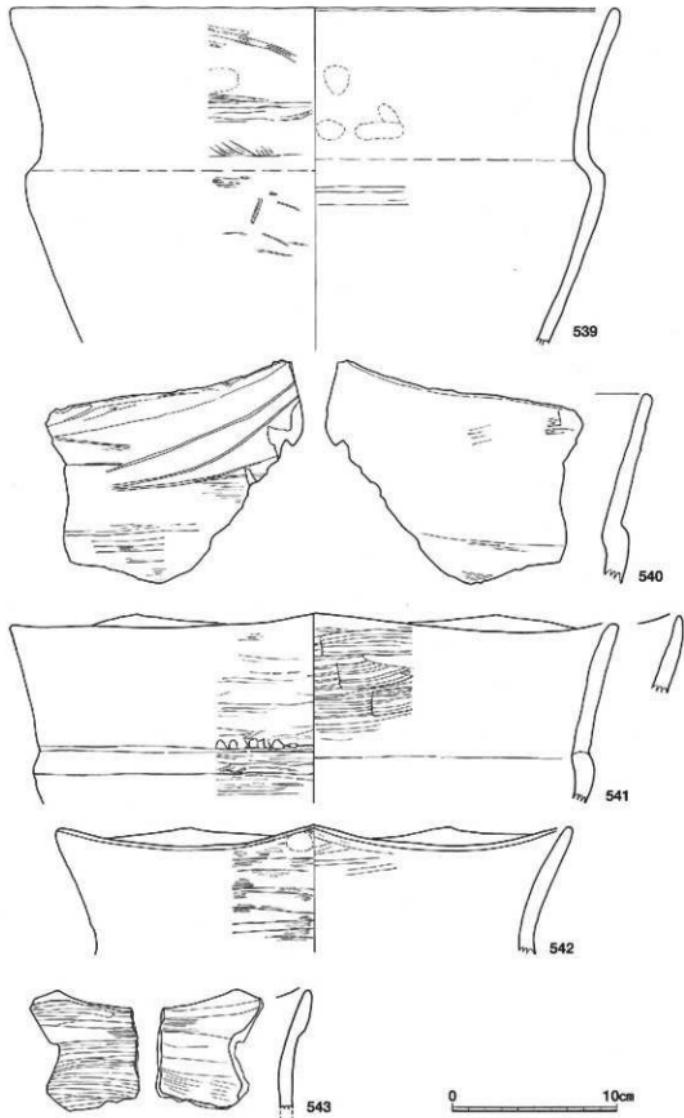
第101図 晩期土器 1



第102図 晩期土器 2



第103図 晩期土器 3



第104図 晩期土器 4

土器

Ⅲ～Ⅳ層にかけて、縄文時代晩期の土器がC・D-10・11区、C-12～17区、C・D-18～24区にかけて大量に出土した。

器形は、深鉢形土器・浅鉢形土器・楕形土器（まり）などであり、粗製土器・精製土器等がみられた。

521～532はリボン状の突起を付けたものである。521・522は外反する器形で、口縁部が長い土器である。頸部や肩部でそれぞれ「く」の字状に折れている。内外面ともナデ整形を施すものである。521のリボン状突起は縦位に、522は横位に施されている。

532は直口する口縁部をもつまり形土器である。

533～536は浅鉢形土器である。533・534は口縁部端部が丸みを帯び、口縁部外面に一条の沈線が施されている。口縁接合部の内面に僅かに稜線がみられる。内外面ともヘラ研磨で整形されている。

535・536も口縁端部が丸みを帯びているものである。

深鉢形土器

537～578は深鉢である。

537～539は口縁部が帶状に肥厚し、全体的に口縁部の口径が大きく開口したような器形で、口縁部が外反し、頸部や肩部がそれぞれ「く」の字状に折れるものである。

540～543は山形を呈する口縁部をもつもので、内外面ともナデ調整で整形を行っている。

544は口縁が直口し、口縁部が内弯するものである。口径は27cmを測る。内外面とも横位のヘラミガキ調整を行っている。

545は口縁部が短く「く」の字状に折れる器形のタイプである。横方向のナデ調整を行っている。復元口径は30.6cmを測る。

546は頸部と肩部が「く」の字状に直線的に折れるもので、外面は横方向のヘラナデで仕上げている。肩部口径は26.8cmを測る。

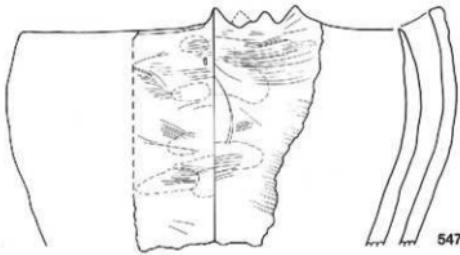
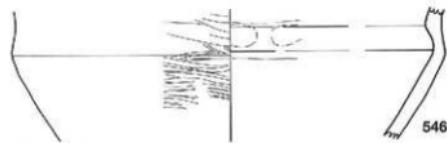
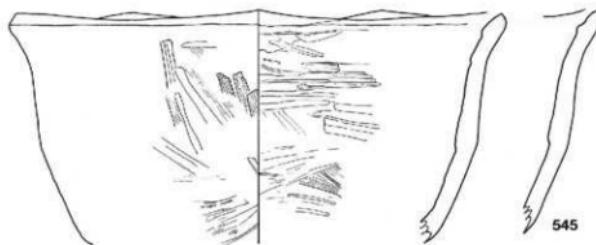
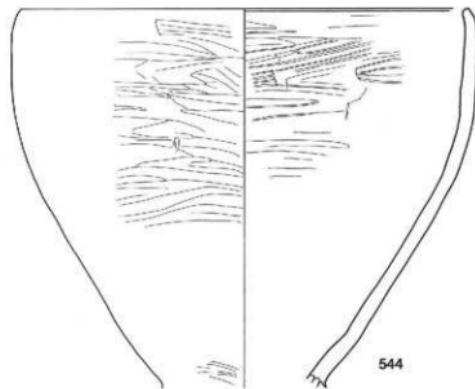
547は口唇部にやや小ぶりの山形突起を4個付したもので、復元口径23cmを測る。内外面ともナデ整形で調整している。

548～553は直口する口縁部をもつものである。外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・ナデ整形を行っている。548・550は外面に煤が付着している。

554～556は口縁部がやや内弯するもので、外面は横方向のヘラナデで仕上げ、内面はヘラミガキである。

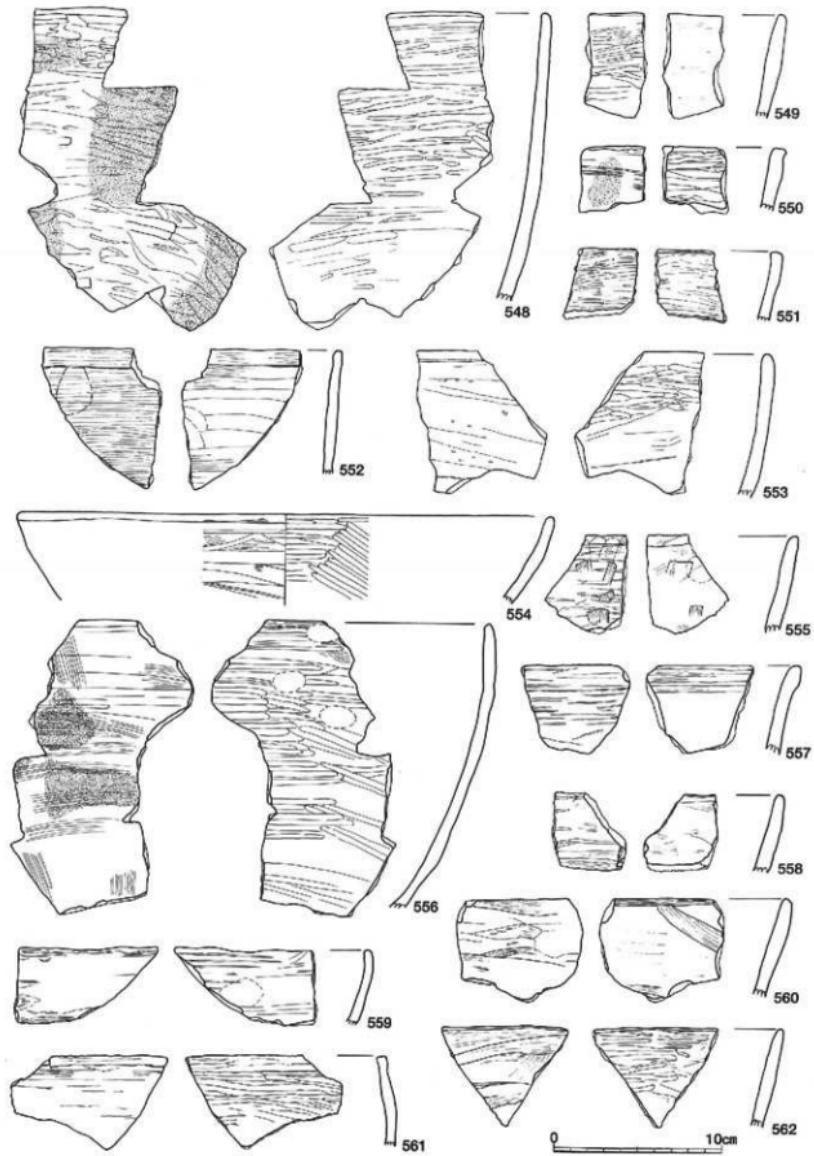
563～569は外反する口縁部をもつものである。内外面ともナデ整形を行っている。

572は口縁部が内側に傾き、頸部は緩やかに内弯し、肩部から胴部にかけて「く」の字状に折れ、その径が口縁部より大きい形状を呈している。工唇部は平坦に調整している。内外面ともヘラミガキで仕上げている。



0 10cm

第105図 晩期土器 5



第106図 晩期土器 6

浅鉢形土器

579・580は頸部の口径が33cm・28.5cmを測るものである。口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて立ち上がる、長い口縁部をもち、頸部で締まり肩部で「く」の字状に折れる器形を呈する。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

581は口径が35cmを測る大型の浅鉢形土器である。「口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて立ち上がるもので、579・580よりやや寝る状態のものである。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

582・588・590は口縁部のみであるが、口唇部が低く玉縁が断面三角形状を呈する形状になるものである。復元口径は37cm・20cm・19.2cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

583～585は口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて短く立ち上がるものである。復元口径は、それぞれ38cm・33cm・32.6cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

586・587は口縁部の口唇部が玉縁状になり、口縁部が直口するものである。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。587の復元口径は31.2cmを測る。

589は口縁部が丸みをもしながら外反し、肩部で「く」の字状に折れる器形である。

591～598は口唇部が玉縁口縁で、肩部から口縁部にかけて短く立ち上がる精製された浅鉢形土器である。頸部で締まり、肩部で「く」の字状に折れる器形を呈する。復元口径は21.6cm～32.4cmを測る。内外面とも丁寧なヘラで研磨が施され調整されている。

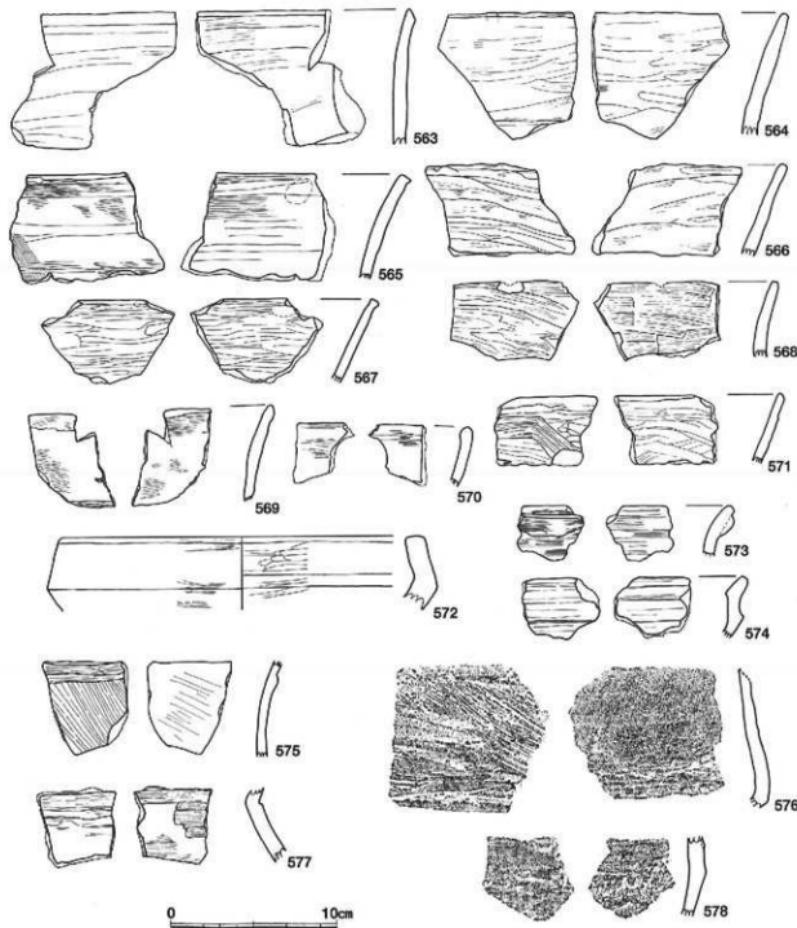
599はやはり口唇部が玉縁口縁であり、肩部が「く」の字状に折れる器形である。復元口径は24cmを測る。600も同様の玉縁口縁であり、復元口径は31.5cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

601～608は浅鉢形土器の口縁部である。いずれも玉縁口縁で外反している。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。608は口唇部に鰐状突起を付けている。

609～618は口縁部が玉縁口縁で、頸部が大きく「く」の字状に折れ、肩部から胴部にかけて半球状に曲がる形状の精製された浅鉢形土器である。復元口径は21cm～40.8cmを測る。内外面とも丁寧なヘラで研磨が施され調整されている。

610は内面に1条の深い沈線がみられる。口縁接合部の内面に明瞭な稜をもつものや、接合部が丸みを帯びるものがある。

619～625も同様の口縁部である。



第107図 晩期土器 7

626～628は深鉢である。

626・627は口縁部が外反し、頸部が「く」の字状に折れるものである。胴部最大幅が口縁寄りにあり、稜をなすものである。内外面ともナデ整形を行っている。復元口径28.2cm, 25.5cmを測る。

629～632は鉢形土器である。深鉢と浅鉢の中間的な器高のものをまとめた。

629は口縁内側端部を肥厚させるものである。復元口径23cmを測り、外面はヘラケズリとナデ整形で調整し、内面はナデ整形を施している。630は口縁端部が平坦なもので、631は先細りするものである。復元口径18cm, 22.5cmを測る。共のナデ整形で調整されている。

643・644は下縁口縁をもつもので、復元口径19.5cm, 21.2cmを測るもので、ナデ整形で鬼面調整を行っている。

645～649は下縁口縁をもつ浅鉢形土器である。内外面とも丁寧なヘラナデが施されている。645は古墳時代の3号住居、647は6号住居から出土しているが、古墳時代の住居埋土に混入したものと思われる。

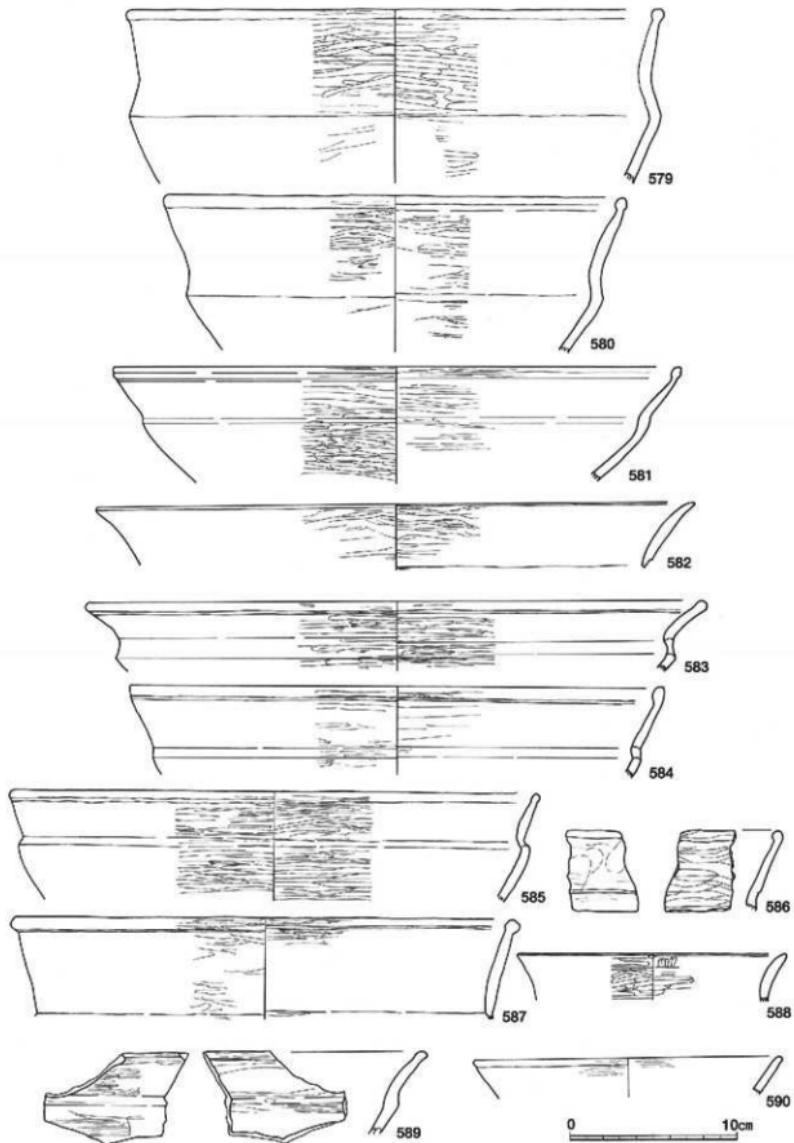
650は復元口径16cmを測る鉢形土器で、口縁端部が平坦で直口するものである。内外面とも丁寧なヘラミガキで器面調整が行われている。651・652も同様の口縁部である。

653・654・656・660は椀形土器（マリ）である。半球形の薄手で胴部が深い土器で、653は復元口径17cm, 656は15cm, 660は13cmを測る。いずれも丁寧なヘラミガキで器面調整が施され、653・656・660の外面には赤色顔料が付着している。

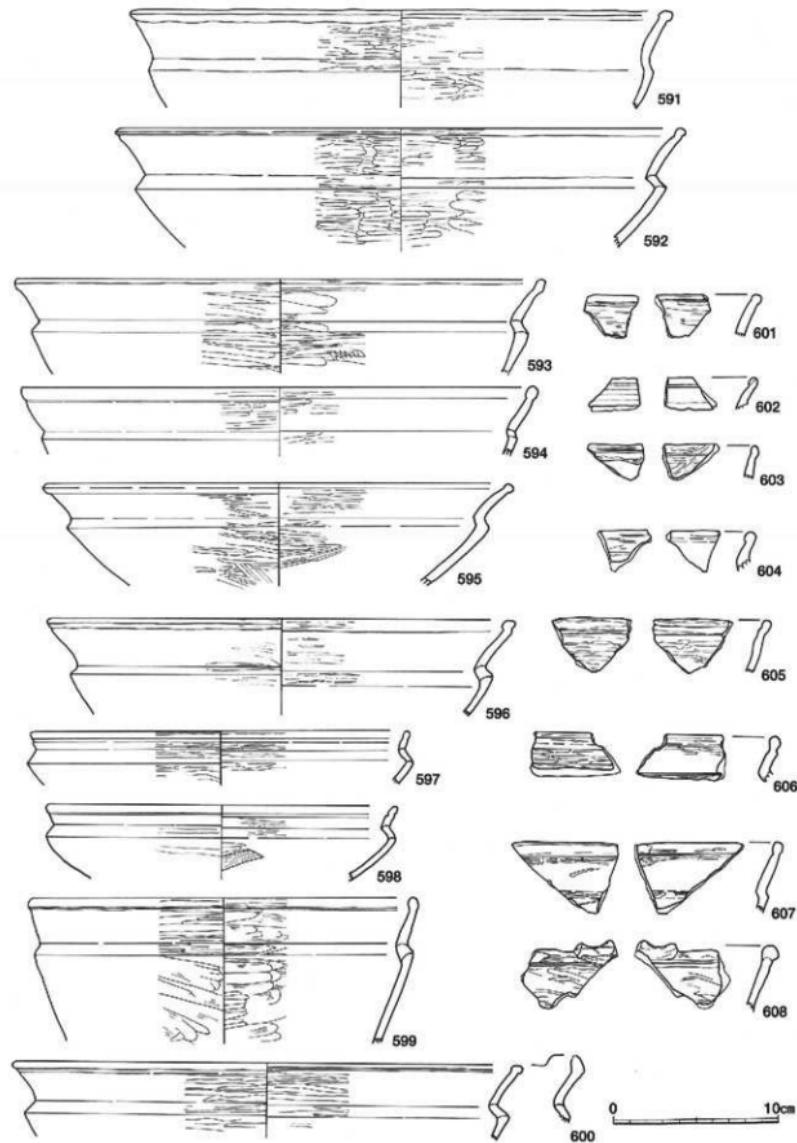
661～675は绳文時代晩期の土器底部である。深鉢形土器・浅鉢形土器など器種による分類が困難なため、ここでは括して取り上げた。661は丸底であり、内外面とも丁寧なヘラ研磨が調整が施されていることから浅鉢形土器の底部の可能性がある。

662～675は平底である。662は上げ底気味の底部で、外開きの胴部に移行するものである。663～675は平底で、張り出しのみられる底部からすぐ外開きの胴部に移行するもの（662～672・674）、接地面から僅かに立ち上がり外開きになるもの（673）、上げ底気味で高台状の底部になる675がみられる。

676は組織痕土器である。組織痕土器には圧痕の種類として網目、席目、布目、籠目の4種類が知られているが、676は網目圧痕の組織痕土器である。網目の一節の長さは0.5cmを測る。



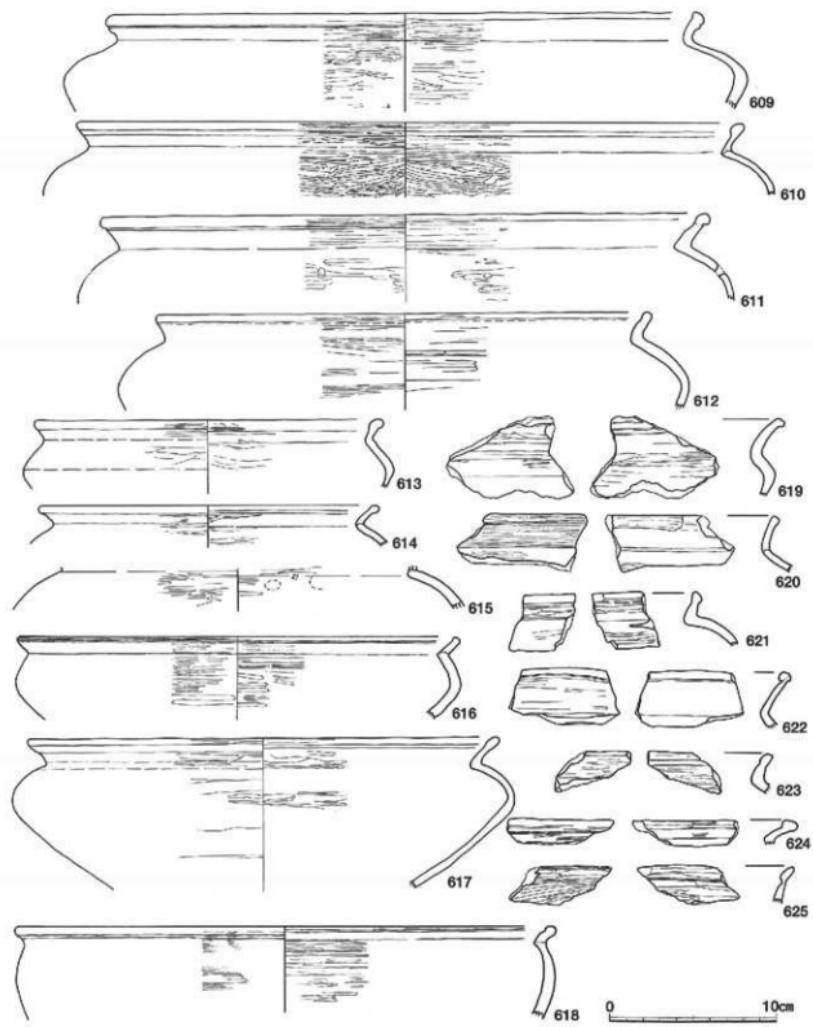
第108図 晩期土器 8



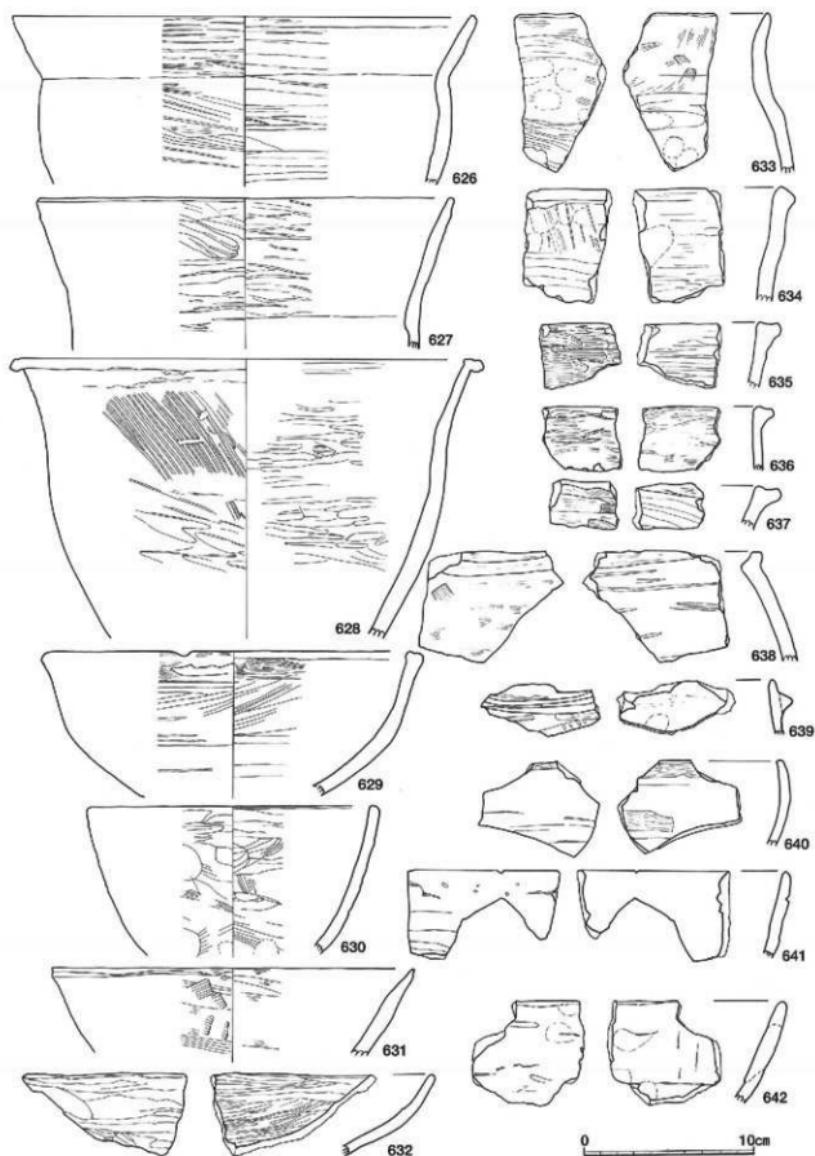
第109図 晩期土器 9

縄文時代晚期土器口縁観察表

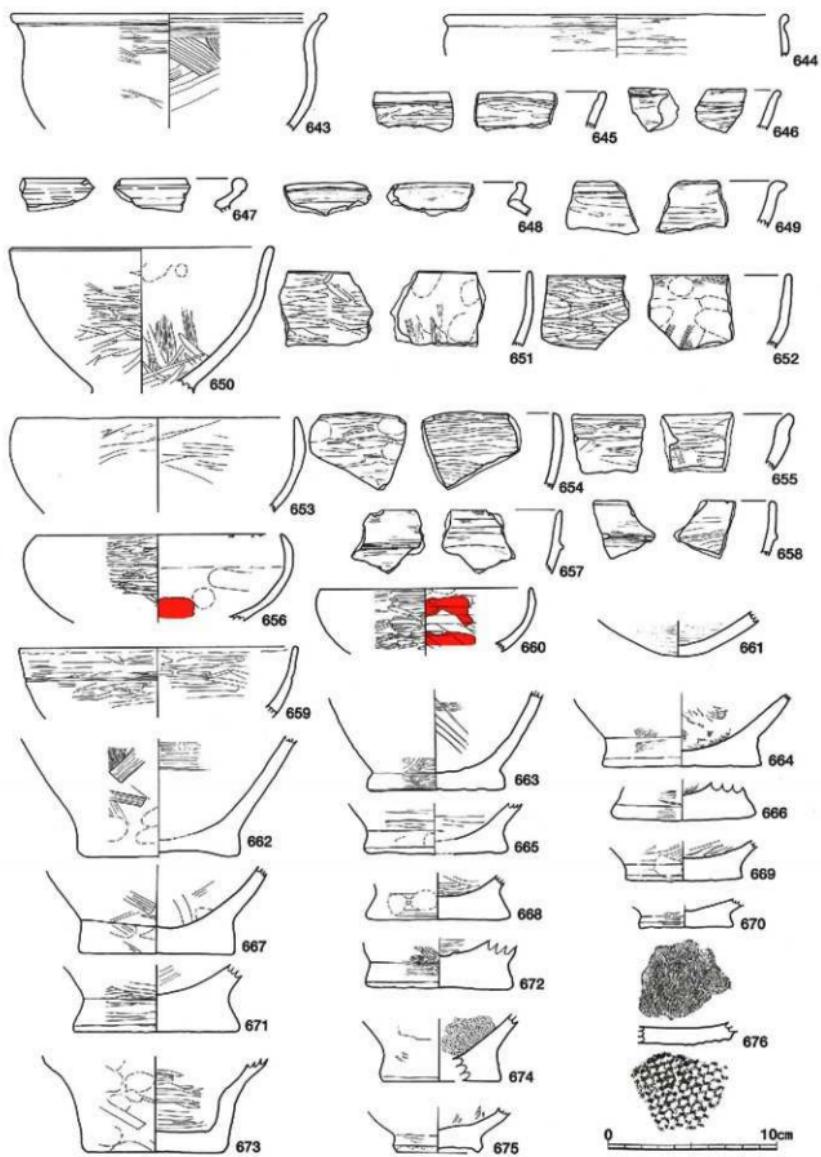
種類番号	遺物番号	出土区	分類	口径(cm)	取上番号	備考
101	521	D-18・19	深鉢形土器	27.8	5350	リボン貼付け
	522	C-14	深鉢形土器	35.4	546	リボン貼付け
102	532	C-15	深鉢形土器	30.6	2498	
	533	C-18	浅鉢形土器	43.8	2398	
103	534	C-12	浅鉢形土器	37.8	739	
	537	B-13	深鉢形土器	44.1	1903	
104	538	B-13	深鉢形土器	36.0	1420	
	539	E-23	深鉢形土器	36.9	1194	
105	541	C-13・14	深鉢形土器	36.6	1914	
	544	C-18	深鉢形土器	27.0	7345	
106	545	C-11	深鉢形土器	30.6	2709	
	547	D-19	深鉢形土器	23.0	7345	
107	554	D-22	深鉢形土器	32.4	8192	
108	572	E-23	深鉢形土器	22.5	1142	
	579	C-23	浅鉢形土器	33.0	5136	
109	580	C-23	浅鉢形土器	28.5	5130	
	581	D-20	浅鉢形土器	34.8	6130	
110	582	C-20	浅鉢形土器	37.0	1915	
	583	C-18	浅鉢形土器	38.0	15	
111	584	C-D-20	浅鉢形土器	33.0	16	
	585	C-14	浅鉢形土器	32.6	2546	
112	587	E-23	深鉢形土器	31.2	2806	
	588	C-19	深鉢形土器	20.0	5596	
113	590	C-22	鉢形土器	19.2	3433	
	591	C-13	浅鉢形土器	33.0	1461	
114	592	B-12	浅鉢形土器	35.1	1468	
	593	C-20	浅鉢形土器	32.4	6383	
115	594	D-20	浅鉢形土器	31.5	6672	
	595	D-20	浅鉢形土器	28.8	12	
116	596	C-16	浅鉢形土器	28.8	268	
	597	C-21	浅鉢形土器	23.1	6541	
117	598	C-21	浅鉢形土器	21.6	6849	
	599	D-20	浅鉢形土器	24.0	6727	
118	600	C-20	浅鉢形土器	31.5	1966	
	609	C-23	浅鉢形土器	36.3	1574	
119	610	D-22	浅鉢形土器	40.5	7971	
	611	D-19	浅鉢形土器	36.9	5657	穿孔あり
120	612	D-21	浅鉢形土器	30.0	6647	
	613	C-14	浅鉢形土器	21.0	2134	
121	614	D-21	浅鉢形土器	20.7	6992	
	616	C-20	浅鉢形土器	27.0	1963	
122	617	D-19	浅鉢形土器	27.3	6300	
	618	C-21	浅鉢形土器	33.0	1840	
123	626	C-20	深鉢形土器	28.2	1951	
	627	C-20	深鉢形土器	25.5	1947	
124	628	C-13	深鉢形土器	28.8	1978	
	629	C-16	浅鉢形土器	23.0	4617	
125	630	C-14	鉢形土器	24.0	1901	
	631	C-19	鉢形土器	21.8	6477	
126	643	E-23	浅鉢形土器	19.2	1187	
	644	C-18	浅鉢形土器	21.0	2524	
127	650	D-21	浅鉢形土器	16.2	160	
	653	D-21	浅鉢形土器	16.8	70	赤色顔料付着
128	656	D-21	浅鉢形土器	15.0	64	赤色顔料付着
	659	E-24	鉢形土器	16.8		
129	660	D-21	浅鉢形土器	12.8	31	赤色顔料付着



第110図 晩期土器10



第111図 晩期土器11



第112図 晩期土器12

第19表 繩文土器観察表(1)

種類番号	出土場所	層位	分類	器種	量 著		地土	色 著		取上番号	備考			
					外 面			外 面						
					外 面	内 面		外 面	内 面					
101	521	DAS-D19	IVa	深体	口一刷	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	5350他	突先			
	522	C14	深体	口一刷	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黄褐色	546他	リボン貼付け			
	523	C23	IVa	深体	口縁	ナデ	fl.qz	暗赤褐色	にぶい黄褐色	1589他	リボン貼付けスヌ付			
	524	D32	IVa	深体	肩部	ナデ	ナデ	qz	赤褐色	7182他	リボン貼付け			
	525	D19	IIIb	深体	肩部	ナデ	ナデ	qz	褐色	6291	リボン貼付け			
	526	D20	IVa	深体	肩部	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	6756他	リボン貼付け			
102	527	D18	IIIb	深体	肩部	ナデ	fl.qz	褐色	明黄褐色	7300	リボン貼付け			
	528	E23	IVa	深体	肩部	ナデ	fl.qz	黒褐色	灰褐色	2845	リボン貼付け			
	529	C18	深体	肩部	ナデ	ナデ	fl.qz	にぶい黄褐色	明褐色	2483	リボン貼付け			
	530	D18	深体	肩部	ナデ	ナデ	qz	灰褐色	温褐色	5398	リボン貼付け			
	531	C20	IIIb	深体	肩部	ナデ	ナデ	qz	褐色	6332	リボン貼付け			
	532	C15	IV	深体	口縁	ナデ	bl.fl.qz	にぶい黄褐色	2498他	リボン貼付け				
103	533	C18	IVa	深体	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	2398				
	534	C12	IV	浅体	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	739				
	535	C10	IVa	深体	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	2289				
	536	C12	IVa	深体	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	290				
	537	B13	IV	深体	口一刷	ミガキ	ミガキ	qz	褐色	1903他				
	538	B13	IV	深体	口一刷	ナデ	fl.qz	にぶい黄褐色	1420他	スヌ付				
104	539	E23	IIIb	深体	口一刷	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	1194他				
	540	C13	IV	深体	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	1317他				
	541	C11-C14	IV	深体	口縫	ナデ	工具によるナデ	水褐色	1914他					
	542	C20	IIIb	深体	口縫	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	2218他				
	543	C20	IVa	深体	口縫	ナデ	ナデ	qz	褐色	2125他				
	544	C18	IV	深体	口一刷	ナデ	工具ナデ	qz	黒褐色	7345他				
105	545	C11	IV	深体	口縫	ナデ	ナデ	qz	明黄色	2709他				
	546	D18	IVa	深体	肩部	工具ナデ	ho.nz	にぶい褐色	5711他					
	547	D19	IVa	深体	口縫	ナデ	fl.qz	黒褐色	7345他					
	548	C23-222	IVa,b	深体	口一刷	ヘミミガキ	ヘミミガキ	qz	黒褐色	5631他	スヌ付			
	549	D21	IIIb	深体	口縫	ミガキ	ミガキ	fl.qz	褐色	6145				
	550	C16	IV	深体	口縫	ミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	2710	スヌ付				
106	551	D20	IIIb	深体	口縫	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	6763				
	552	C20	IVa	深体	口縫	ナデ	ミガキ	黒褐色	6386	朱塗あり				
	553	C20	IV	深体	口縫	工具ナデ	ミガキ	黒褐色	122					
	554	D22	IVa	深体	口縫	ナデ	ミガキ	黒褐色	8192他					
	555	D21	IVa	深体	口縫	ナデ	ミガキ	黒褐色	7204					
	556	C15-16	IV	深体	口一刷	ナデ	ミガキ	黒褐色	274他	スヌ付				
107	557	C22	IVa	深体	口縫	ナデ	fl.qz	水褐色	1713					
	558	D21	IIIb	深体	口縫	ナデ	ミガキ	明赤褐色	5686					
	559	D21	IIIb	深体	口縫	ナデ	ミガキ	暗赤褐色	6153					
	560	C20	IVa	深体	口縫	ナデ	ヘラケズリ	褐色	2054					
	561	D18	IVa	深体	口縫	ナデ	ミガキ	褐色	5422					
	562	C19	IIIb	深体	口縫	ナデ	ヘラミガキ	褐色	2545					
108	563	E23	IIIb	深体	口縫	ナデ	ヘラミガキ	褐色	10箇所中6箇					
	564	D21	IIIb	深体	口縫	ナデ	工具ナデ	黒褐色	6138					
	565	D19	IIIa	深体	口縫	ナデ	工具ナデ	黒褐色	6227					
	566	C20	IVa	深体	口縫	ナデ	工具ナデ	黒褐色	2302					
	567	D22	3件	深体	口縫	ミガキ	ミガキ	にぶい黄色	25					
	568	D22	3件	深体	口縫	ミガキ	ミガキ	黒褐色	19					
109	569	D21	N	深体	口縫	ナデ	ミガキ	にぶい赤褐色	6048					
	570	D21	IVa	深体	口縫	ナデ	ミガキ	黒褐色	7208					
	571	D21	IIIb	深体	口縫	ナデ	ヘラミガキ	黒褐色	6189					
	572	E23	IIIb	深体	口縫	ミガキ	ヘラミガキ	明赤褐色	1142					
	573	C18	IV	深体	口縫	ナデ	ミガキ	明赤褐色	3553					
	574	C16	IV	深体	口縫	ナデ	ミガキ	にぶい黄褐色	265					
109	575	C16	N	深体	肩部	ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐色	205					
	576	C22	3件	深体	肩部	ヘラケズリ	ナデ	褐色	100					
	577	E23	IIIb	深体	肩部	クズリ	ナデ	にぶい褐色	1173					
	578	C23	3件	深体	肩部	クズリ	ナデ	褐色	74					
	579	C23	IVa	深体	肩部	クズリ	ナデ	褐色	5136他					
	580	C23	IVa	深体	肩部	クズリ	ナデ	褐色	5139他					
109	581	D2	IIIb	深体	肩部	クズリ	ナデ	黒褐色	6130					
	582	C20	IVa	深体	肩部	クズリ	ナデ	黒褐色	1915					
	583	(C-35)22	IIb	深体	肩部	クズリ	ナデ	黒褐色	-					
	584	C-220	IVa	深体	肩部	クズリ	ナデ	黒褐色	16他					
	585	C13	IV	深体	肩部	クズリ	ナデ	黒褐色	2546他					
	586	D21	IVa	深体	口縫	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色	6697					
109	587	E23	IIIb	深体	口縫	ミガキ	ミガキ	褐色	2806					
	588	C19	IVa	深体	口縫	ミガキ	ミガキ	褐色	5396					
	589	C16	IV	深体	口縫	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色	260他					
	590	C22	IVa	深体	口縫	ナデ	ナデ	褐色	3433					
	591	C13	IV	深体	口一刷	ミガキ	ガガキ	黒褐色	1451他					
	592	B12	IV	深体	口一刷	ミガキ	ガガキ	黒褐色	1468他	人佐				
109	593	C20	IVa	深体	口一刷	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	6383他					
	594	D20-21	IIIb	深体	口一刷	ミガキ	ガガキ	黒褐色	6672他					
	595	D20	5件	深体	口一刷	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	12他					
	596	C16	IV	深体	口一刷	ミガキ	ミガキ	新灰黄色	268					
	597	C2	IIIb	深体	口一刷	ミガキ	ミガキ	黒褐色	6541					
	598	C2	IVa	深体	口一刷	ミガキ	ミガキ	黒褐色	6949他					

第20表 繩文土器観察表 (2)

辨認番号	遺物番号	出土区	層位	分類	種類	廣 規		胎土	色 調		取上番号	備考
						外 面	内 面		外 面	内 面		
109	599	T20	III b	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6727	
	600	C30	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐褐色	19668	
	601	C18	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい褐色	2395	
	602	C13	3位	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	-	
	603	D19	IV a	浅鉢	口・腹	輪ナデ	ナデ	qz	黒褐色	胎灰褐色	5621	
	604	C21	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい褐色	胎灰褐色	1955	
	605	C16	IV	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2396	
	606	D22	3位	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	61	
	607	I20	III b	浅鉢	口・腹	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	6730	
	608	C12	IV	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz,he	暗灰褐色	灰褐色	752	
110	609	C23	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz,he	灰青褐色	褐色	1574他 入佐	
	610	J22	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	7971	
	611	D19	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5657他 入佐 孔有り	
	612	D21	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6647	
	613	C14	IV	浅鉢	口・腹	ミガキ	ナデ	qz,lu	暗灰褐色	暗灰褐色	2134	
	614	T21	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	胎灰褐色	6995他	
	615	D20	5位	浅鉢	口・腹	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	37	
	616	C20	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	明赤褐色	にぶい黄褐色	1983	
	617	D19	III b	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	暗灰褐色	6300他	
	618	C21	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	1840	
111	619	D20	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐灰色	6465	
	620	D19	IV a	浅鉢	口・腹	工具ナデ	工具ナデ	qz	切削褐色	切削褐色	5416	
	621	C16	IV	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	胎灰褐色	胎灰褐色	1193他	
	622	D21	4位	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	23	
	623	D18	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5718	
	624	J21	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6058	
	625	D18	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	暗灰褐色	暗灰褐色	5362	
	626	C20	IV a	深鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	1951	
	627	C20	IV a	深鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	197他	
	628	C13-15	IV	束	工具ナデ	工具ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	1978他		
112	629	C16	IV	浅鉢	口・腹	ケズリ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	4617	
	630	C14	IV	浅鉢	口・腹	工具ナデ	工具ナデ	qz,ho	暗赤褐色	暗赤褐色	1901他	
	631	C19	III b	鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz,lu	半褐色	にぶい褐色	6177	
	632	C20	IV a	浅鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz	暗赤褐色	にぶい赤褐色	1919	
	633	C20	IV a	浅鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	2130他	
	634	D21	IV a	要	口・腹	ケズリ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6680	
	635	C14	IV	要	口・腹	ハメキ	ナデ	qz	暗褐色	にぶい褐色	5440	
	636	C21	III b	要	口・腹	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	6542	
	637	B15	IV	要	口・腹	ナデ	ナデ	qz	褐色	明褐色	432	
	638	C16	IV	要	口・腹	工具ナデ	工具ナデ	qz	暗褐色	暗褐色	1775	
113	639	C22	IV a	要	口・腹	ナデ	ナデ	qz,lu	黒褐色	黒褐色	1719	
	640	C21	III	体	口・腹	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	6530	
	641	D21	4位	体	口・腹	ナデ	ナデ	qz,lu	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	139他	
	642	D21	IV a	体	口・腹	ナデ	ナデ	qz,lu	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	6602	
	643	E23	III b	浅鉢	口・腹	工具ナデ	工具ナデ	qz	にぶい褐色	半褐色	1187	
	644	C18	IV a	浅鉢	口・腹	工具ナデ	工具ナデ	qz,ho	にぶい黄褐色	暗灰褐色	2524他	
	645	C16	IV	浅鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	明赤褐色	2387	
	646	D22	3位	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミナナデ	qz	半褐色	半褐色	33	
	647	6位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ナデ	qz,lu	にぶい褐色	にぶい褐色	一系		
	648	C21	IV a	浅鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz,ho	褐色	褐色	1855	
114	649	D20	III b	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	暗灰褐色	にぶい褐色	6764 黒色系研	
	650	D21	4位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ハラミガキ	qz	暗灰褐色	にぶい赤褐色	160他	
	651	D21-22	4位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ハラミガキ	qz	明赤褐色	明赤褐色	146	
	652	D21-22	4位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	90	
	653	D21-22	4位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ナデ	qz	暗褐色	暗褐色	70 丹の付着	
	654	D21	IV a	浅鉢	口・腹	工具ナデ	工具ナデ	qz	黒褐色	褐色	6589	
	655	E23	III b	浅鉢	口・腹	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	713	
	656	D21	4位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ヨコナデ	qz	黑色	黑色	6446 赤色系付着	
	657	D22	IV a	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	5864	
	658	D22	III b	浅鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい赤褐色	明黄褐色	5854	
115	659	E24	表層	鉢	口・腹	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
	660	4位	浅鉢	口・腹	ハラミガキ	ナデ	qz,lu	黒褐色	黒褐色	31他	赤色系付着	
	661	C18	IV a	深鉢	底感	ミガキ	ミガキ	flaz	黒褐色	黒褐色	2515	
	662	C18	IV a	深鉢	底感	工具ナデ	工具ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	2453他	
	663	D21	III b-IV a	深鉢	底感	ナデ	ハメキ	flaz,lu	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	6653他	
	664	C18	IV a	深鉢	底感	ハケメ	工具ナデ	flaz	褐色	褐色	2363	
	665	C20	IV a	深鉢	底感	T.工具ナデ	ナデ	qz	灰褐色	明黄褐色	2049他	
	666	C22	IV a	深鉢	底感	ナデ	工具ナデ	flaz,lu	明水槽色	明水槽色	1735	
	667	C20	IV a	深鉢	底感	ナデ	ナデ	qz,lu	褐色	浅黄色	5269	
	668	D20	IV a	深鉢	底感	ナデ	ナデ	qz	浅黄色	浅黄色	8134	
116	669	C22	IV a	深鉢	底感	工具ナデ	ナデ	qz,lu	褐色	にぶい褐色	5262	
	670	C21	IV a	深鉢	底感	ナデ	ナデ	flaz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3372	
	671	C18	IV a	深鉢	底感	T.工具ナデ	ナデ	qz,lu	明黄褐色	明黄褐色	2409	
	672	C20	IV a	深鉢	底感	ナデ	ナデ	flaz	にぶい褐色	にぶい褐色	3228	
	673	C19	IV a	深鉢	底感	ナデ	ナデ	qz	明黄褐色	明黄褐色	2744	
	674	J22	3位	深鉢	底感	工具ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい黄褐色	24他 炭化物付着	
	675	E23	表層	深鉢	底感	ナデ	ナデ	flaz,lu	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	38 炭化物	
	676	3位	深鉢	底感	鋸正官	ナデ	flaz,lu	浅黄色	暗黃色	暗黃色	38 炭化物	

石器

北原中遺跡のⅢ・Ⅳ層からは縄文晩期の土器と共に、石鎌・スクレイパー・石錐・石核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・輕石製品などが出土した。

石材は黒曜石・貞岩・安山岩・チャート・瑪瑙・花崗岩・砂岩などであり、黒曜石は肉眼的観察により県内産の三船・上牛鼻・平木場、県外産の腰岳・椎葉川などがみられた。

石鎌 (第115図、677~702)

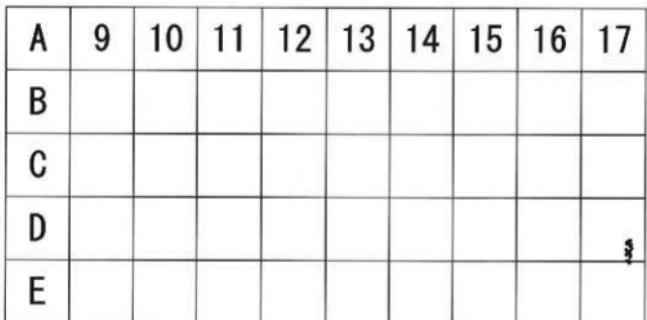
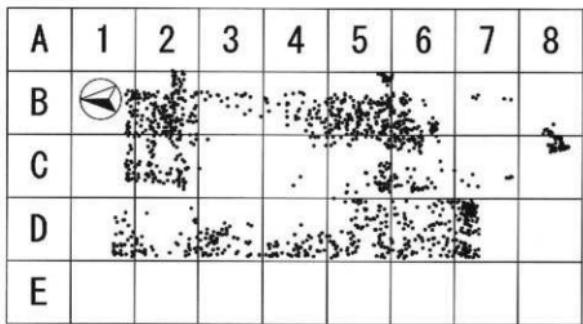
北原中遺跡の4層からは、17点の石鎌が出土した。様々な素材が用いられており、五角形鎌が9点、平基鎌が5点その他形状の石鎌が3点と3タイプに分類し、鷲ヶ迫遺跡同様の分類を行った。

677と678は黒曜石を用いており、677は三船産黒曜石、678は椎葉川産黒曜石を素材としている。677はやや小型で、左側刃がわずかに鋸歯状を呈している。678は、側刃が外弯し、張り出しがあまり目立たない。右側刃は鋸歯状の調整剥離が施されている。679は貞岩を用いている。側刃が直線的で、わずかに鋸歯状を呈する。逆刺はやや丸く、側刃下部に張り出しを持つ。680・681はハリ賀安山岩を用いている。680は側刃が弯曲し、側刃下部に張り出しを持つ。逆刺はするどい。681は側刃の上部に張り出しが作られ、逆刺は鈍く、粗いタッチで調整が施されている。682は、暗緑灰色のチャートを用いている。側刃がわずかに内弯し、下部に張り出しをもつ。逆刺は丸く鈍い。683・684は安山岩を用いている。683は脚部付近の側刃に、深い剥離を施し張り出しを作っている。粗いタッチの剥離により、側刃に鋸歯状を呈している。684は、側刃下部にごくわずかな張り出しがみられる。側刃は直線的で逆刺は丸い。685は淡黄色の瑪瑙を用いているが、上部は欠損している。側刃中央部に張り出しを呈するが、左右非対称である。五角形鎌は逆刺に若干の差がみられるが、いずれも浅く、広い抉りを呈している。686~691は平基鎌である。686・688は玉髓を用いている。686は粗く調整剥離が施されており、側刃は不規則な波状を呈している。逆刺は鈍く丸い。

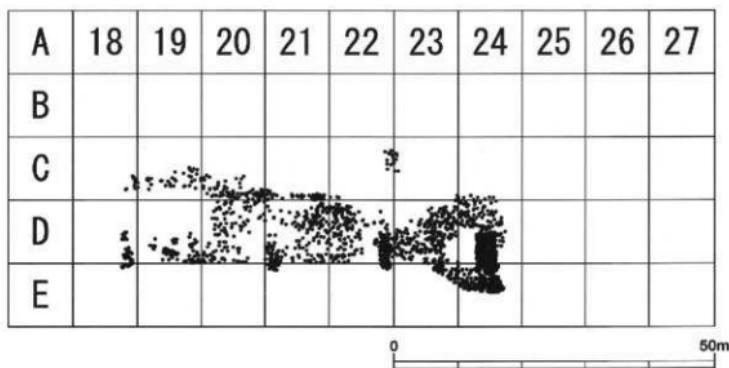
688はほぼ正三角形を呈しており、側刃はわずかに外弯する。調整痕により鋸歯状を思わせる。687はハリ賀安山岩を用いている。側刃の中央部にわずかな角があり、五角形鎌を思わせる形態である。逆刺は丸い。689・691は先端部が欠損している。いずれも安山岩を用いている。689は大まかな調整により側刃が作られており、やや外弯する。鋸歯状を呈しているように見える。691はやや小型で、側刃の中央部から大きく外弯している。その他の形状の石鎌は、690・692・693の3点である。690は安山岩を用いやや厚みがある。側刃が外弯し逆刺は丸い。抉りが2箇所の剥離によって浅く作られており、アルファベットの「M」を呈している。692は安山岩を用いており、先端部が欠損したものである。側刃部が直線状を呈しているが、左右の脚部に大きく差がみられる。693は上牛鼻産黒曜石を用いている。側刃が直線を呈し、先端部が欠損しているようにみえるが、細かな調整剥離により、逆刺が形成されていることが観察された。右脚部が欠損している。

Ⅲ層からは9点の石鎌が出土した。鋸歯状のもの1点、五角形鎌6点、欠損品2点である。

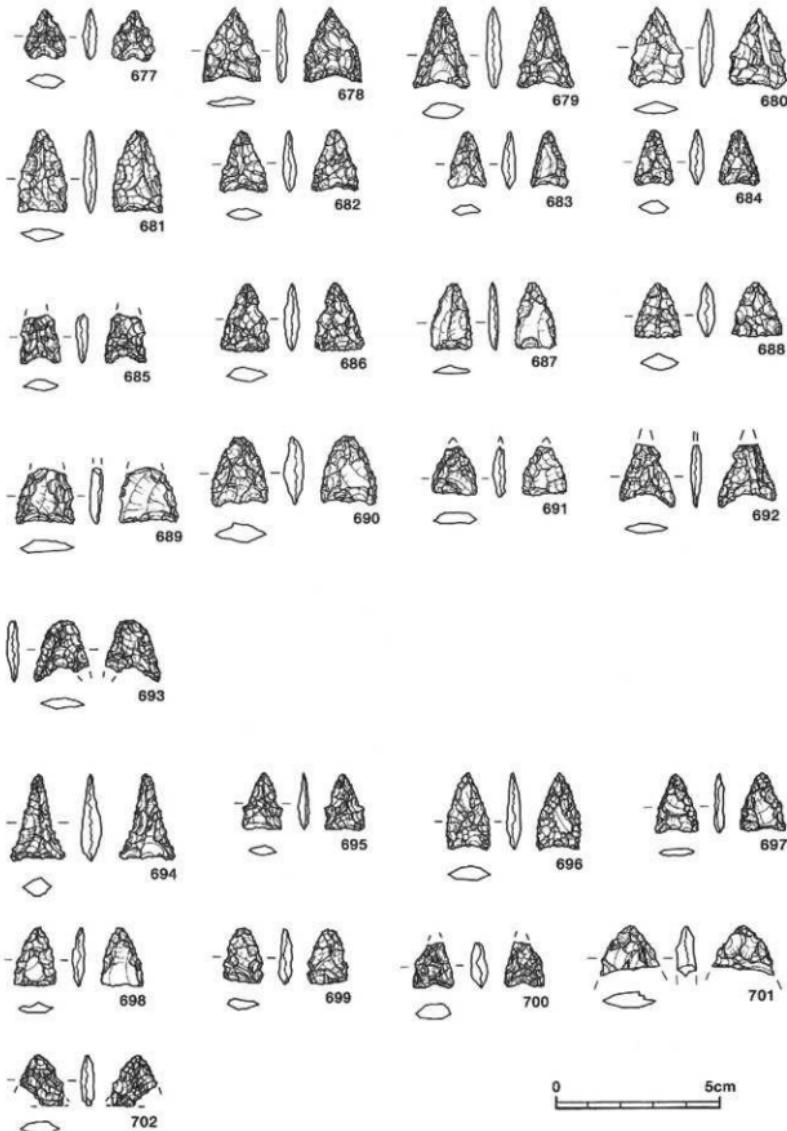
694は貞岩を用いたやや厚みのあるものである。側刃が内弯し、表裏からの調整剥離により、わずかに鋸歯状を呈する。抉りは浅く大まかな剥離によって不規則につくられている。695~699は五角形鎌である。695~697は、浅い抉りの入ったものである。いずれも暗青灰色のチャートを用いている。側刃部が直線状を呈し、695は張り出しが特に強い。698・699は平基の五角形鎌である。698は、暗緑色のチャート、699はハリ賀安山岩を用いている。側刃部での調整が粗く、わずかに張り



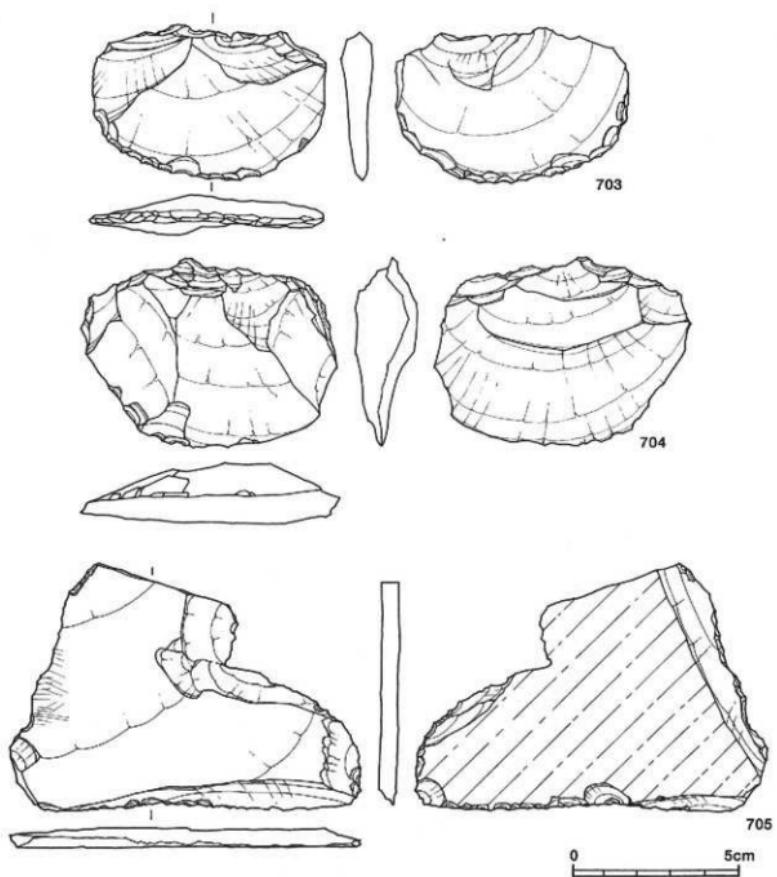
第113図 石器出土状況 (1)



第114図 石器出土状況（2）



第115図 石鱗

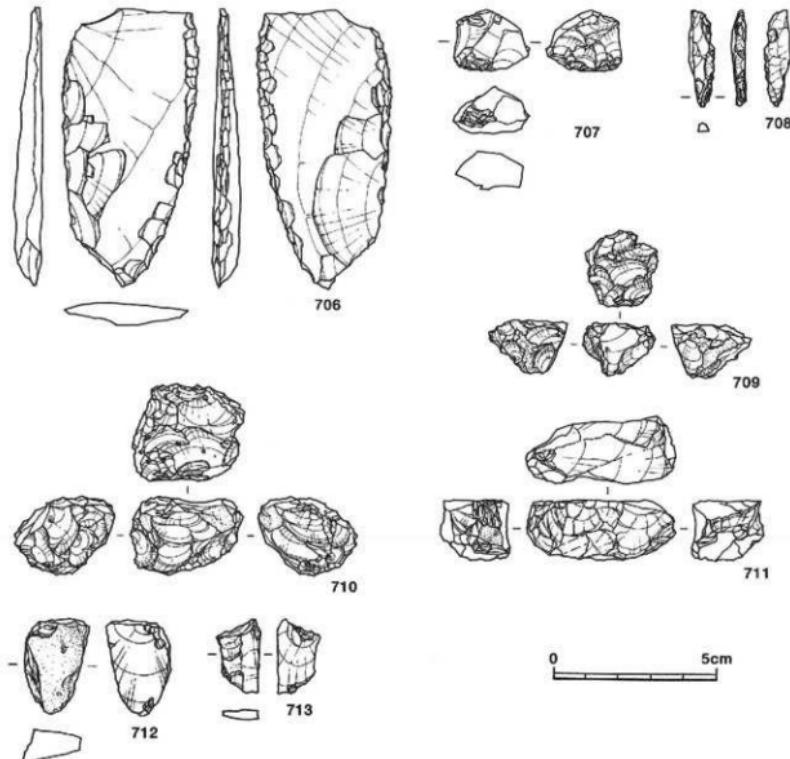


第116図 スクレイパー (1)

出しを持つ。いずでも逆刺は丸い。700～702は欠損品である。700は桑ノ木津留産黒曜石を素材とし先端部が欠損している。調整が粗く側刃が不定形である。浅く抉りが入り、断面に厚みがある。701は乳白色の瑪瑙を用いた先端部のみ残るものである。側刃が外弯し逆刺が丸い。調整が粗く、右側刃には階段状の剥離がみられる。702は、三船産黒曜石を用い、左脚部を欠損したものである。側刃が外弯し、上部は鋸歯状を呈する。

スクレイパー（第116・117図、703～706）

4点出土した。頁岩を用いたもの3点、粘板岩1点である。厚みは薄く幅広の剥片を用いている。703・704は半円に近い形状の横長剥片を用いている。いずれも右側刃から下刃、右側刃にかけて刃



第117図 スクレイパー（2）・二次加工剥片・石錐

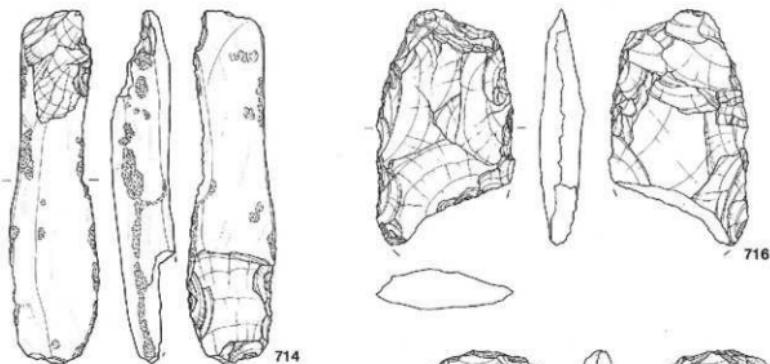
部が形成されており、703は表裏から704は裏面からの調整によるものである。705は、幅の広い粘板岩の縦長剥片を用い、表面には、サビを含む節理面を有する。下辺に表裏からの調整により、刃部が作られる。706は黒色頁岩の縦長剥片を縦位に用い、両側辺に刃部を有するものである。連続性のある表裏からの調整によって刃部が形成され、また右側辺に使用痕がみられる。

二次加工剥片（第117図、707）

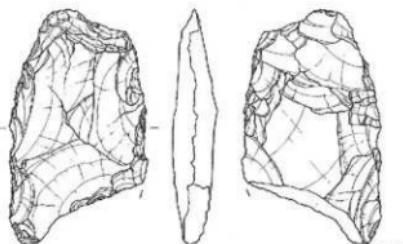
1点出土した。節理面を有する玉髓を用いており、下辺に階段状の剥片がみられる。使用痕と思われるつぶれがみられ、スクレイパーの可能性も考えられる。

石錐（第117図、708）

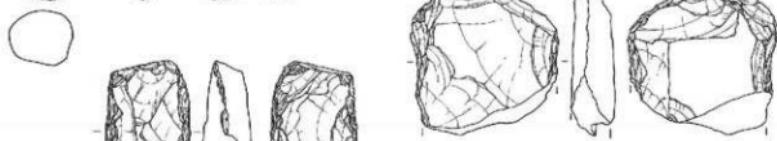
1点出土した。灰色のチャートの縦長剥片を用いており、錐部に細かな調整がみられる。左側辺は切断されており、右側辺には裏面からの調整剥離によりスクレイパーのような刃が形成されている。転用品の可能性がある。



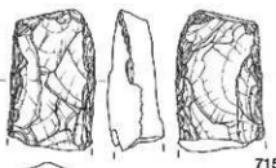
714



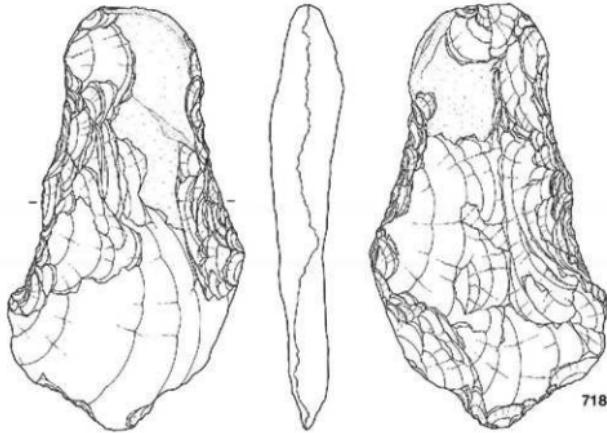
716



717



715

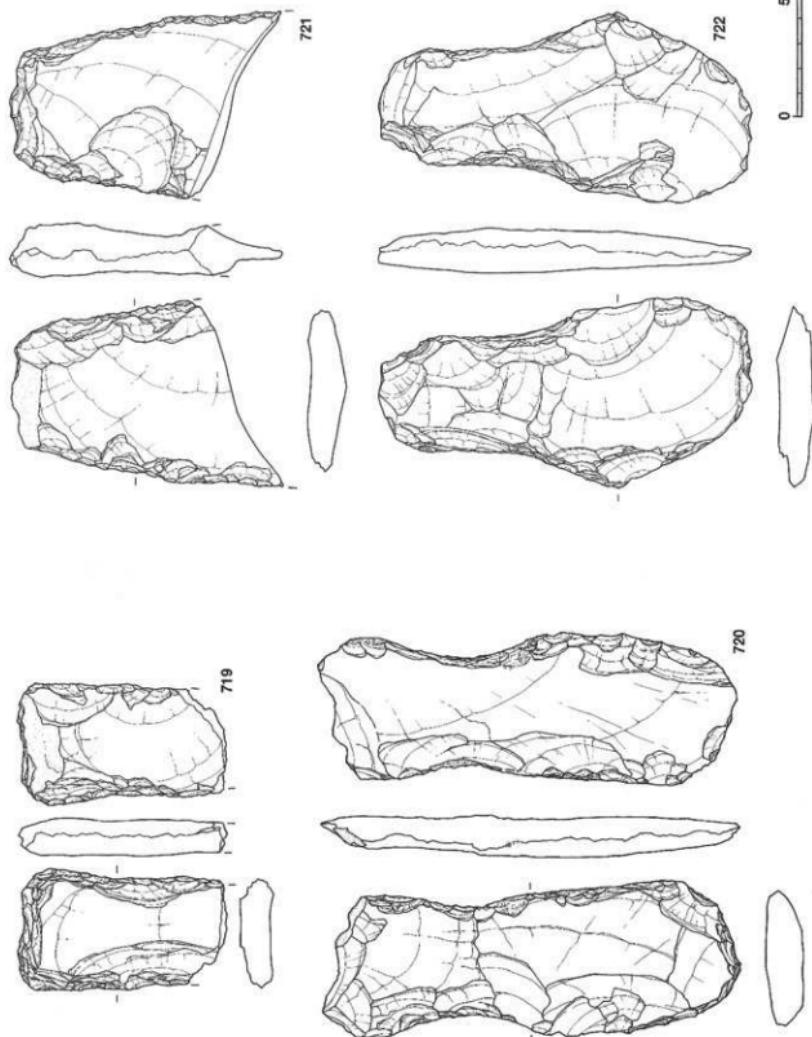


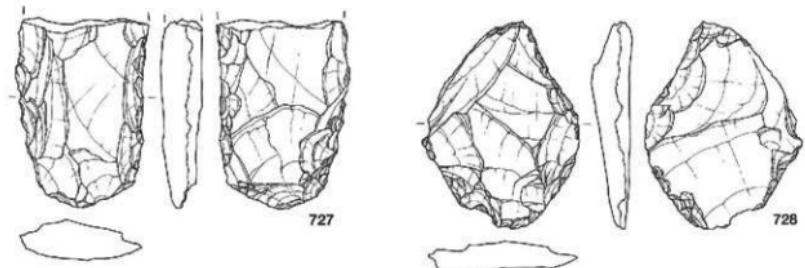
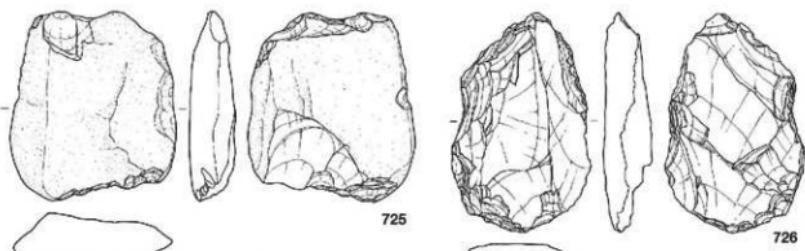
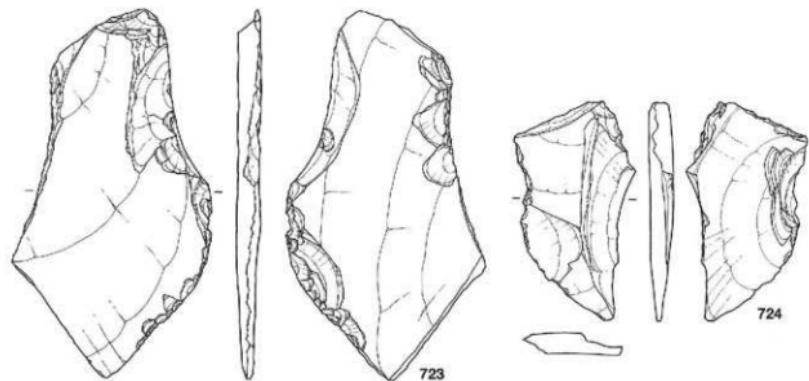
718

0 5cm

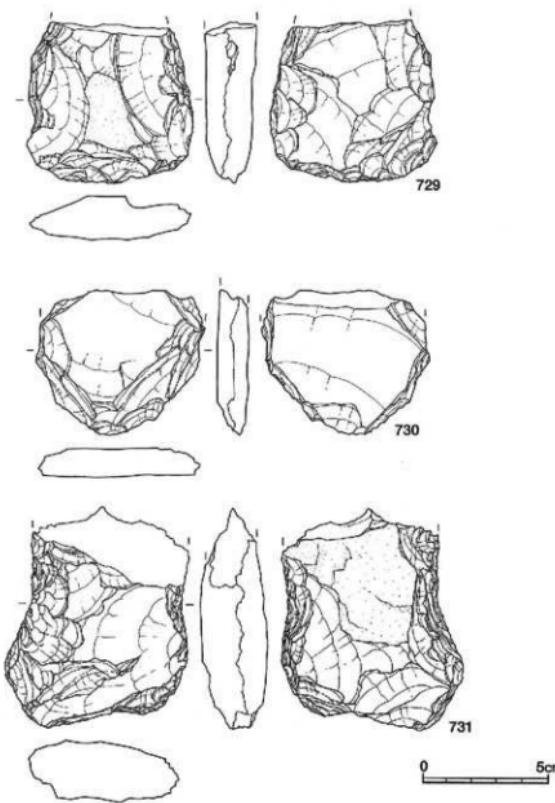
第118図 磨製石斧・打製石斧(1)

第119圖 打製石斧 (2)





第120図 打製石斧 (3)



第121図 打製石斧 (4)

石核 (第117図, 709~711)

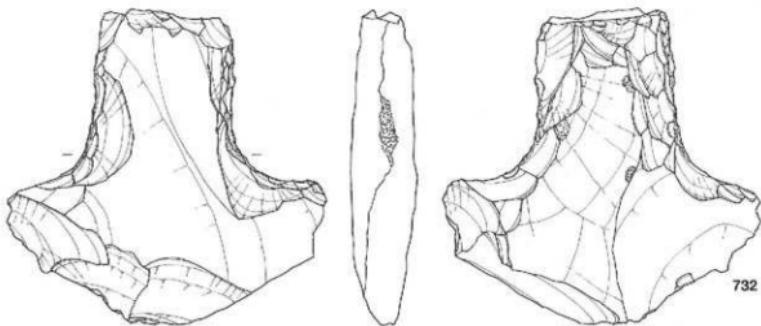
小型の剥片石器製作を目的とした素材剥片の獲得に利用されたと考えられる石核が3点出土した。709・710は自然面や気泡の多い粗雑な三船産黒曜石を素材にしている。打点に規則性はみられない。711は縦長剥片を用い、主要剥離面をプラットホームにしている。

使用痕剥片 (第117図, 712・713)

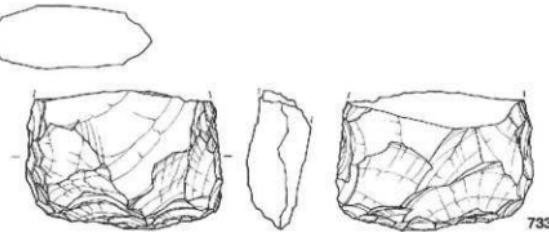
712は自然面を有する腰岳産黒曜石、713は安山岩を素材とし、いずれも縦長剥片を用いている。712は、側辺に微細剥離がみられ、713は、上部と下部に微細剥離が上部には階段状剥離がみられる。

石斧 (第118~122図, 714~734)

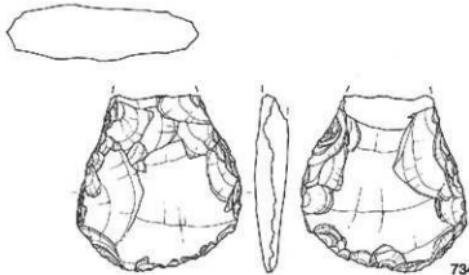
磨製石斧1点、打製石斧(完形)6点、欠損品14点が出土した。全て頁岩を用いている。



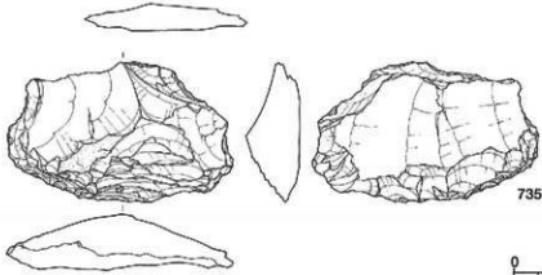
732



733



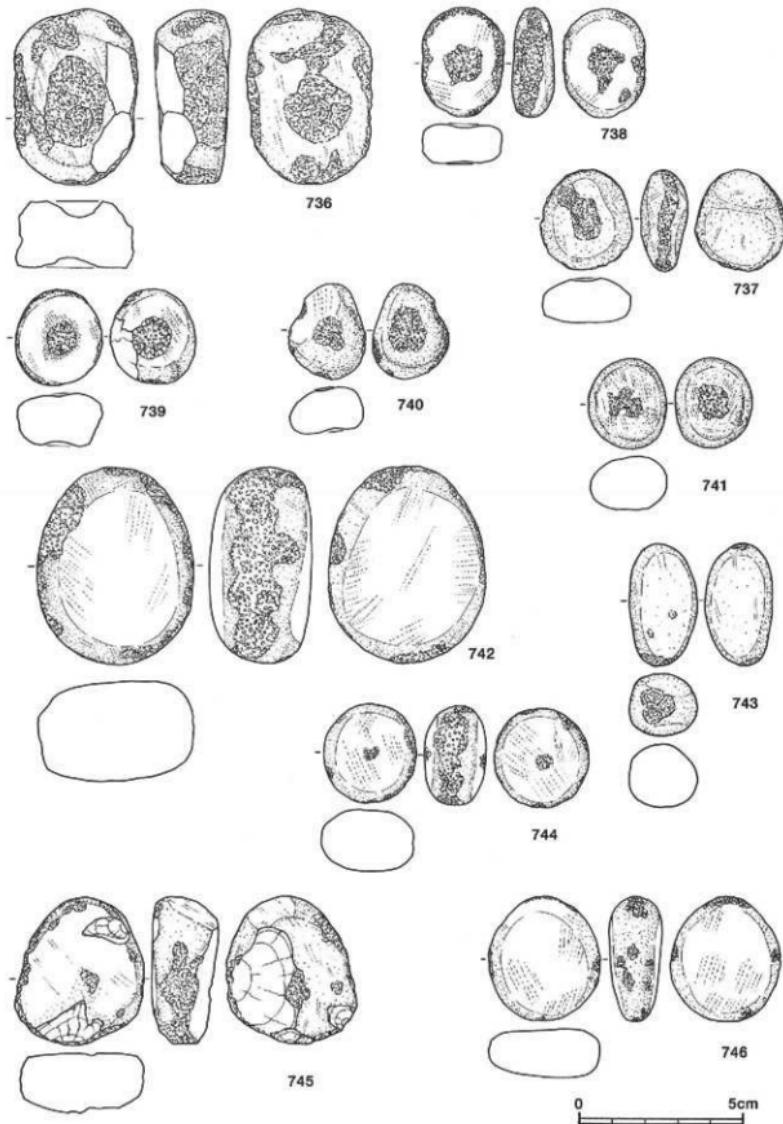
734



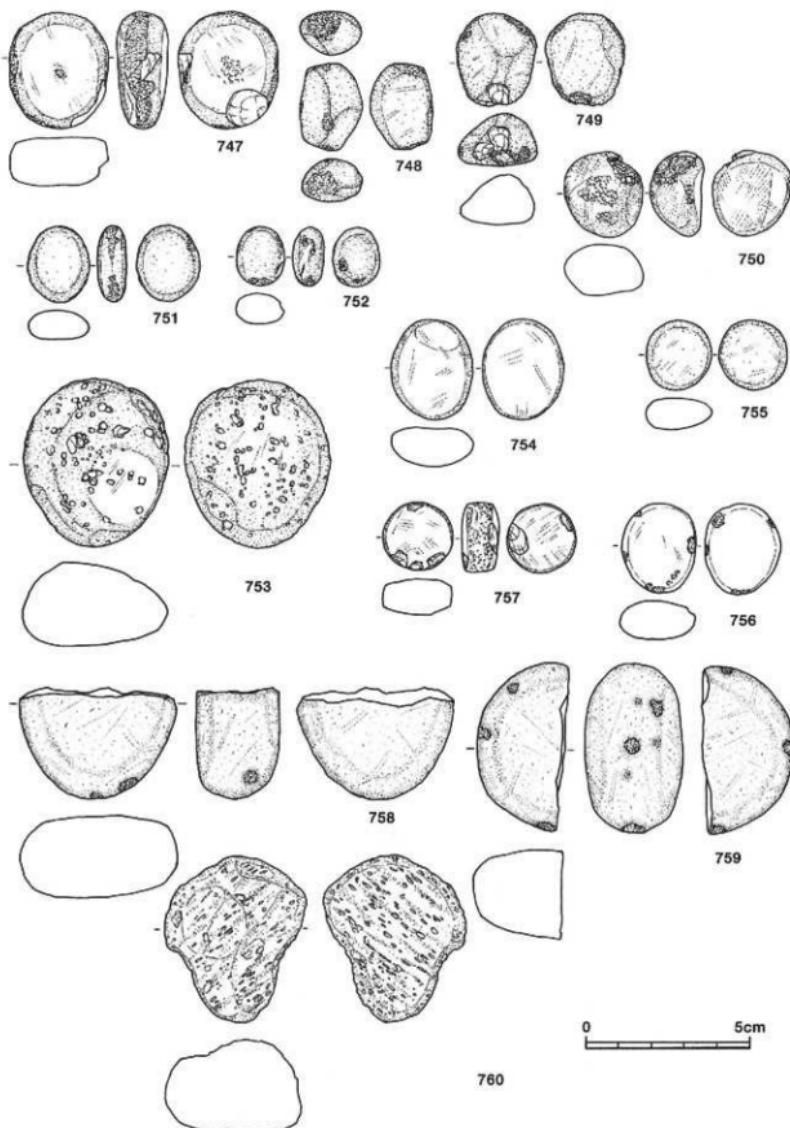
735

0 5cm

第122図 打製石斧(5)・礫器



第123図 凹石・敲石



第124図 敷石・磨石・軽石製品

714は、短冊形を呈する磨製石斧である。側刃が敲打により形成されており、その後全体を入念に研磨している。裏面の刃部が大きく欠損しているが、表面の刃部が残り使用によるぶつれが観察できた。718・720・722～724・732は、打製石斧の完成品である。石材の性質上、薄手でやや粗雑な調整が目立つ。718・720・722～724は有肩石斧である。718・720・722は両肩部から下側刃にかけて使用痕がみられる。723・724は尖底状を呈しており使用痕が目立つため、つるはしの様に使用された可能性がある。732は肩部が広く作られ、それに伴い幅広の外弯する刃部を生ずるものである。刃部につぶれや剥離痕が多くみられる。715～717・719・721は、肩部や刃部が欠損したものである。715は、整形のための調整剥離により、側刃が階段状を呈している。柄の部分の可能性がある。716・717・719・721は、有肩石斧か短冊型の石斧が判断できなかった。725～731・733・734は、基部の欠損するものである。いずれも粗雑な調整により刃部が形成されており、階段状を呈するものである。731と734は有肩石斧であろうと判断できた。

礫器（第122図、735）

礫器は1点出土した。正面の一部に自然面を有し粗いタッチで剥離により刃部を作り出している。刃部の中央に使用痕がみられる。

凹石・敲石・磨石（第123・124図、736～759）

一個体的に見て、凹み・敲打・研磨がみられるものがあるが、鷲ヶ迫遺跡同様著しく表れている使用痕により遺物を判断した。大きさに統一性はなく、主に花崗岩と安山岩を素材としている。

736～741は、凹石である。花崗岩の円盤・楕円盤を用いている。736は表裏の中央に敲打により凹みが深く入っている。側刃のほぼ全面に敲打痕が残り擦痕が弱く残る。737～739は、やや小型であるが、736と同様の使用痕がみられる。裏面は強い研磨により稜が形成されている。741は、表裏に敲打による浅い凹みと擦痕を有する。側刃に敲打痕はみられない。

742～752は、敲石である。花崗岩を素材としているが751は砂岩の小形の円盤を用いている。

742・743は側刃部に敲打痕が集中し表裏面に擦痕を有する。744は楕円形の礫を用い上部と下部に敲打痕がみられる。全体に弱い擦痕が残る。745は、いたる所に敲打痕がみられ、表裏面に強く擦痕が残り敲打による剥離痕がみられる。746・747は側刃部に敲打痕がみられ、表裏面に弱い擦痕を有する。748・749は不定形な礫を用い上面と下面に敲打痕がみられる。正面は自然面が残り裏面に強く擦痕が残る。750・751は小形の円盤を用い、側刃に敲打痕がみられたが、擦痕は観察できなかった。752は右上部が敲打により大きく破砕している。裏面には擦痕が強く残り稜を形成している。

753～759は磨石である。753・758・759は花崗岩を用い、754～757は安山岩を用いている。なお、758・759は欠損品である。753は、気泡の多い花崗岩を用いており、表裏面に弱く擦痕がみられる。754・755は円盤を用い表裏が強く磨き込まれている。756は、円柱状で表裏が磨き込まれている。側面は敲打の後研磨されてる。758は、表裏面にのみ研磨がみられた。758・759はほぼ全面に研磨が施され、敲打痕も観察できる。

軽石製品（第124図、760）

1点出土した。厚みがあり不定形である。表面は多方向に擦痕がみられるが、裏面には一定方向に向かって広く研磨面を呈する。

第21表 北原中遺跡縄文石器観察表(1)

標目 番号	器物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	測	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
	677	5566	打製石鏟	黒曜石三船	D19	IV	1.5	1.3	0.3	0.6	
	678	2816	打製石鏟	黒曜石種瀧川	E23	IV	2.3	1.8	0.3	1.2	
	679	2356	打製石斧	頁岩	B19	IV	2.5	1.7	0.4	1.6	
	680	6673	打製石鏟	ハリ質安山岩	D21	IV	2.4	1.6	0.4	1.4	
	681	2653	打製石鏟	ハリ質安山岩	C13	IV	2.6	1.5	0	1.4	
	682	560	打製石鏟	チャート	C14	IV	1.9	1.4	0.4	0.8	
	683	7351	打製石鏟	ハリ質安山岩	D18	IV	1.7	1.1	0.3	0.5	
	684	5522	打製石鏟	安山岩	D19	IV	1.7	1.2	0.4	0.7	
	685	1547	打製石鏟	瑪瑙	C23	IV	1.5	1.3	0.3	0.7	
	686	3729	打製石鏟	玉髓	B6	IV	2.1	1.5	0.4	1.0	
	687	6430	打製石鏟	ハリ質安山岩	D20	IV	2.1	1.3	0.3	0.7	
	688	2412	打製石鏟	玉髓	C16	IV	1.7	1.4	0.5	0.9	
115	689	2310	打製石鏟	安山岩	C15	IV	1.8	1.7	0.3	1.2	
	690	1922	打製石鏟	安山岩	C13	IV	2.2	1.7	0.5	1.8	
	691	5728	打製石鏟	安山岩	D18	IV	1.5	1.3	0.3	0.7	
	692	2429	打製石鏟	安山岩	C16	IV	1.8	1.6	0.3	0.7	
	693	6842	打製石鏟	黒曜石上半舟	D19	IV	2.0	1.6	0.3	0.8	
	694	6516	打製石鏟	頁岩	C27	IIIb	2.6	1.6	0.5	1.4	
	695	—	打製石鏟	チャート	D18-19	IIIb	1.8	1.3	0.3	0.6	
	696	7247	打製石鏟	チャート	D19	IIIb	2.3	1.3	0.4	1.3	
	697	676	打製石鏟	チャート	E23	IIIb	1.8	1.4	0.2	0.6	
	698	6194	打製石鏟	チャート	D19	IIIb	1.8	1.3	0.3	0.6	
	699	6433	打製石鏟	ハリ質安山岩	D20	IIIb	1.7	1.2	0.3	0.8	
	700	6873	打製石鏟	黒曜石桑ノ小津留	D19	IIIb	1.4	1.2	0.4	0.7	
	701	7535	打製石鏟	瑪瑙	D23	IIIb	1.4	1.8	0.5	1.2	
	702	6641	打製石鏟	黒曜石三船	D21	IIIb	1.7	1.2	0.4	0.7	
	703	5652	スクレイパー	頁岩	D19	IVa	4.9	7.2	1.0	34.0	
116	704	6426	スクレイパー	頁岩	D19	IVa	5.9	7.6	1.6	76.5	
	705	2179	スクレイパー	粘板岩	C14	IV	8.4	10.6	0.5	56.6	
	706	70	スクレイパー	黒色頁岩	D9	IV	8.7	4.1	0.8	30.9	
	707	6582	二次加工削片	玉髓	D21	IVa	2.0	2.1	1.2	4.9	
	708	6938	石錐	チャート	C23	IVa	3.0	1.8	0.4	1.0	
	709	6090	石核	黒曜石三船	D21	IIIb	1.9	2.2	2.1	7.0	
	710	7916	石核	黒曜石三船	D22	IIIb	3.1	3.2	2.0	25.2	
	711	2776	石核	チャート	C13	IV	1.9	4.5	1.8	24.0	
	712	2490	剥片	黒曜石腰斧	C15	IV	2.9	2.0	1.3	7.5	
	713	6223	剥片	安山岩	D19	IVa	1.3	1.3	0.3	1.1	
	714	7347	磨製石斧	頁岩	D19	IIIb	14.5	3.6	2.4	142.8	
	715	2495	打製石斧	頁岩	C18	IVa	5.7	3.7	2.1	63.0	
118	716	5981	打製石斧	頁岩	D21	IVa	9.9	5.9	1.6	100.9	
	717	1886	打製石斧	頁岩	C21	IVa	6.3	6.6	0.8	88.0	
	718	2093	打製石斧	頁岩	C14	IV	17.7	9.6	2.7	332.0	
	719	2418	打製石斧	頁岩	C18	IVa	8.5	5.0	1.5	96.1	
	720	5455	打製石斧	頁岩	D18	IVa	17.0	6.6	1.5	227.7	
	721	7099	打製石斧	頁岩	D22	IVa	10.6	7.9	2.0	169.8	
	722	5456	打製石斧	頁岩	D18	IVa	15.3	7.6	1.7	228.7	
	723	2703	打製石斧	頁岩	C10	IV	15.1	8.0	0.7	121.4	
	724	105	打製石斧	頁岩	D10	IV	5.4	8.5	0.8	39.7	
120	725	2556	打製石斧	頁岩	C14	IV	7.8	6.7	1.8	115.4	
	726	7733	打製石斧	頁岩	D23	IVa	9.1	5.6	1.8	105.6	
	727	106	打製石斧	頁岩	D10	IV	7.9	5.3	1.6	90.9	
	728	4673	打製石斧	頁岩	C14	IVa	6.3	7.6	1.4	69.8	
	121	729	—	打製石斧	C31	IVa	6.5	6.6	2.0	120.0	

第22表 北原中遺跡縄文石器觀察表 (2)

推定 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
121	730	2553	打製石斧	頁岩	C14	IV	6.2	7.0	1.1	66.0	
	731	1745	打製石斧	頁岩	C16	IV	9.2	7.3	2.7	184.2	
	732	7617	打製石斧	頁岩	D23	IIb	12.9	12.8	2.6	400.0	
	733	7618	打製石斧	頁岩	D23	IIb	5.4	7.9	2.0	136.1	
122	734	6484	打製石斧	頁岩	C19	IIb	7.3	6.8	1.2	72.7	
	735	6580	雞齒	頁岩	D21	IVa	5.8	8.8	2.2	93.6	
	736	2463	凹石	花崗岩	—	IV	10.7	7.7	4.5	520.0	
	737	6230	凹石	花崗岩	D19	IVa	6.2	5.6	2.7	120.0	
123	738	2508	凹石	花崗岩	C15	IV	6.8	5.0	2.5	118.1	
	739	1403	凹石	花崗岩	C14	IV	5.9	5.4	3.5	151.0	
	740	6010	凹石	花崗岩	D21	IVa	5.9	4.7	3.3	100.6	
	741	6674	凹石	花崗岩	D21	IVa	5.5	4.7	3.4	126.1	
124	742	2520	敲石	花崗岩	C1	IV	12	9.5	6.2	110.0	
	743	8023	敲石	花崗岩	D23	IVa	7.5	4.2	3.8	191.2	
	744	6204	敲石	花崗岩	D19	IIb	6.0	5.7	3.8	198.5	
	745	7803	敲石	花崗岩	D22	IVa	9.1	7.9	3.9	338.2	
125	746	6233	敲石	花崗岩	D19	IIb	7.7	6.8	3.2	240.9	
	747	6218	敲石	花崗岩	D19	IIb	7.2	6.1	3.1	207.5	
	748	6639	敲石	花崗岩	D21	IVa	5.3	3.7	2.6	14.7	
	749	7514	敲石	花崗岩	D23	IVa	5.7	4.8	3.4	98.4	
126	750	3537	敲石	花崗岩	C19	IIb	5.2	4.8	3.1	106.6	
	751	2060	敲石	砂岩	C14	IV	3.7	2.9	1.9	26.2	
	752	5457	敲石	花崗岩	D18	IVa	4.8	3.7	1.7	44.6	
	753	6959	磨石	花崗岩	D21	IVa	10.4	8.9	5.2	585.0	
127	754	7350	磨石	安山岩	D18	IVa	6.2	5.0	2.4	102.8	
	755	7353	磨石	安山岩	D18	IVa	4.4	3.9	1.9	49.4	
	756	2363	磨石	安山岩	C14	IV	5.5	4.6	2.3	81.4	
	757	6903	磨石	安山岩	D18	IIb	4.2	4.3	2.2	70.0	
128	758	5817	磨石	花崗岩	D22	IIb	7.4	10.2	5.1	499.0	
	759	5176	磨石	花崗岩	C33	IVa	11.0	6.3	5.6	530.0	
	760	—	鍛石製品	—	—	—	10.2	8.0	5.6	142.6	

第3節 古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物はⅢ a 層で検出された。遺構は竪穴C・D-7区、C・D-20~23区で竪穴住居跡が8軒検出され、その他、土坑6基、焼土1か所、溝状遺構7条が検出された。

遺物は成川式土器（壺形土器・壺形土器・高坏・堆形土器）、手捏土器と石器（石皿・砥石・台石・軽石製品）が出土した。

①H11年度 2号住居跡

2号住居跡は、C-7区、Ⅲ a 層で検出された。外径3.0m×3.0mの方形、内径は2.6m×2.1mの長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約20~30cmを測る。主軸方向はN-56°-Eである。硬化面・灰等は検出しなかった。内部では柱穴、落ち込み部を検出したが、主柱穴は不明だった。

出土遺物は壺形土器・壺形土器が若干出土したが細片であった。

②H11年度 3号住居跡

3号住居跡は、D-7区、Ⅲ a 層で検出された。外径2.8m×2.3mの内径2.5m×2.1mの隅丸長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約20~30mを測る。主軸方向はN-28°-Eである。硬化面・灰等は検出しなかった。住居内のはば中央部に90cm×60cmの約10cmの深さの土坑がみられた。柱穴は5個の検出された。30~40cmの深さの柱穴が検出された。

出土遺物は壺形土器・壺形土器が出土したが、細片であった。

③1号住居跡

1号住居跡はD-23区、Ⅲ a 層で検出された。外径2.1m×1.8m、内径1.8m×1.6mの長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30~40cmを測る。主軸方向はN-81°-Eである。東南隅に約1m幅の硬化面がみられた。

内部に柱穴・落ち込み等は検出出来なかった。

出土遺物は、壺形土器・壺形土器・塊・堆形土器等が出土した。

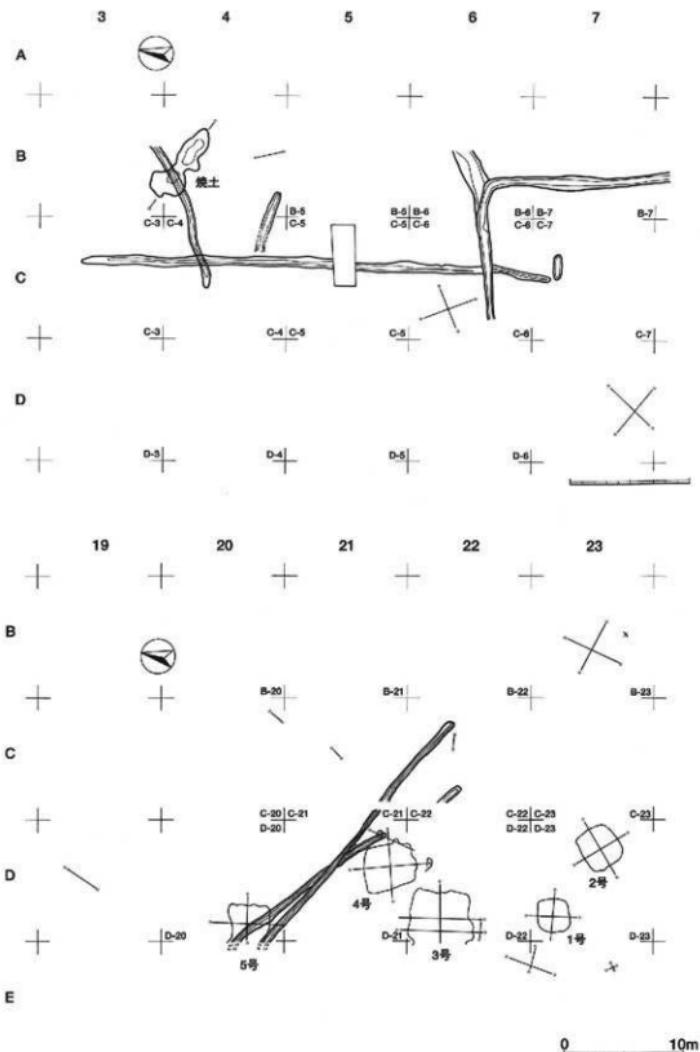
④2号住居跡

2号住居跡はD-23区、Ⅲ a 層で1号住居の東側約5mの位置にあり外径2.7m×2.4m、内径2.1m×2.1mのやや長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは40cm前後を測る。主軸方向はN-45°-Eである。南側壁面に幅30cm程の段が設けられている。内部に柱穴・落ち込み等は認められなかったが、中央部に硬化面がみられた。

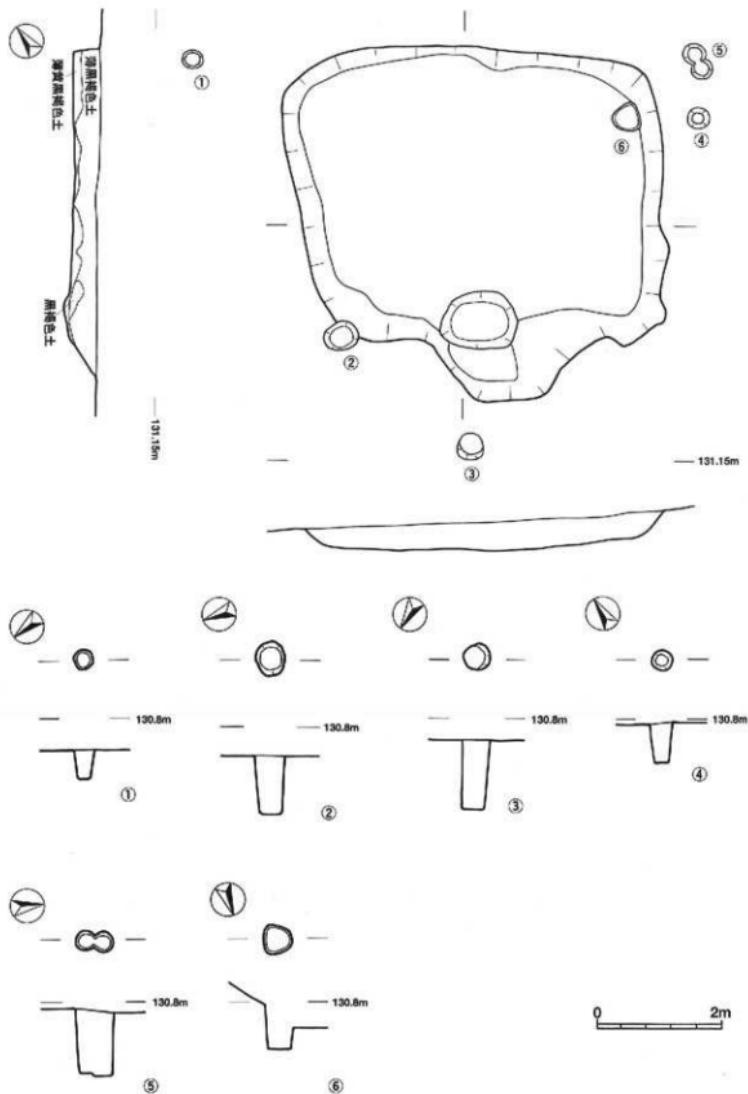
出土遺物は壺形土器・塊・高坏・堆形土器・石皿・軽石製品等が出土した。

⑤3号住居跡

3号住居跡はD-22区、Ⅲ a 層で1号住居跡の北側約9mの位置にある。プランは調査区域外の西側が延びているため判明しないが、遺構検出面からの深さは約25~35cmを測る。主軸方向はN-



第125図 古墳時代遺構配置図

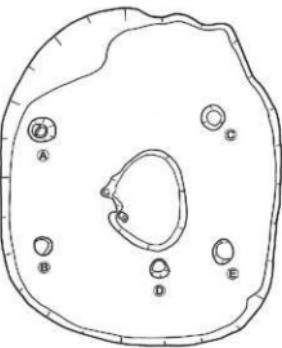


第126図 H11年度 2号住居跡

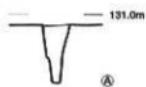
(A)



131.4m



— (B) —



B

— (C) —



C

— (D) —

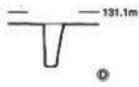


— (E) —



E

— (F) —

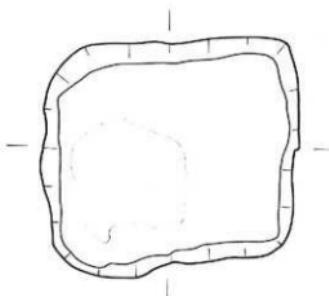
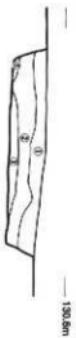


F



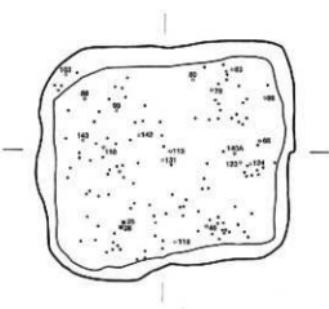
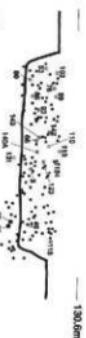
第127図 H11年度 3号住居跡

Ⓐ



- Ⓐ①：Ⅲbより黄色。Ⓐ②より明、バミスピブロックなし
Ⓐ③：Ⅲbによるバミスピブロッカホヤブロック
Ⓐ④：黒灰・炭化物。Ⅲbより良い
Ⓐ⑤：砂がこなった感じ、Ⅲa・Ⅲbブロック混じる、
樹脂etcのカクラン。Ⓐ⑥の岩が住居のカベへの可
能性もある
Ⓐ⑦：やや赤茶色の土。サラサラ感たような色の土が
5往・4往にもある

Ⓑ



第128図 1号住居跡

80° - E である。内部には20~30cmの深さを測る柱穴が3個あり、中央部には硬化面がみられる。
出土遺物は壺形土器・壺形土器が出土した。

⑥ 4号住居跡

4号住居跡は、C-21・22区、Ⅲa層で3号住居跡の北東側約4mの位置にある。外径3.4m×2.9m、内径3.0m×2.6mの方向プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約40cmを測る。主軸方向はN-15°-Wである。内部には約50cmの深さを測る柱穴が2個検出され、中央部には硬化面がみられる。

出土遺物は、壺形土器・壺形土器が出土した。

⑦ 5号住居跡

5号住居は、D-20区、Ⅲa層で4号住居跡の北西側約12mの位置にある。外径2.5m×2.4m、内傾2.1m×2.0mのはば方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30~40cmを測る。主軸方向はN-11°-Eである。硬化面・灰などは検出されず、柱穴・落ち込み等もみられなかった。

出土遺物は壺形土器・高坏・台石が出土した。

⑧ 7号住居跡

7号住居跡は、C-23区、Ⅲa層で検出された。農道との交差部で調査対象区が変則的であったため、半分程しか検出することが出来なかつた。外径の長さが5.3mとこの遺跡では大型の竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30cmであり、主軸方向はほぼ南北である。内部には柱穴等は検出されなかつたが中央部に硬化面がみられた。

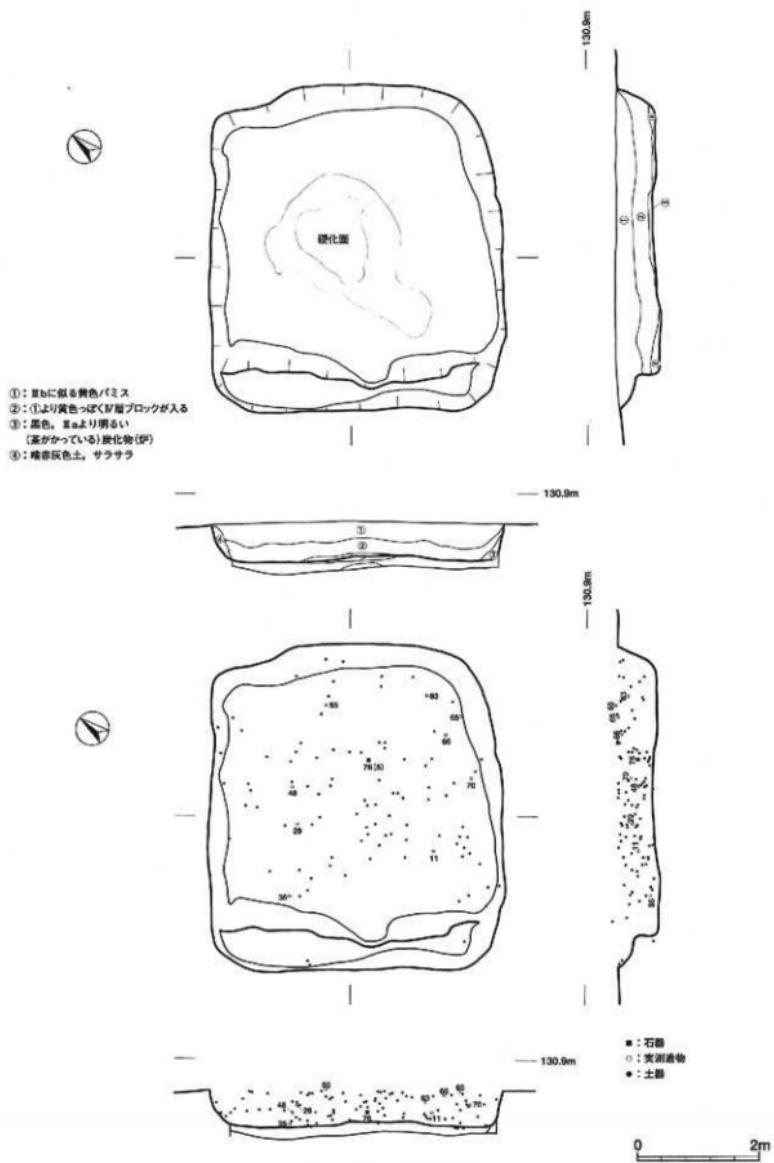
出土遺物は、壺形土器・壺形土器・砾石が出土した。

焼土

C-3・4区Ⅲa層から主軸が東西に長い5.5m×2.2mの隋円形の焼土城が検出された。中央部に炭化物も含まれているが、性格等は不明である。

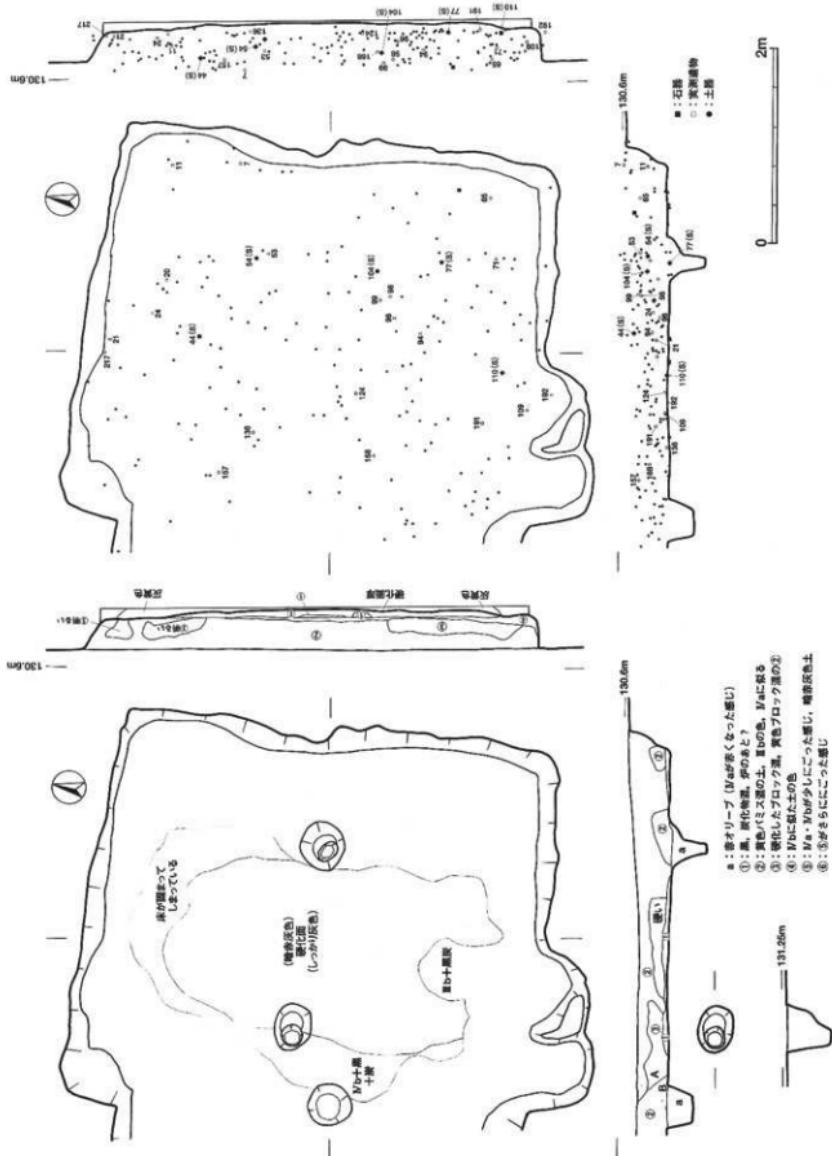
土坑

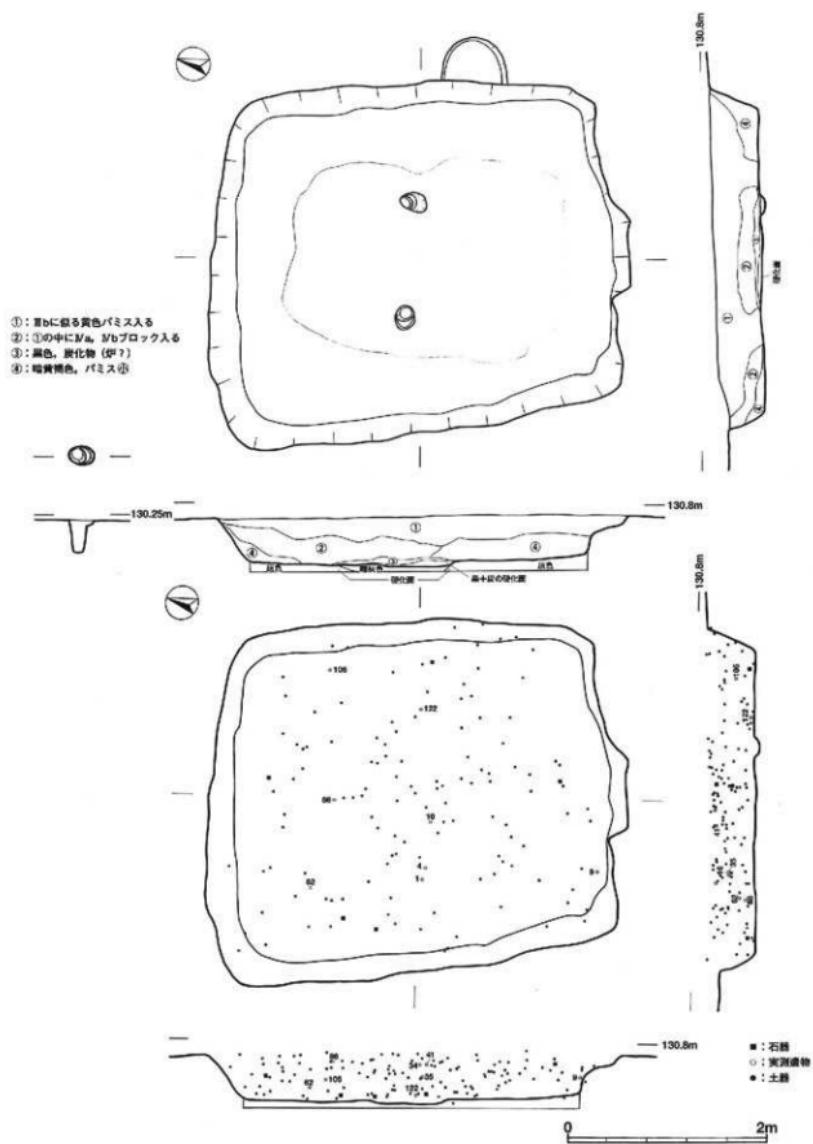
土坑は、調査区域内で6基検出した。ほぼ同タイプの土坑で直径1.5m前後の円形プランで、遺構検出面からの深さは約30cmを測る。性格等は不明である。



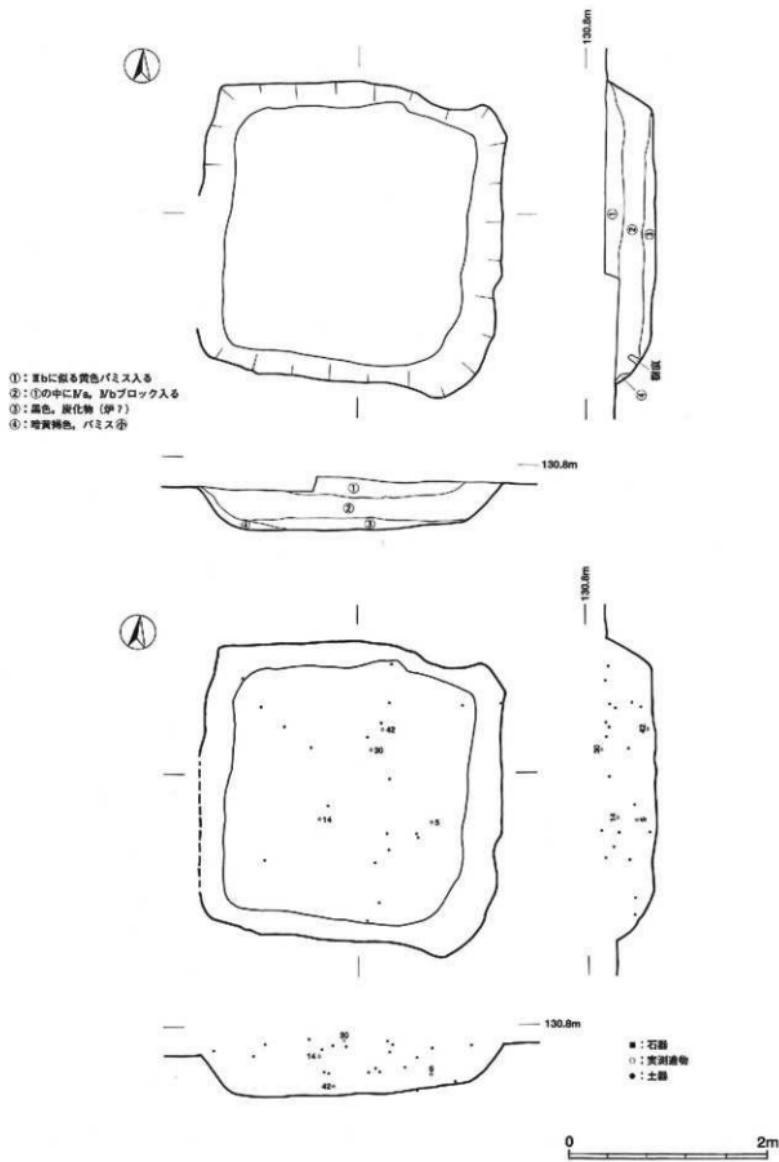
第129図 2号住居跡

第130図 3号住居跡





第131図 4号住居跡



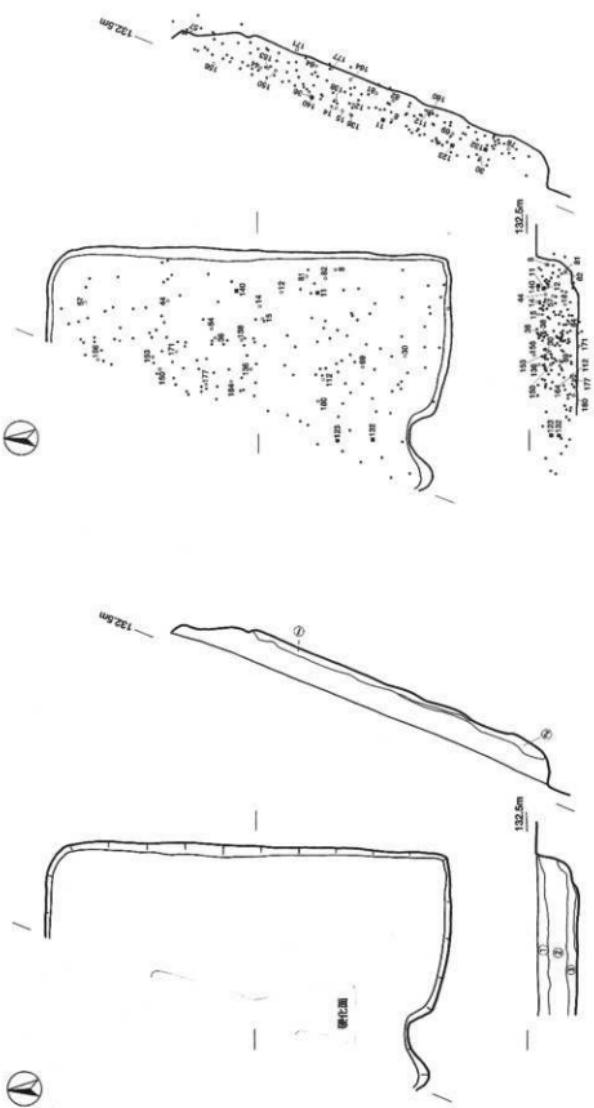
第132図 5号住居跡

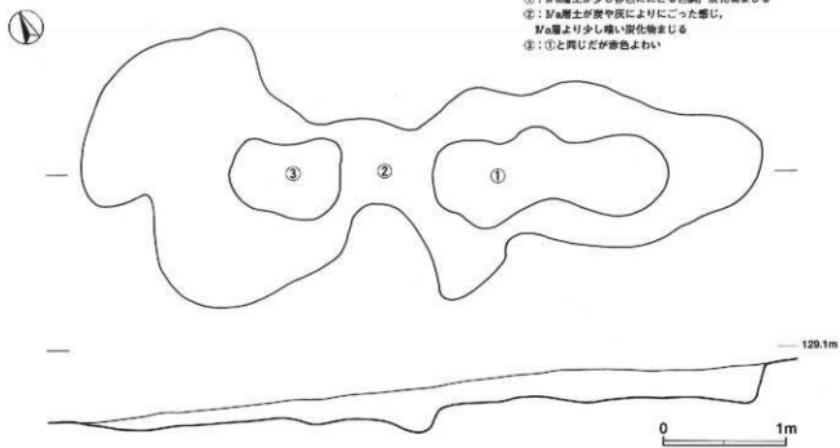
0 2m

● : 石塊
○ : 廃棄物
* : 土壠

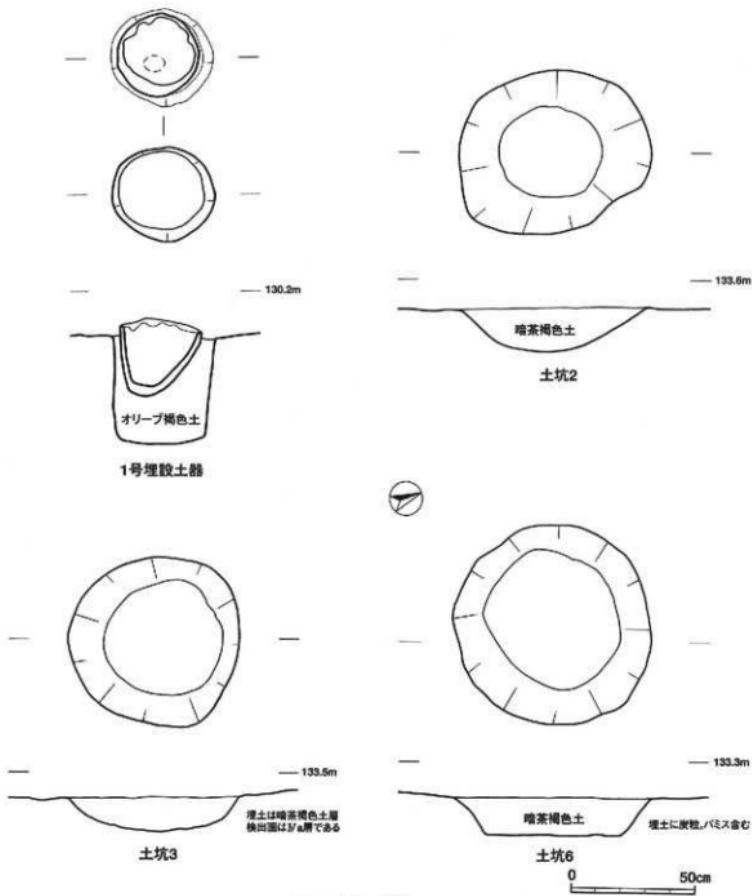
- ① : H-b-Va
- ② : H-b-Va, 鋼化ブロックを含む
- ③ : ②より大きい
- ④ : ③より大きい

第133図 7号住居跡

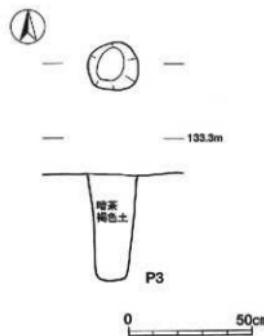
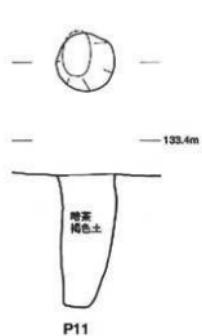
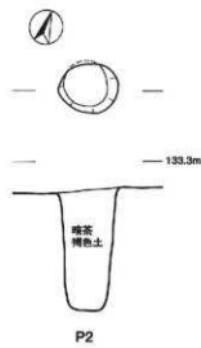
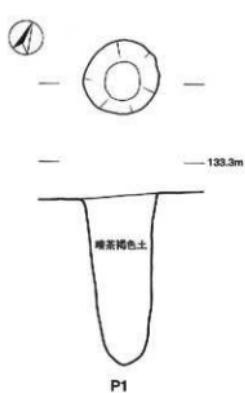




第134図 焼土

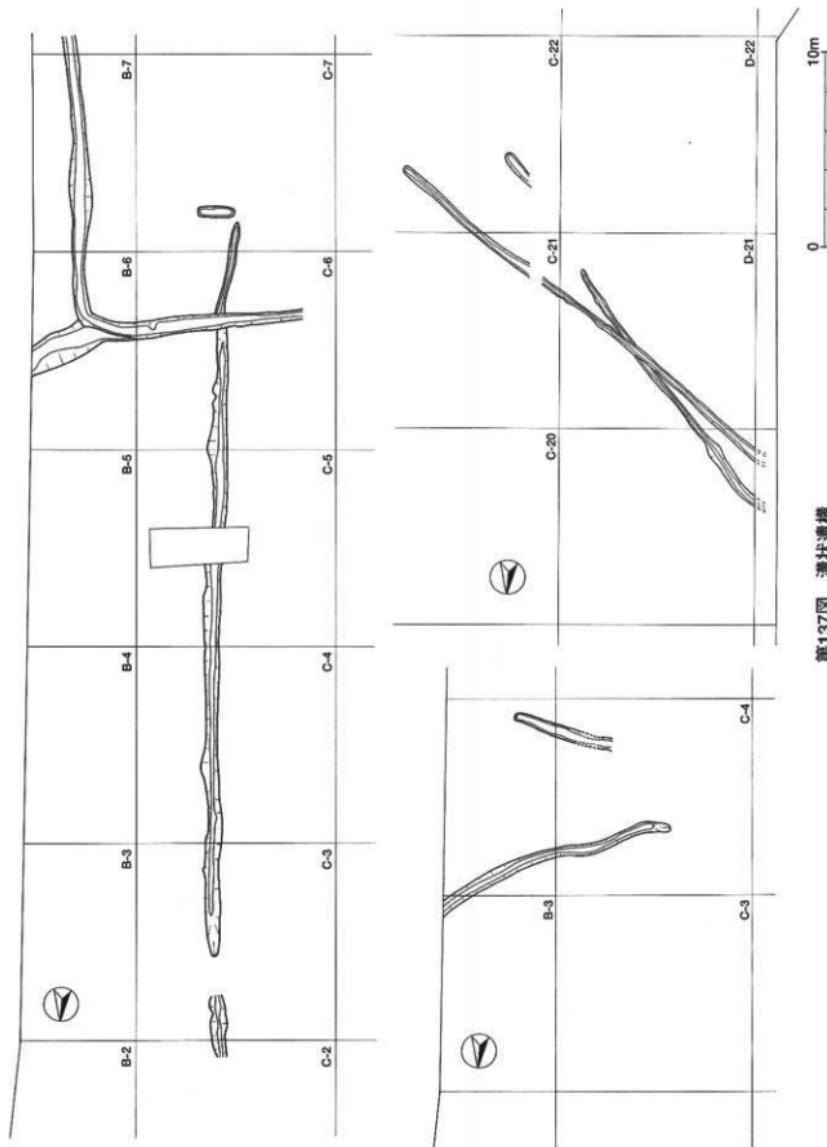


第135図 土坑



第136図 ピット

第137図 溝状溝構



遺構出土の土器

1号住居跡

761～777は、1号住居跡出土の土器である。

761～772は壺形土器である。761は復元口徑21.6cmを測る口縁部で頸部に絡繩突帯を施すものである。口縁部は内弯し、内面の器面はナデ調整を行い、外面はヘラミガキで調整している。762は内弯する口縁部に幅広粘土を貼り付けたものである。ナデ調整を施し、胎上に細縫を多く含む。

773は鉢形土器である。口徑は15cmを測り、やや内弯気味であるが直口する口縁部である。外面に沈線による段を有する。丁寧なナデ整形を行っている。

774～777は壺形土器である。いずれも肩部で口縁部からなで肩で胴部へ下るものである。外面はヘラミガキ整形を行っている。777は平底の底部で、内面は指ナデを行い、外面はヘラミガキ整形を行っている。

2号住居跡

778～790は2号住居跡から出土した土器である。

778～785は壺形土器である。778は口徑38.0cmを測り、外反する口縁部で頸部に絡繩突帯を施すものである。外面はハケ目調整を施している。この突帯は交じらない。780は口徑24.6cmで、外反する口縁部をもつものである。781は口徑28.5cm、器高35.1cm、脚台径10.5cmを測る完形土器である。口縁は直口し、脚部は中空のあげ底底部である。784は底部で中空である。785は頸部で絡繩突帯を施すものである。ヘラミガキ調整を施している。

786は壺形土器でやや内向気味に立ち上がる口縁部である。ヘラミガキ調整を施している。丹塗り土器で、口徑12.0cmを測る。

787は壺形土器である。内向気味の口縁部で、外面の器面調整はヘラミガキ調整を施している。やはり丹塗り土器である。

788は高坏の口縁部で丹塗りした椀形の器形をした坏部である。内外面とも丁寧なヘラミガキで調整されている。

3号住居跡

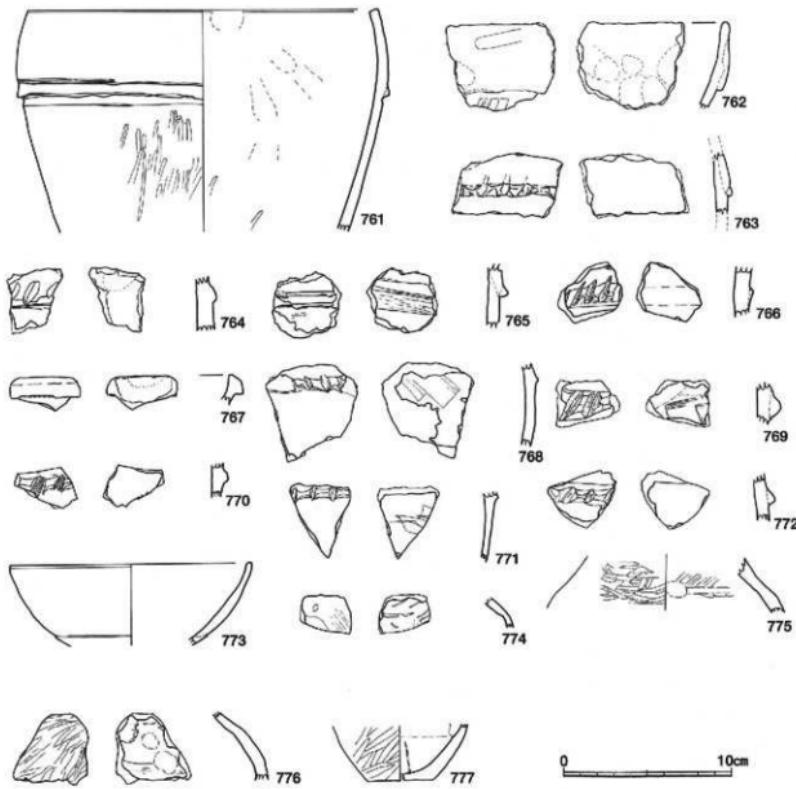
791～810は3号住居跡出土の土器である。

791～793・795～809は壺形土器で、794・810は壺形土器である。

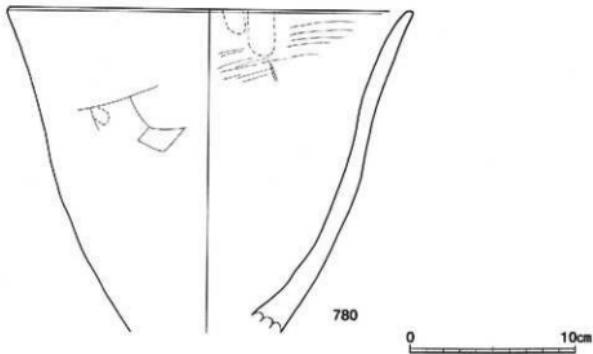
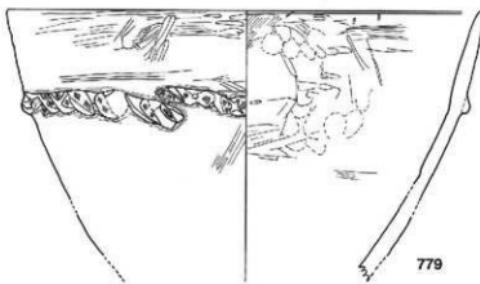
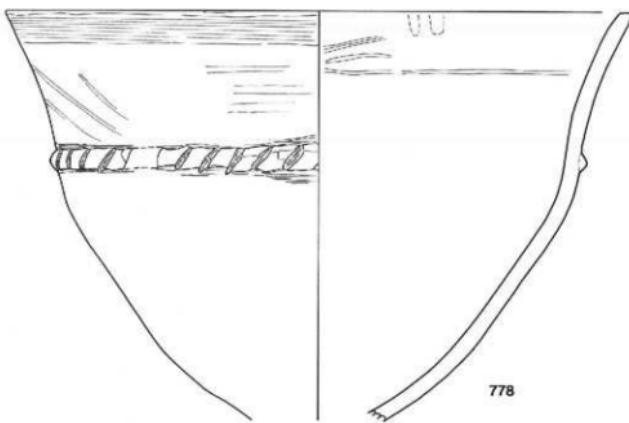
791は口徑30.8cm、31.8cmを測り、外反する口縁部で頸部に絡繩突帯を施すものである。外面は縦位のハケ目調整を施している。793も同様のものである。795は直口する壺形土器の胴部である。

796・797は外反する口縁部をもつ壺形土器で器面はナデ調整を施している。798～803は頸部に絡繩突帯を施すものである。いずれもナデ調整を施している。

805～809は壺形土器の底部である。何れも中空のあげ底底部である。脚台径は9.6cm、8.7cm、11.7cm、8.7cm、9.6cmを測る。内外面ともナデ調整を施している。



第138図 1号住居内出土遺物

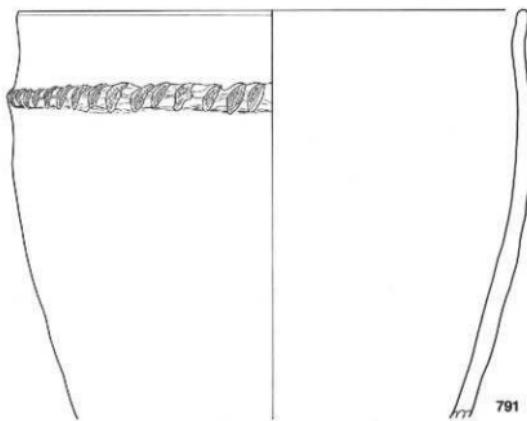


0 10cm

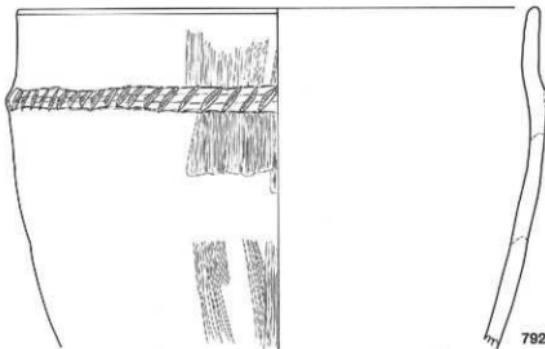
第139図 2号住居内出土遺物 (1)



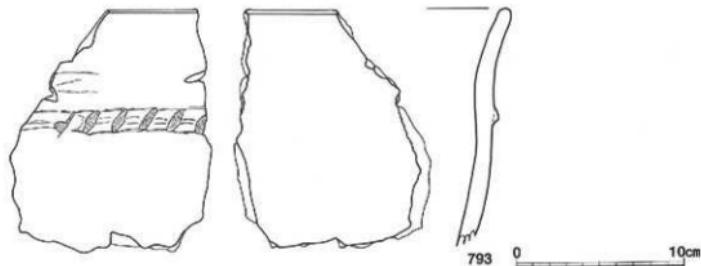
第140図 2号住居内出土遺物 (2)



791

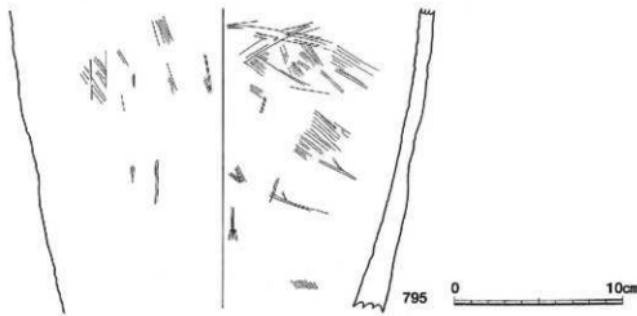
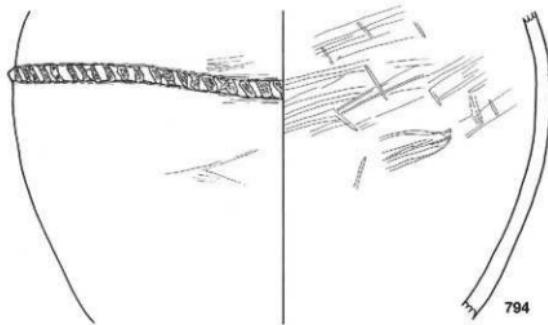


792



793

第141図 3号住居内出土遺物 (1)



第142図 3号住居内出土遺物（2）

4号住居跡

811～817は4号住居跡出土の土器である。
811～816は壺形土器である。811～814は頸部に絡繩突帯を施すものである。内外面とも器面調整はナデ整形を施している。816は中空のあげ底底部である。

817は壺形土器の口縁部である。外反する長い口縁部をもつもので丹塗りされ、外面は丁寧なヘラミガキが施されている。

5号住居跡

818・819は5号住居跡出土の土器である。818は壺形土器の胴部で絡繩突帯を施している。819は高坏脚部の筒部であり、丹塗りされ外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

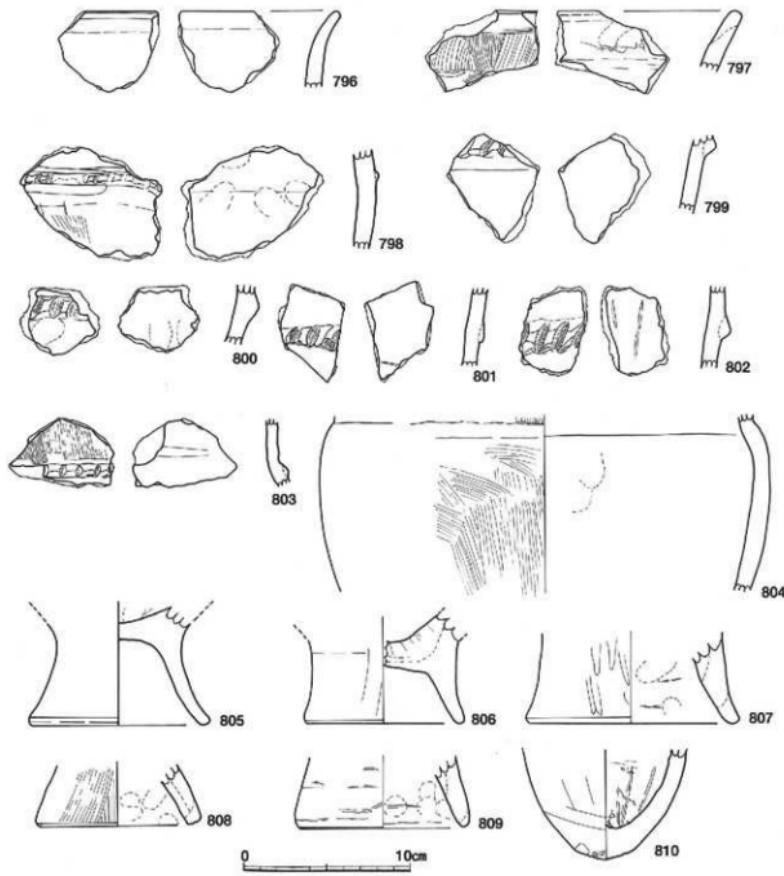
6号住居跡

820～822は6号住居跡から出土した土器である。
820は口径20.4cmを測る壺形土器である。「く」の字状に外反する口縁で、胴部はやや膨らむものである。ハケ目による調整痕がみられる。ハケ口方向は継位に施されている。822は口径22.2cmを測る壺形土器で、直口の口縁部をもつものである。ナデ整形で器面調整を施している。
821は高坏脚部である。丹塗りされ外面に丁寧なヘラミガキ調整を施している。

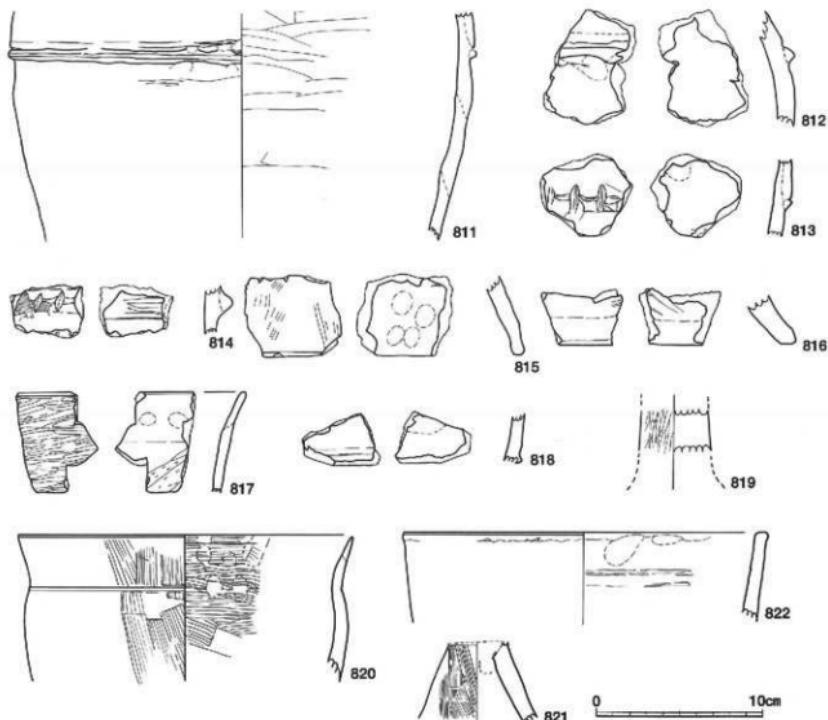
7号住居跡

823～840は7号住居跡から出土した土器である。
803～831は壺形土器である。823～827は外反する口縁部であり、823は口径33.0cmを測る。825は口径26.1cmを測る。何れも内外面ともナデ調整を施している。828・829・833・834は頸部に絡繩突帯を施すもので、ナデ調整が施されている。
830・831・835は中空のあげ底底部である。
836・837は壺形土器の口縁部である。836は口径10.5cmを測るものである。外反する口縁で丁寧なヘラミガキ調整を施している。837はやや内向気味に立ち上がる口縁部で、口径10.5cmを測る。外面はヘラミガキ調整が施されている。

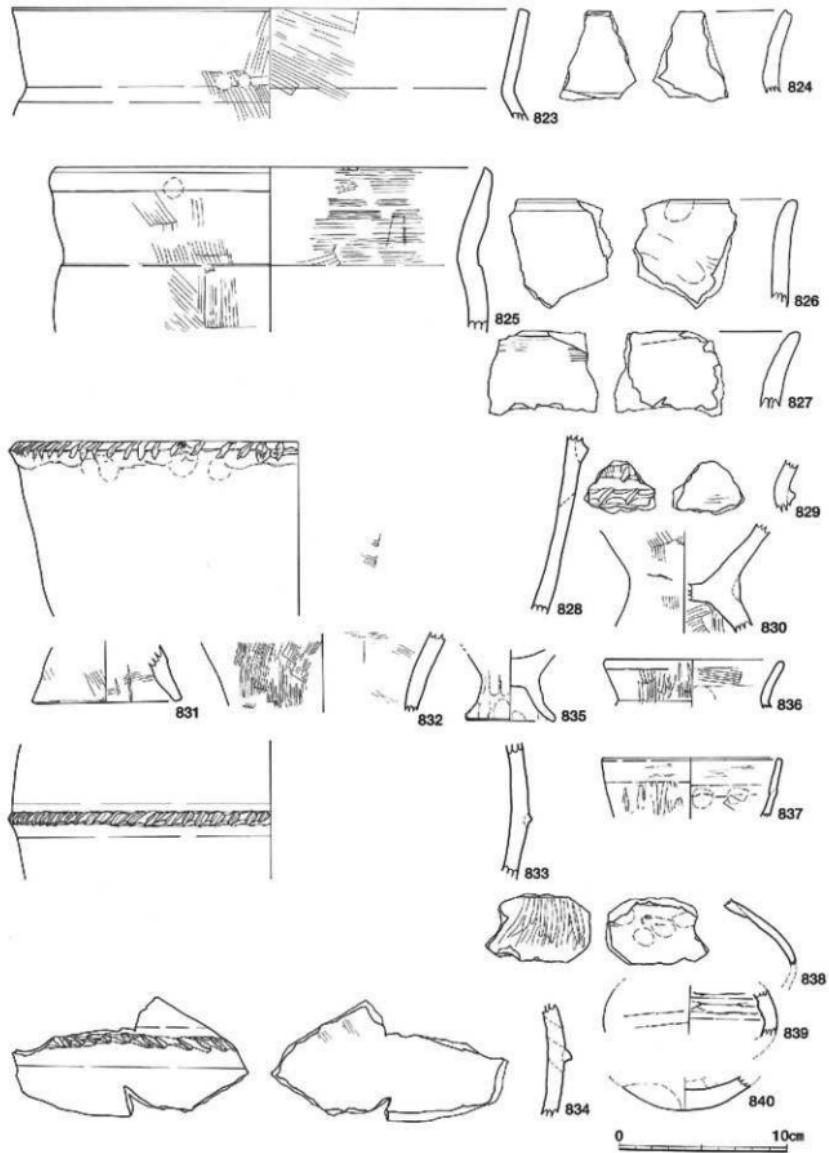
838は壺形土器の肩部である。340は壺形土器の丸底底部である。
839は壺形土器である。
841は、C-22区、Ⅲa層から出土した埋設土器である。壺形土器で肥厚した丸底を呈するものである。外面はナデ調整が施され、煤が付着している。



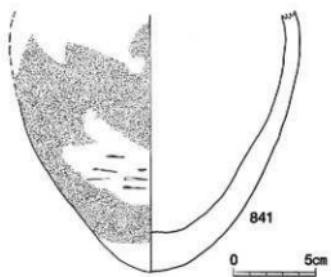
第143図 3号住居内出土遺物(3)



第144図 4・5・6号住居内出土遺物



第145図 7号住居内出土遺物



第146図 埋設土器

変形土器

842～877は変形土器である。

842～857は外反する口縁部をもつもので、842は口径33.0cmを測る。頭部はやや丸みにある「く」の字状に折れている。ナデ調整が施されている。

847・853～855・857は絡繩突帯を施すものである。器面調整は内面をナデ整形、外面はハケ口調整を行っている。

858～876は内弯する口縁部をもつもので、ナデ整形で器面調整がなされ、絡繩突帯を施すものである。858～860の口径は24.0cm、18.0cm、26.2cmを測る。860の突帯は刻目を施す。ナデ整形で器面調整を行っている。861は尖り気味の口縁部をもつ。877は口径37.8cmを測る大型の変形土器である。頭部が「く」の字状に折れ、外反する口縁部をもつものである。

壺形土器

878は尖底気味の丸底をもつ壺形土器である。肩部に刻目のある絡繩突帯を施すものである。内外面ともナデ整形で器面調整を施している。879・880も同様の壺形土器である。893は小型壺で頭部が「く」の字状に折れ外反気味に直口する口縁部である。

鉢形土器

881・882は口径17.0cm、15.0cmを測る鉢形土器である。881は内弯気味に直口する口縁部で、882は内弯する口縁部である。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。883・884は中空のあげ底底部で、脚台径は7.2cm、9.0cmを測る。890・891も鉢形土器である。890は口径13.5cmを測る内弯する口縁部である。内外面ともナデ整形を施している。891は肥厚した底部で平底である。

壺形土器

885～889は壺形土器である。885は外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺である。器面調整はナデ整形である。復元口径11.0cm、器高13.8cm、胴部径12.8cmを測る。886も同様のもので、胴部径7.5cmを測る。887は外反する口縁部で、口縁下位に刻目突帯が貼付されている。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。888は内弯する口縁部で復元口径は10.2cmを測る。889は長い口縁部をもつもので外反する。内面はナデ整形、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

高坏

894～900は高坏である。894は坏部である。口縁部が体部から外折反転したもので、口径21.3cmを測る。895は脚部で、筒部が短く、裾部が緩やかに外反するものである。896は完形品で、口径24.0cm、器高24.0cm、脚部径12.2cmを測る。口縁部は体部から外折反転したもので、脚部は底部から筒部をもたずすぐ裾部になる形状を呈している。897～899は脚部で筒部が短く、裾部が緩やかに外反するもの（848）、底部から筒部をもたずすぐ裾部になる形状を呈しているもの（897・899）がある。何れも丹染りである。

手捏土器

901～904は手捏土器である。901・902は底部が肥厚して平底となるもので、口縁は内弯気味のものである。902の口縁部は尖り気味である。903は丸底で内弯気味の口縁をもつものである。

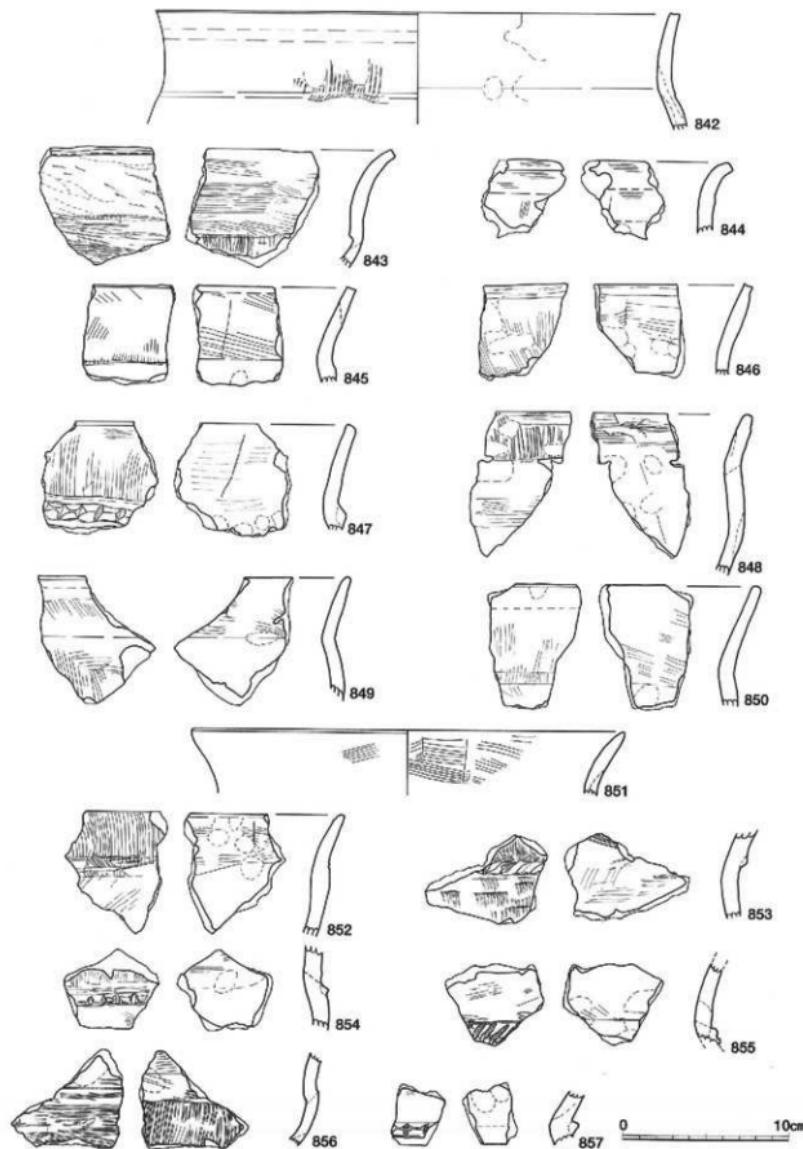
904は外反気味に直口する口縁をもつもので、底部は尖底である。

第24表 北原中遺跡遺構内出土土器観察表(1)

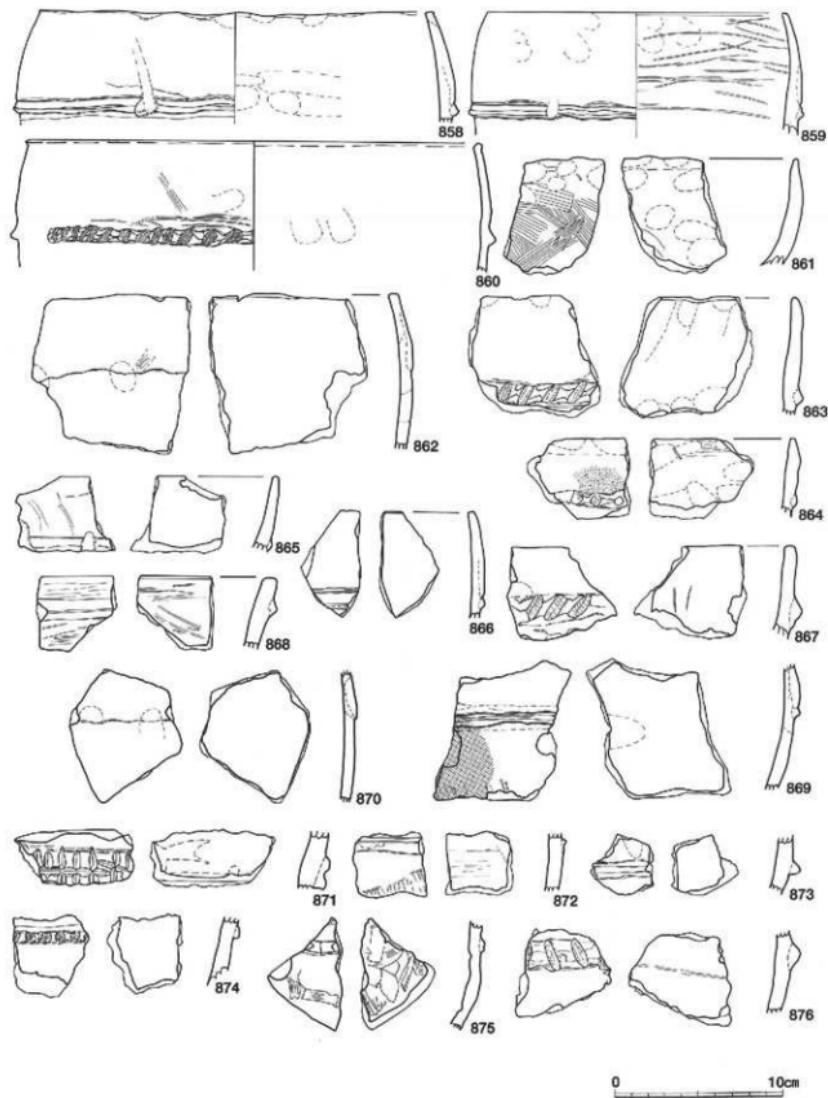
埋蔵 場所	遺物 番号	出土区	層位	種類	部位	調査		出土	色調		取上番号	備考	
						外画	内面		外画	内面			
	761	D-23	住居1	甕	口~頸	ミガキ	ナデ	Q2	黒褐色	褐色	38		
	762	D-23	住居1	甕	口縁	ヨコナデ	指押え	Q2	赤褐色	にぶい赤褐色	46		
	763	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	Q2	褐色	にぶい褐色	142		
	764	D-23	住居1	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	黄褐色	褐色	89		
	765	D-23	住居1	甕	矣	矣	指押さえ	工具ナデ	Q2	黒褐色	黒褐色	86	
	766	D-23	住居1	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	16		
	767	D-23	住居1	甕	山線	ミガキ	ナデ	Q2	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	118		
	768	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	ハケメ	褐色	にぶい褐色	103		
138	769	D-23	住居1	甕	矣	矣	ヨコナデ	ハケメ	Q2	褐色	にぶい褐色	66	
	770	D-23	住居1	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	にぶい赤褐色	赤褐色	一括	
	771	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	工具瓶	Q2	黒褐色	にぶい褐色	80	
	772	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	Q2	褐色	にぶい褐色	131		
	773	D-23	住居1	甕	矣	矣	ヨコナデ	hoqz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	78		
	774	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	黒褐色	褐色	45	
	775	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい褐色	93	丹塗り
	776	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	赤褐色	赤褐色	113	
	777	D-23	住居1	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	明褐色	143	
139	778	D-7	住居2	甕	矣	矣	ハケメ	指押さえ	hoqz	褐色	褐色	一括	
	779	D-7	住居2	甕	矣	矣	ナデ	指押さえ	Q2	にぶい褐色	にぶい褐色	一括	
	780	D-7	住居2	甕	矣	矣	工具瓶	指押さえ	hoqz	褐色	褐色	スス付着	
	781	D-7	住居2	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい褐色	一括	
	782	D-7	住居2	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	明褐色	明褐色	一括	
	783	D-7	住居2	甕	矣	矣	ナデ	ハケメ	Q2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	29	
	784	D-7	住居2	甕	矣	矣	ヨコナデ	ノ其裏	flqz	褐色	にぶい黄褐色	一括	
	785	D-7	住居2	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	黒褐色	一括	
	786	D-7	住居2	甕	矣	矣	ハラミガキ	ハラミガキ	Q2	赤褐色	明赤褐色	66	丹塗り
	787	D-7	住居2	甕	矣	矣	ハラミガキ	ナデ	Q2	赤褐色	にぶい褐色	55	丹塗り
	788	D-7	住居2	甕	矣	矣	ミガキ	ハラミガキ	Q2	赤褐色	にぶい褐色	65	丹塗り
	789	D-7	住居2	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	明赤褐色	にぶい褐色	11	
	790	D-7	住居2	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	明黄褐色	明赤褐色	一括	
	791	D-7	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	明赤褐色	褐色	191	
	792	D-7	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	にぶい黄褐色	9他	
	793	D-7	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	明赤褐色	132	
	794	C-6	住居3	甕	矣	矣	ナデ	工具瓶	hoqz	暗赤褐色	明赤褐色	13他	
	795	C-11	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	赤褐色	明赤褐色	203	
	796	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	71	
	797	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	黒褐色	にぶい黄褐色	109	黒塗り
	798	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	157	
	799	D-22	住居3	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	flqz	にぶい水褐色	にぶい黄褐色	65	
	800	D-22	住居3	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	hoqz	にぶい褐色	褐色	177	
	801	D-22	住居3	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	黒褐色	褐色	一括	
	802	D-22	住居3	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	96	
	803	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	にぶい黄褐色	7	
	804	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	褐色	804	黒塗り
	805	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	flqz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	21他	
	806	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	褐色	191	
	807	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい赤褐色	192	
	808	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	指押さえ	Q2	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	126	
	809	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	にぶい黄褐色	124	他
	810	D-22	住居3	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい黄褐色	15	
143	811	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	赤褐色	にぶい黄褐色	41他	
	812	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	暗赤褐色	にぶい黄褐色	122	
	813	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	褐色	6	
	814	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	35	
	815	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい褐色	34	
	816	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	人口土壤	
	817	D-21	住居4	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい黄褐色	一括	丹塗り
	818	D-21	住居5	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	褐色	褐色	一括	
	819	D-20	住居5	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	暗赤褐色	暗褐色	5	丹塗り
	820	B-23	住居5	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	暗赤褐色	にぶい黄褐色	一括	
	821	D-23	住居5	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい褐色	褐色	19	
	822	B-23	住居5	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい水褐色	明赤褐色	括	
	823	E22	住居5	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	明褐色	明褐色	44	
	824	E23	住居5	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい黄褐色	明赤褐色	12	
	825	E22	住居7	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい黄褐色	14他	
	826	E22	住居7	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	明黄褐色	にぶい黄褐色	82	
	827	E22	住居7	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	褐色	にぶい褐色	81	
	828	E22	住居7	甕	矣	矣	ナデ	ナデ	Q2	にぶい赤褐色	褐色	57	
	829	E23	住居7	甕	矣	矣	ヨコナデ	ナデ	Q2	褐色	褐色	30	

第25表 北原中遺跡遺構内出土土器観察表（2）

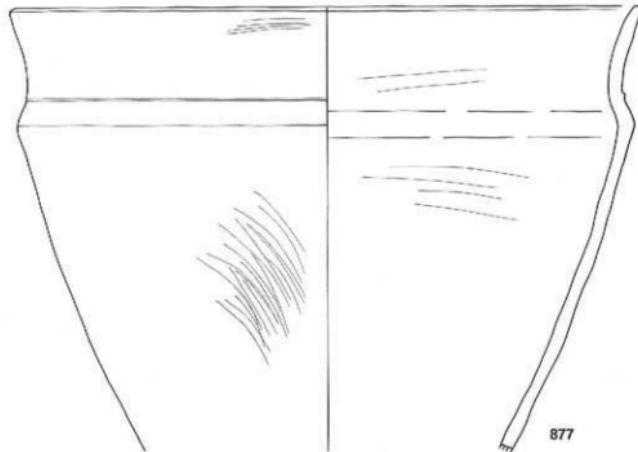
検査番号	遺物番号	出土区	層位	器種	部位	調 集		胎土	色 調		取上番号	備考	
						外面			外面	内面			
145	830	住居7	亮	底部	ヨコナデ	指ナデ	qz	にぶい橙色	黒色	138			
	831	E22	住居7	亮	底部	ヨコハケ	ヨコハケ	qz	明黄褐色	明黄褐色	84		
	832	E23	住居7	亮	頭部	ハケメ	ナデ	qz	明黄褐色	にぶい黄褐色	15		
	833		住居7	亮	側部	ナデ	ナデ	f1.qz	にぶい黄色	にぶい青色	136		
	834		住居7	亮	突唇	ヨコナデ	ナデ	f1.qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	134他		
	835	E22	住居7	亮	側面	指ナデ	指押さえ	qz	橙色	にぶい黄褐色	36		
	836	E23	住居7	塙	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	6		
	837	E22	住居7	塙	口縁	ヘラミガキ	指押さえ	qz	橙色		112		
	838	E22	住居7	表	肩部	ミガキ	指押さえ	qz	明赤褐色	にぶい黄褐色	一括		
	839		住居7	塙	肩部	ミガキ	指ナデ	qz	にぶい黄褐色	浅黄色	171		
146	840	E22	住居7	表	底部	ミガキ	指ナデ	qz	橙色		156	正班	
	841	C-22	1号埋土	表	側～底	ナデ		f1.qz	にぶい褐色	黑褐色	黒設	スヌ付着	



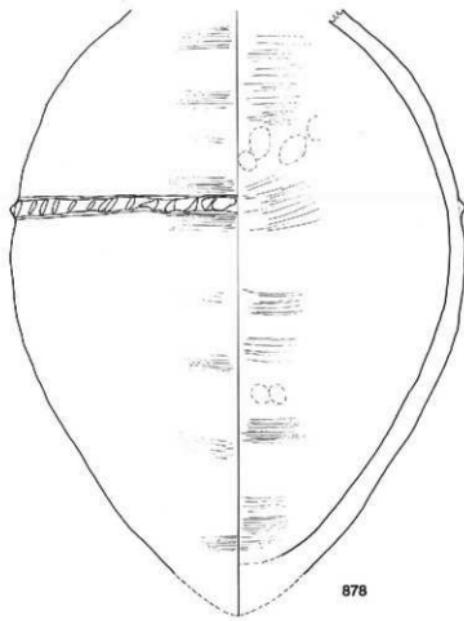
第147図 IV層出土土器 (1)



第148図 IV層出土土器 (2)



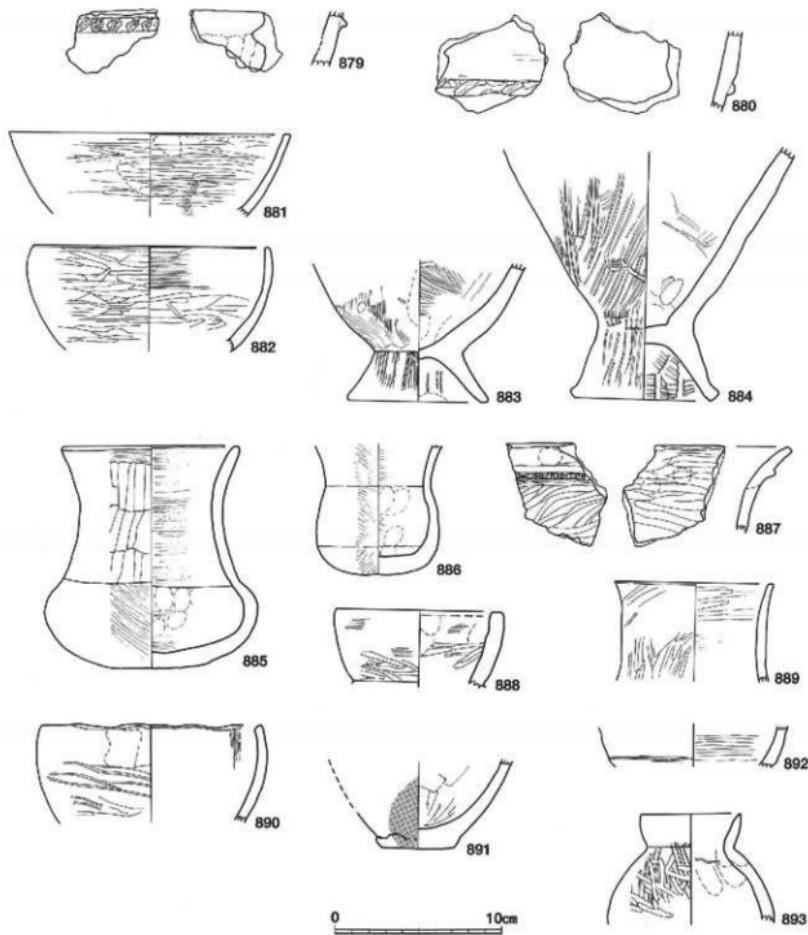
877



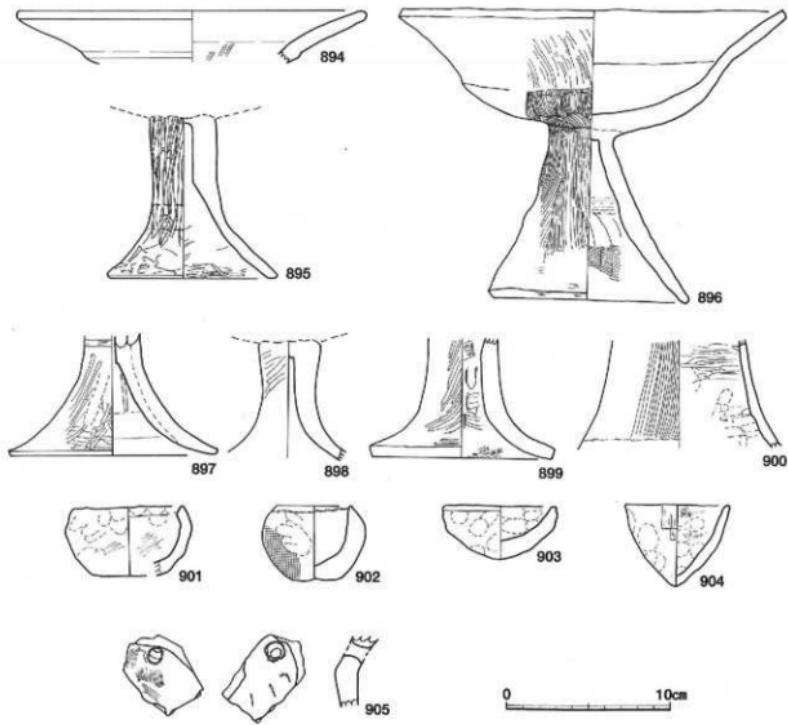
878

0 10cm

第149図 IV層出土土器 (3)



第150図 IV層出土土器 (4)



第151図 IV層出土土器 (5)

第26表 北原中遺跡包含層成川式土器観察表

発掘 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	部位	開 窓		胎土	色 窓		取上番号	備 考			
						外窓 内窓			外窓 内窓						
						外窓	内窓		外窓	内窓					
842	D23	Ⅲb	要	口縁	ナデ	ナデ	fl.qz	褐色	褐色	7725					
843	D23	Ⅲb	要	口縁	ケズリ	ハケメ	fl.qz	明赤褐色	に赤い褐色	7731					
844	C9	IV	要	口縁	ナデ	ナデ	qz.無	明赤褐色	明赤褐色	1595					
845	D23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ハケメ	qz	に赤い黄褐色	に赤い褐色	7442					
846	D23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ハケメ	qz	に赤い黄褐色	に赤い赤褐色	7918					
847	D23	IVa	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	に赤い褐色	7630他					
848	E23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	褐色	に赤い黄褐色	2832他					
849	E23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	明赤褐色	赤褐色	711					
850	E23	Ⅲ	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	褐色	1157					
851	D23	IVa	要	口縁	ナデ	横ハケ	qz	明赤褐色	明赤褐色	7651					
852	D23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	褐色	明赤褐色	786					
853	D23	Ⅲb	要	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	明赤褐色	に赤い赤褐色	7524					
854	D23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	明赤褐色	7740					
855	E23	Ⅲ	要	口縁	横ハケ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	一括					
856	D23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ハメ	fl.qz	に赤い黄褐色	褐色	7734					
857	E23	Ⅲb	要	火帯	ナデ	ナデ	qz	に赤い褐色	褐色	1168					
858	E23	衣縫	口縁	横ナデ	ナデ	ホガ	褐色	に赤い黄褐色	カクラン						
859	E23	火帯	口縁	横ナデ	ナデ	qz.無	に赤い褐色	に赤い褐色	カクラン						
860	E23	Ⅲb	要	口縁	ナデ	ホfl.qz	に赤い黄褐色	明赤褐色	758他						
861	E23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ナデ	qz	褐色	褐色	722					
862	E23	火帯	口縁	横ナデ	ナデ	ho.qz.無	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	カクラン						
863	F23	IVb	要	口縁	ナデ	ナデ	ho.qz	に赤い黄褐色	褐色	1145					
864	C10	IVa	要	口縁	ナデ	横ナデ	qz	褐色	褐色	1110					
865	E23	IV	要	口縁	ナデ	ナデ	qz	に赤い褐色	に赤い褐色	カクラン					
866	D22	表層	要	口縁	横ナデ	ナデ	qz	暗褐色	に赤い黄褐色	73					
867	D23	Ⅲb	要	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	7700					
868	E23	Ⅲb	要	口縁	ハケメ	ハケメ	ho.fl.qz	に赤い黄褐色	褐色	1211					
869	E23	表層	要	口縁	横ナデ	ナデ	qz.無	明赤褐色	暗褐色	上部付属品 収付君					
870	E23	衣縫	要	安帯	ナデ	ナデ	qz.無	褐色	に赤い黄褐色	一括					
871	E23	Ⅲb	要	安帯	ナデ	ナデ	ho.qz	に赤い黄褐色	褐色	719					
872	D23	IVa	要	安帯	ナデ	工具ナデ	fl.qz	に赤い黄褐色	褐色	7715					
873	E23	衣縫	要	安帯	ナデ	ナデ	qz.無	に赤い黄褐色	明赤褐色	カクラン					
874	D23	IVa	要	安帯	ナデ	ナデ	fl.qz	に赤い黄褐色	に赤い褐色	7633					
875	E23	衣縫	要	安帯	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	一括					
876	D23	Ⅲb	要	安帯	ナデ	ナデ	ho.fl.qz	に赤い黄褐色	褐色	7463					
877	C15	IV	要	口～肩	ハケメ	ハケメ	qz	に赤い黄褐色	褐色	2399他					
878	C15	致	副部	ナデ	ナデ	qz.無	に赤い黄褐色	褐色	294他						
879	D23	Ⅲb	根	奥布	ナデ	ナデ	ho.qz	に赤い黄褐色	に赤い褐色	7006					
880	E23	火帯	安	火帯	ナデ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	カクラン						
881	E23	衣縫	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	赤褐色	に赤い褐色	カクラン					
882	E23	火帯	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	カクラン					
883	D16	N'b	玄	底部	ハケメ	ハケメ	fl.qz	明赤褐色	褐色	1					
884	E23	Ⅲb	要	底部	「具ナデ」	工具ナデ	fl.qz	に赤い黄褐色	黑色	1123他					
885	C15	Ⅲ	小形瓶	定形	ナデ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	811他					
886	C15	Ⅲ	小形壺	定形	ナデ	ナデ	ho.qz	に赤い黄褐色	に赤い褐色	1845					
887	E23	衣縫	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	カクラン						
888	E23	Ⅲb	小形壺	口縁	ミガキ	ミガキ	fl.qz	明赤褐色	明赤褐色	716					
889	E23	火帯	壺	山縁	ミガキ	ミガキ	qz	褐色	に赤い褐色	カクラン					
890	E23	表層	壺	口縁	ナデ	ナデ	fl.qz	明赤褐色	明赤褐色	カクラン					
891	D23	IVa	陶	高脚	ナデ	ナデ	fl.qz	褐色	に赤い褐色	一括	ス付着				
892	E23	表層	鉢	脚部	ミガキ	ナデ	qz	褐色	に赤い黄褐色	-					
893	C9	IV	小壺	口～副	ハケメ	指押え	fl.qz	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	1126他					
894	E23	衣縫	高坏	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	カクラン					
895	D22	Ⅲb	高坏	脚部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	fl.qz	赤褐色	に赤い黄褐色	7899					
896	B10	IV	高坏	光形			ho.qz	明赤褐色	褐色	1013					
897	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	qz	赤褐色	に赤い黄褐色	-					
898	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ミガキ	ミガキ	fl.qz.無	明赤褐色	に赤い黄褐色	723					
899	E23	衣縫	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	qz	赤褐色	明赤褐色	カクラン					
900	E23	衣縫	高坏	脚部	ミガキ	ハケメ	qz	赤褐色	に赤い黄褐色	カクラン					
901	D23	IVa	手づくね	指押え	指押え	qz.無	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	8078他						
902	D23	IVa	手づくね	ナデ	ナデ	fl.ho.無	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	8078	ス付着					
903	D23	IVa	手づくね	指押え	指押え	qz.無	灰白色	灰白色	8078-8025 黒斑						
904	C16	Ⅲ	手づくね	ナデ	ナデ	qz	に赤い黄褐色	に赤い黄褐色	369						
905	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ハケメ	工具痕	ho	に赤い褐色	明赤褐色	1112	透かし				

住居内出土石器（第152～154回、906～910）

検出された住居内の胎土から、成川式土器に伴い数十点の石器が出土した。その中から、状態の良いものをそれぞれ図化した。

2号住居は、2点の遺物を図化した。906は石皿である。扁平な安山岩を用いており、最大長33.5cm、重量10.2kgを計る。両面に擦痕を有し、特に表面にはツヤがある。907は軽石製品である。全体に擦痕がみられ、中央に深いくぼみがあるが、詳しい情報は不明な点が多い。

909は3号住居跡から出土したもので、大きく欠損しているが、花崗岩の扁平な素材を用いた石皿である。表裏に作業面を有し、いずれも弱い擦痕がみられる。中央部に向かって、緩やかにくぼんでいく。

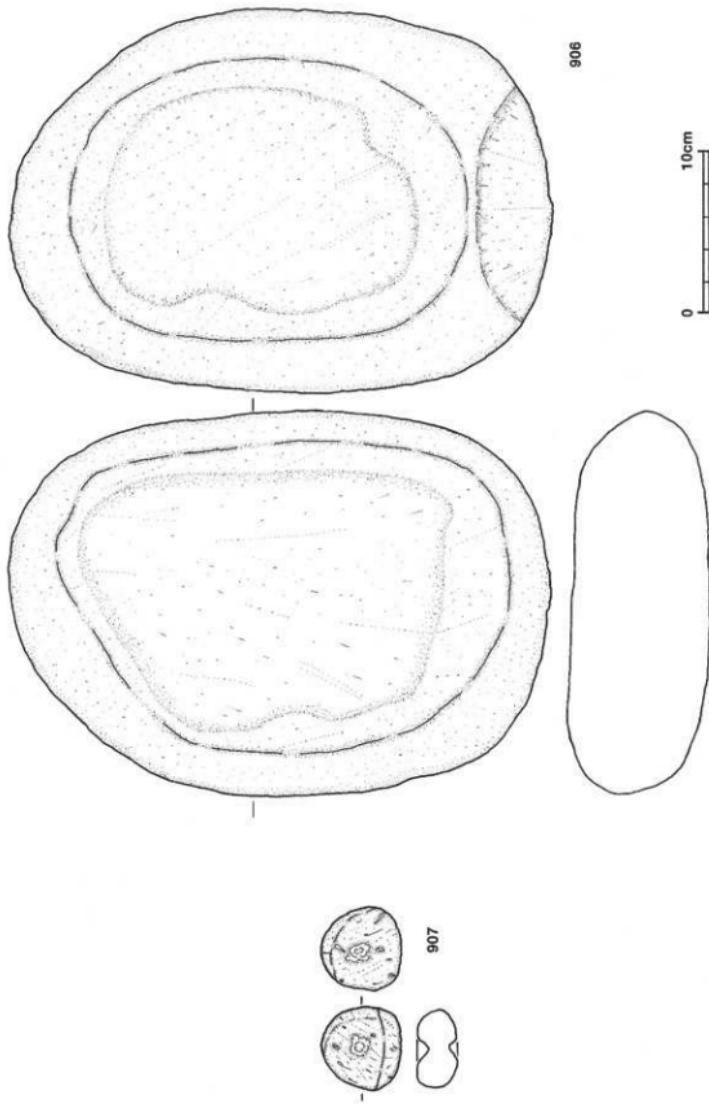
910は5号住居跡から出土したもので、顕著に確認できる使用痕により、台石とした。棱円形の砂岩を用いている。正面には、やや深く擦り減った研磨面がみられる。方向が一定であり、砥石として利用された可能性がある。左右面、裏面には、ほぼ面の中心に敲打によるつぶれ状の使用痕がみられる。台石として使用されたと推測できる。上面と下面には、敲打痕と思われるつぶれや剥落が観察できた。全ての面に使用痕がみられ、また、一部弱い所もあるが擦痕が全面に確認できた。台石としたが、石器のオールマイティな使用法を考えさせる遺物であろう。

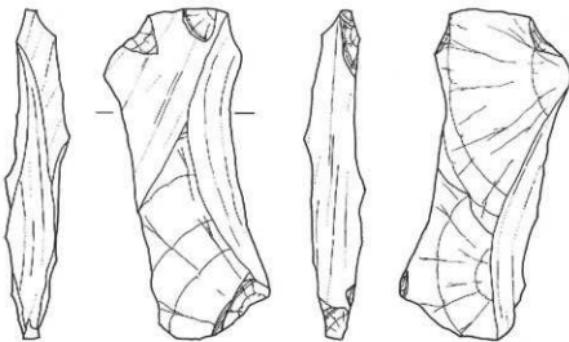
908は7号住居跡から出土したもので、頁岩製の砥石1点である。表面と裏面に大きく剥離面を残している。主に両側辺と正面の上部に、一定方向に向かっての研磨がみられる。

第27表 北原中遺跡住居内出土石器観察表

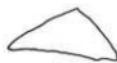
標団 番号	遺物 番号	取上番号	器種	石 材	区	住居No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
152	906	13338	石皿	安山岩	B5	2号	33.5	23.5	8.2	10200	
152	907	49	軽石製品	軽石	D23	2号	4.8	5.0	2.4	20.0	
153	909	7798	石皿	花崗岩	C6	3号	16.3	17.0	5.3	2810	
154	910	114	台石	砂岩	D20	5号	21.8	8.6	7.2	2140	
153	908	—	砥石	頁岩	E23	7号	10.1	4.2	1.5	70.0	

第152図 遺構内出土石器（1）

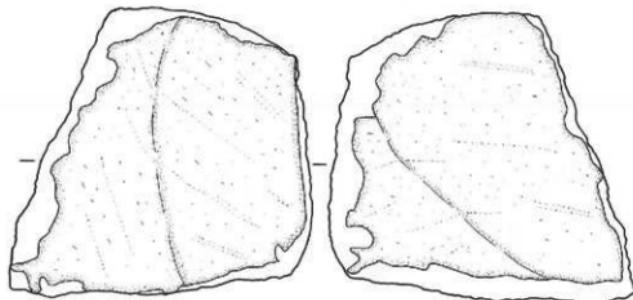




908



0 5cm

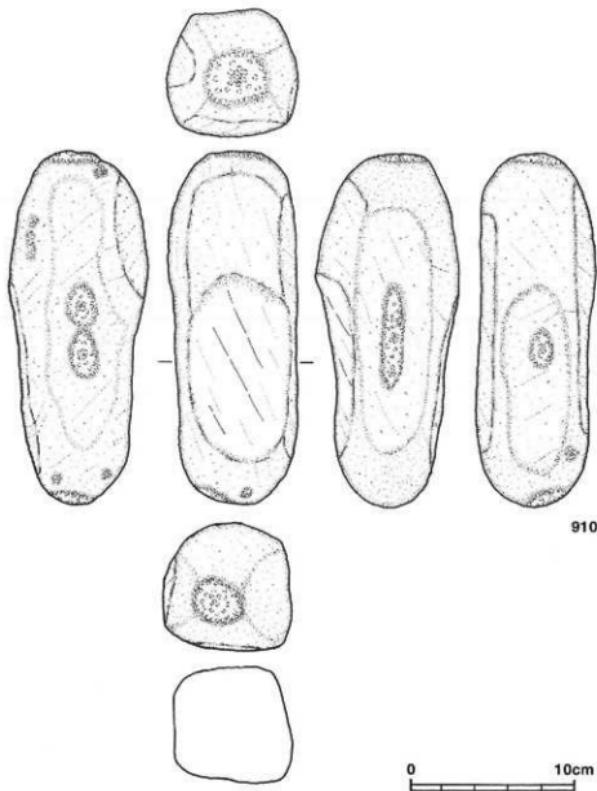


909



0 10cm

第153図 遺構内出土石器 (2)



第154図 遺構内出土石器 (3)

宇都上遺跡

第VI章 宇都上遺跡

第1節 発掘調査の概要

宇都上遺跡の調査は道路新設工事箇面のSTA.192とSTA.180を基準に10m間隔の区割りを設定し、北側から1～12、西側からA～F区と名称した。平成17年度に確認調査を行い、面積が2,700m²で縄文時代と古代～中世の二文化層があることが判明し、本調査を平成18年5月9日から10月27まで行った。

平成17年度に、下記のとおり16か所のトレンチを設定して確認調査を行った。

トレンチ	規模(m)	遺構	遺物
1	4×5	溝状遺構・古道・柱穴	縄文後期土器、古墳時代土器
2	2×5	溝状遺構	縄文後期土器
3	3×5	—	—
4	2×5	土坑・古道	縄文後期土器、磨石、古墳時代土器
5	2×5		縄文後期土器、陶磁器
6	2×10	ピット	陶磁器
7	2×4	土坑	縄文後期土器、古墳時代土器

その他、2×5m（1か所）、1×5m（4か所）、3×5m（4か所）は、盛土、削平があり遺構・遺物は発見されなかった。

この結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ～Ⅳ層の全面調査を実施した。

その結果、縄文時代・古墳時代・古代～中世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構・遺物は、集石2基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏸・石斧・敲石等の石器が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し、古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され、また、第2次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

第2節 縄文時代の調査

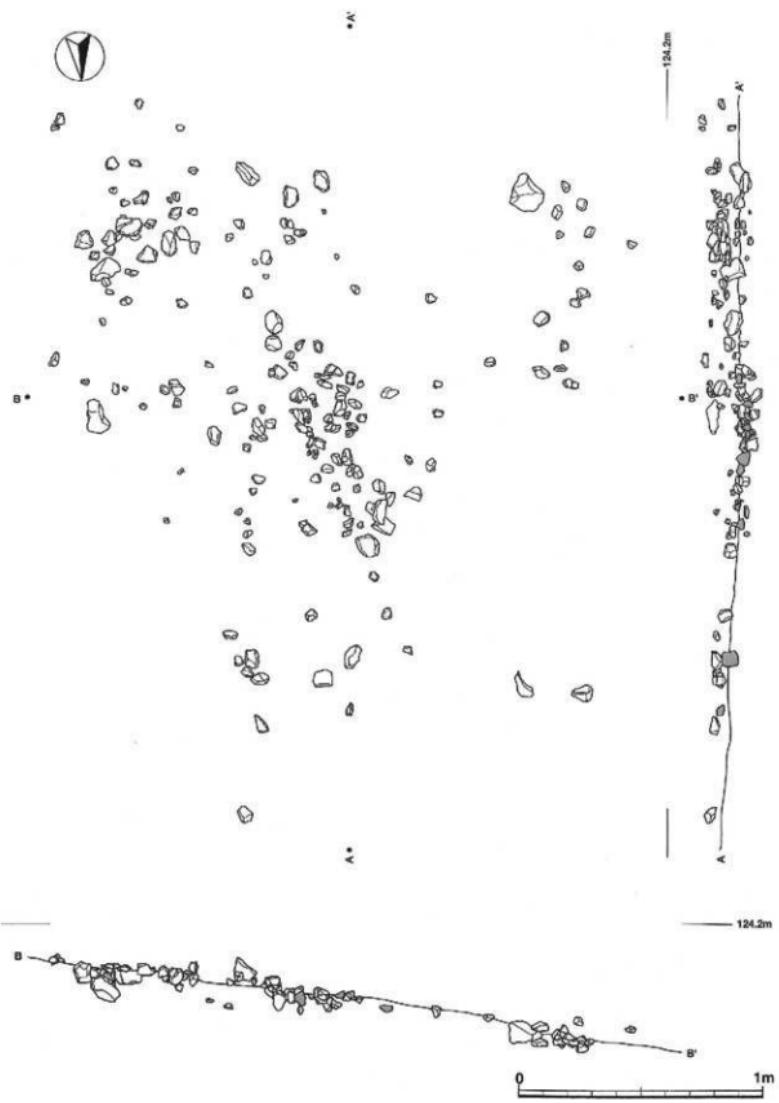
Ⅲ～Ⅳ層からは、縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。遺物はB～E - 2～12区に集中し、遺構は集石遺構が2基検出された。

集石遺構1（第155図）

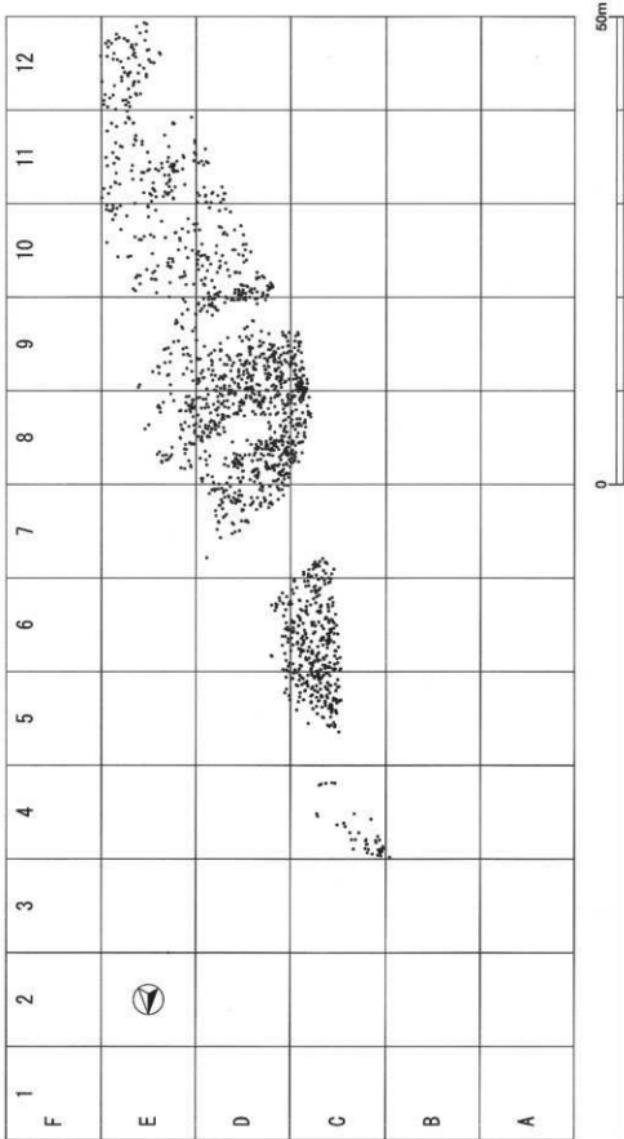
C - 4区、Ⅲa層上面で検出したものである。175個の拳大の角礫が、240cm×240cmのほぼ円形の範囲に散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、加熱の影響を受けたものと考えられる。彫り込み等は認められなかった。

集石遺構2（第166図）

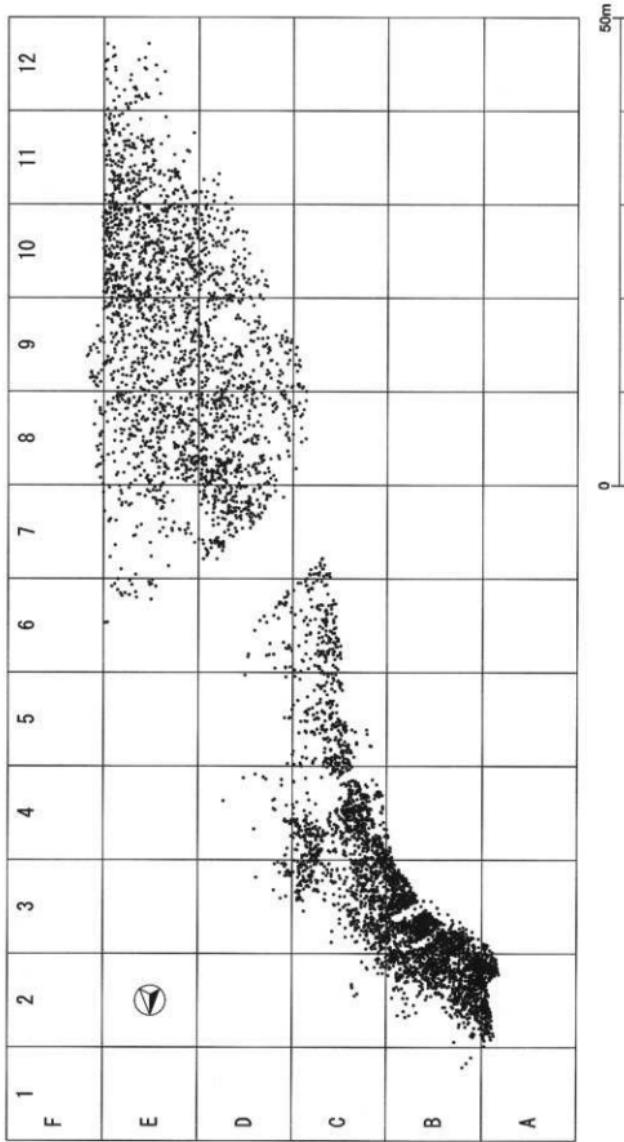
C - 10区、Ⅲa層上面で検出したものである。9個の拳大の角礫が、50cm×20cmの梢円形の範囲に集中した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、加熱の影響を受けたものと考えられる。彫り込み等は認められなかった。



第155図 集石 (1)



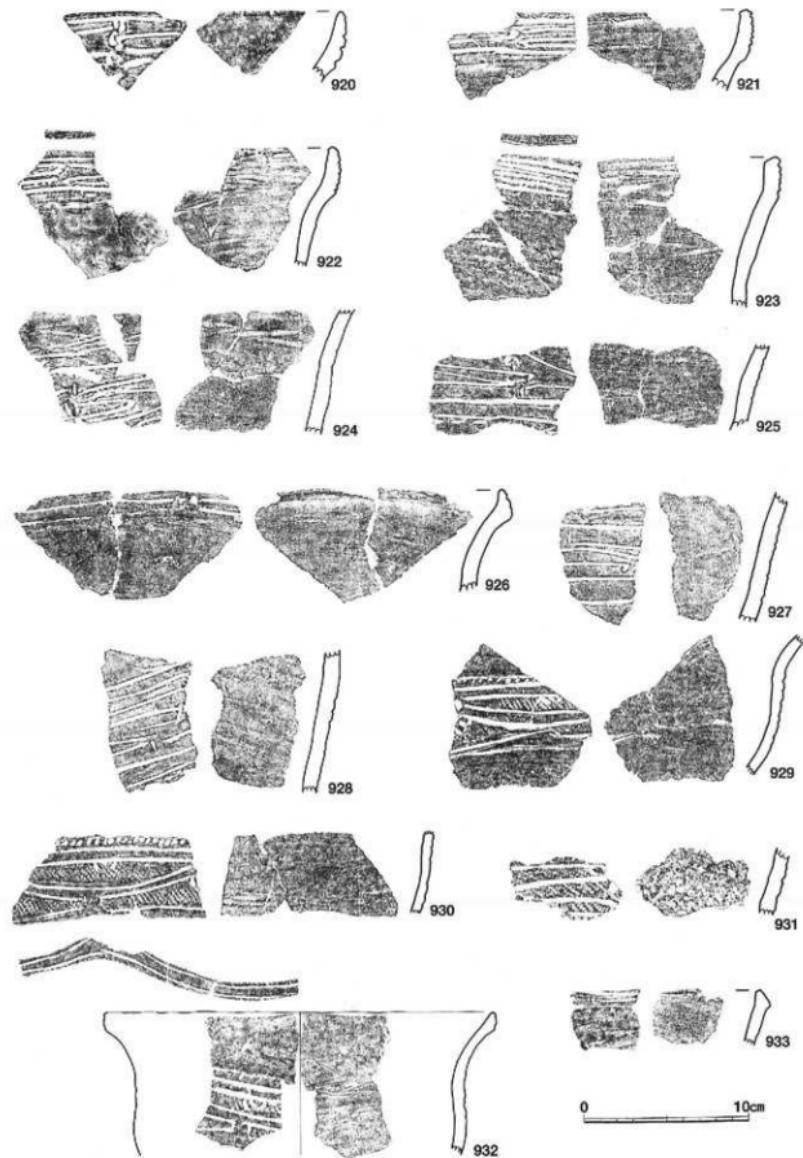
第156图 Ⅲ层遗物出土状况



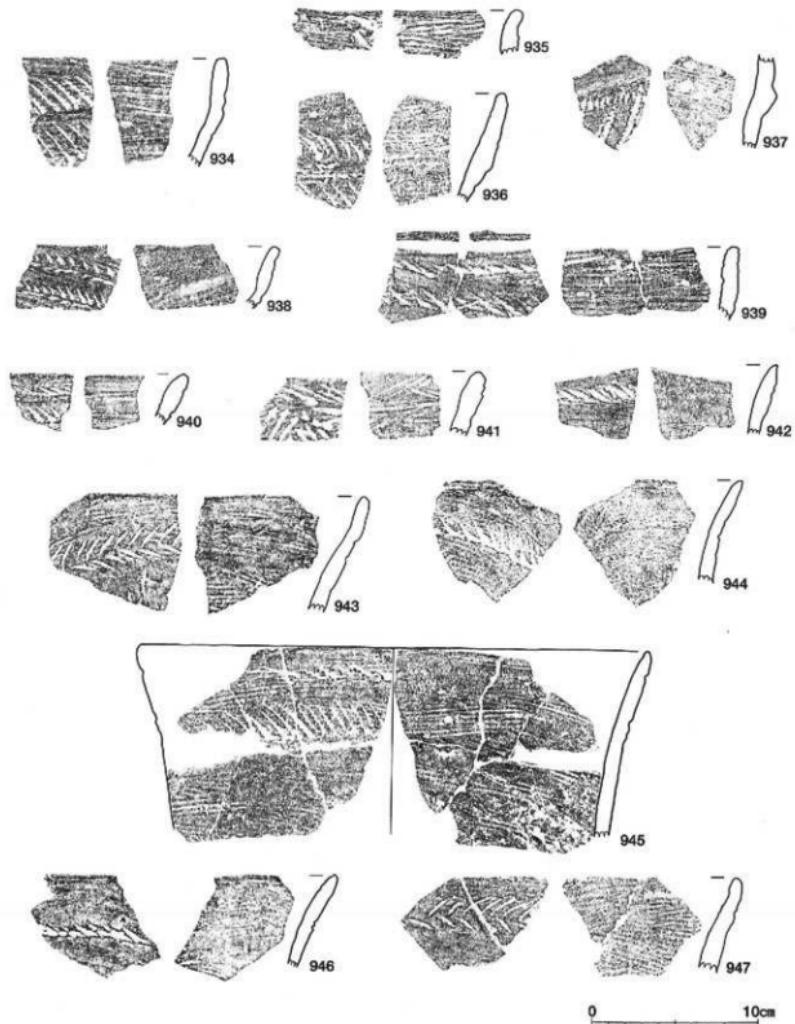
第157図　IV層遺物出土状況

縄文土器

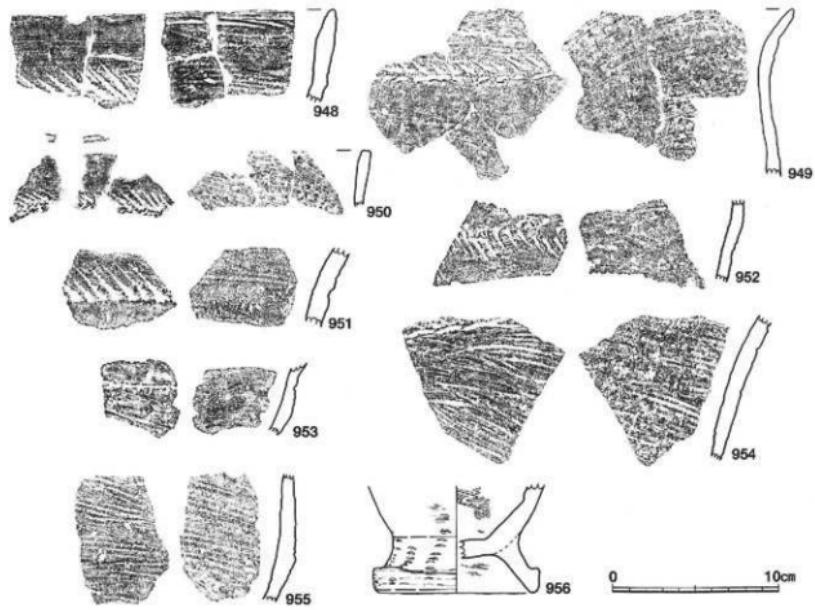
- 縄文土器は、B～F - 2～12区、IV層で出土した。縄文時代後期を主体にしたものである。
- 920～923はやや内弯する口縁部を呈し、胴部が緩やかにカーブないしほば直線的な立ち上がりをみせる鉢形土器である。文様は沈線のみで構成されている。辛川式土器に該当する土器である。
- 924・925は胴部である。
- 926は口縁部断面形が緩やかな三角形を呈し、口縁部の文様に沈線を用いるものである。北久根式土器に該当するものである。
- 927・928も辛川式土器の胴部で沈線を文様にするものである。
- 929～931は口縁部と胴部に磨消縄文を施す土器で、やや内弯する口縁部をもち、胴部の立ち上がりのカーブがやや強い上器である。加治木町干迫遺跡や鹿屋市中ノ原遺跡から出土した中ノ原式土器に類似する。
- 932は、口径24.0cmを測る口縁部で中ノ原土器であるが、2本の平行沈線で構成され、沈線のみで磨消縄文が施されていないものである。
- 933も北久根式土器で、926同様、口縁部断面形が緩やかに三角形を呈し、口縁部の文様に沈線を施すものである。
- 934は、口縁部が「く」の字状を呈するもので、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。ナデ整形で器面調整を行っている。丸尾式土器に該当する。
- 935は、口縁部が外反するもので、内外面とも貝殻条痕で施文を行っているものである。市来式土器に該当する。
- 936は、口縁部が外反する土器で、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。口縁部が山形を呈するものである。
- 937も市来式土器で、口縁部下位に貝殻復縁による斜位の連続刺突文を施すものである。
- 938～944は、口縁部が外反する土器で、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。貝殻刺突文は羽状に施され、942は口縁部が山形を呈す。
- 945は、口径31.2cmを測る外反する口縁部で、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。946～948・950は、外反する口縁部をもつもので、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。947は貝殻刺突文は羽状に施されている。
- 949は、口縁部の断面形が「く」の字状を呈するもので、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしている。
- 951～955は、丸尾式土器の貝殻条痕を施した胴部である。
- 956は、脚台をもつ鉢形土器の脚台部である。上観面が凸形をベースとするもので、脚台径が9.8cmを測るものである。爪形押圧で文様を構成している。



第158図 縄文土器 (1)



第159図 繩文土器 (2)



第160図 縄文土器 (3)

第28表 宇都上遺跡縄文土器觀察表

標図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	部位	國 蓋		胎土	色 調		取上番号	備考			
						外側			外側						
158	920	C4	IVb	辛川	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	黒褐色	淡茶褐色	6191				
	921	C4	IVa	辛川	口縁	ナデ	ナデ	ho.qz	黒褐色	黒褐色	5033他				
	922	C4	V	辛川	口縁	ナデ	条痕	ho.qz	暗褐色	黒褐色	6210				
	923	C4-5	IVa	辛川	口縁	ナデ	ナデ	ho.qz	黒褐色	黒褐色	5554他				
	924	C4	IVa	辛川	腹部	ナデ	ナデ	ho.qz	暗褐色	暗褐色	5650他				
	925	C4	IVa	辛川	腹部	ナデ	ナデ	ho.qz	暗茶褐色	暗茶褐色	5621他				
	926	C4	IVa	北久根	口縁	ナデ	条痕	ho.qz	暗黃褐色	暗褐色	5043他				
	927	C4	IVb	辛川	腹部	ナデ	ナデ	ho.qz	茶褐色	暗黃褐色	6205				
	928	C4	IVa	辛川	腹部	ナデ	ナデ	ho.qz	橙色	暗褐色	5585他				
	929	C4	IVa	中ノ原	腹部	ナデ	条痕	ho.qz	橙色	暗褐色	5615他				
	930	C4	IVb	中ノ原	腹部	ナデ	条痕	ho.qz	黒褐色	黒褐色	6077他				
	931	C4	IVa	中ノ原	腹部	ナデ	ナデ	qz.繩	暗茶褐色	暗茶褐色	6066				
	932	C4	IVa	中ノ原	口縁	ナデ	ナデ	ho.qz	暗褐色	暗褐色	5611他				
	933	C4	IVa	北久根	口縁	条痕	ナデ	bi.ho.qz	橙色	黒色	5582				
159	934	C3	IVa	丸尾	口縁	条痕	条痕	bi.qz	暗茶褐色	赤褐色	6092				
	935	C4	IVb	市来	口縁	条痕	条痕	bi.qz	赤褐色	赤褐色	5134				
	936	C4	IVb	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	ho.qz	淡赤褐色	暗赤褐色	5028				
	937	C4	IVa	市来	腹部	ナデ	ナデ	bi.qz	橙色	暗褐色	6185				
	938	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	暗茶褐色	暗茶褐色	5120				
	939	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	黒褐色	赤褐色	5235他				
	940	C3	IVb	丸尾	口縁	条痕	条痕	bi.qz	黒褐色	赤褐色	4839				
	941	C5	IVa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	ho.qz	黒褐色	淡赤褐色	7400				
	942	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.ho.qz	暗褐色	黃褐色	5102				
	943	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi.qz	暗茶褐色	暗黃褐色					
	944	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	暗黃褐色	暗褐色	5545				
	945	C4	IVb	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi.qz	暗茶褐色	茶褐色	5533他				
	946	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	暗赤褐色	暗茶褐色	4854				
	947	C4	IVb	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi.qz	赤褐色	暗黃褐色	6164				
160	948	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	ho.qz	黒褐色	にぶい茶褐色					
	949	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	暗茶褐色	赤褐色	5572				
	950	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi.qz	にぶい茶褐色	黒褐色	6059他				
	951	C4	IVa	丸尾	腹部	ナデ	ナデ	bi.qz	黒褐色	赤褐色	5256				
	952	C4	IVa	丸尾	腹部	ナデ	ナデ	bi.qz	黒褐色	赤褐色					
	953	C4	IVa	丸尾	腹部	ナデ	ナデ	bi.qz	暗茶褐色	黒褐色	5616				
	954	C4	IVb	丸尾	腹部	条痕	条痕	qz	暗茶褐色	赤褐色	5040				
	955	C4	IVb	丸尾	腹部	ナデ	条痕	qz	にぶい赤褐色	黒褐色	6053				
	956	C3	IVa	市来	底部	ナデ	ナデ	ho.qz	黃褐色	にぶい黃褐色	5128				

石器

宇都上遺跡からは、縄文時代後期・晩期、古代、中世の遺物が出土した。様々な石材が用いられており、黒曜石は肉眼的観察により、驚ヶ迫遺跡同様の分類を行った。

石鎌（第161図、957～960）

本遺跡では4点の石鎌が出土した。石材、形態に統一性はみられず、また、遺物数も少量の為、各々を述べていきたい。

957は、節理面を利用している五角形鎌である。形態は、両側辺の下方に張り出した部分が作られ、側辺は直線的で、先端部に向かうにつれてやや膨らみを持つようになる。その為、逆刺はやや鈍い。抉りは非常に浅く、基部は内弯しているように見える。958は安山岩を素材としたものである。側辺部はわずかに外弯し、先端部付近でゆるやかに内弯している。側辺の上部には、表裏面からの細かく丁寧な剥離によって逆刺が鋭く作られている。脚部と抉りが欠損しているため、形態や詳しい情報は不明である。959は桑ノ木津留産黒曜石を用いている。側辺部はやや外弯し逆刺は丸く作られている。側辺の先端部には使用痕らしきつぶれが、ごくわずかにみられる。抉りはやや深く入り右脚部がわずかに欠損している。細部にわたる細かな調整剥離によって全体が形成されている。960は頁岩の縦長剥片を用いている。右脚部付近に厚みがあり、また自然面を有する。表面は、粗く大まかな剥離により形成されており、表面も同様の剥離が呈されている。全体的に粗いタッチが目立つため、未成品の可能性が高い。

スクレイパー（第161図、961～964）

4点出土した。様々な素材を用いており、形態にも統一性はみられない。石鎌同様、分類せず、各々を述べていきたい。

961は自然面を有する、針尾産黒曜石の横長剥片を用いている。不定形を呈しているが、下部には使用によると思われる微細剥離がみられ、わずかに内弯する右側辺に表裏からの細かな調整剥離によって、刃部が形成されている。962は不純物を多く含む桑ノ木津留産黒曜石の縦長剥片を、横位に用いている。下辺に、表裏面からの調整剥離によって刃部が形成されているが、連続性はみられず、粗雑な印象を受ける。刃部はわずかに使用痕がみられる。右側辺には不純物が集中しており、破砕しているが、刃部はその部位まで続く可能性も考えられる。963は暗緑灰色のチャートを用いている。所々に風化面がみられる。ほぼ台形を呈し、下辺に表裏面からの調整剥離によって刃部が形成されている。左側辺が欠損しているが、そこに風化面がみられるため、欠損品を使用していた可能性がある。964はハリ賀安山岩の縦長剥片を用いている。欠損品と思われ、下辺に刃部がわずかに残る。表裏からの調整剥離により、粗く刃部が形成されている。使用痕は観察できなかった。

石斧（第161図、965・966）

2点出土し、いずれも磨製石斧である。

965は黒色頁岩を用いている。基部、肩部が欠損し、半円状の刃部のみが残る。正面は研磨によって、ほぼ水平に加工されているが、かすかに棱を形成している。裏面には、広く剥離面が残り、

その部分を除いて研磨されている。刃部には、使用中の欠落と考えられる欠損部がある。966は剥落の激しい、粘板岩を素材としている。全面にわたり研磨が施されているが、非常に脆く、斧としての利用に疑問を感じる。

磨石・敲石（第162図、967～969）

本遺跡からは、磨石、敲石が多数出土したが、完形を留めているものが少なかった。その中から完形品3点を選別し、図化した。また磨石、敲石には、同一個体上に研磨、敲打の加工痕があり、重複して有する場合がある。驚ヶ追遺跡同様、顕著に表れている使用痕により遺物を判断した。

967・968は敲石である。いずれも花崗岩の円盤を用いている。967は側面の全てに、広範囲に使用痕がみられ、正面と裏面には擦痕がみられる。特に正面に擦痕が強く残る。

968は所々に敲打による深いくぼみとつぶれがみられる。全体に擦痕がみられるのだが、非常に弱い。969は花崗岩の楕円形の蝶を用いた、磨石である。敲打痕は観察できなかった。全ての面に擦痕がみられるが側辺部の擦痕は、やや弱いものとなっている。

石皿（第162図、970・971）

2点出土し、いずれも欠損品である。

970は花崗岩を用い下部、上部、右側部を大きく欠損している。画面に使用痕がみられ、強く磨りくぼんでいる。裏面の一部に敲打による浅いくぼみがみられ、台石としての利用も考えられる。

971は花崗岩を用いているが、大きく欠損している。正面は、多方向への研磨により、稜が形成されている。裏面にも弱く研磨がみられ、中央に敲打によるくぼみがかすかにみられる。

軽石製品（第162・163図、972～975）

軽石製品は4点出土した。

972は厚みを持つ楕円形で下部へ向けて膨らみを呈する。全面に研磨が施されている。

973・974は円形に近い不定形のものである。扁平な素材を用いており、研磨がみられる。

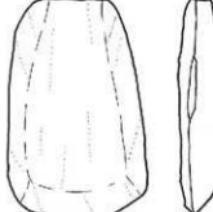
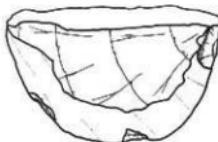
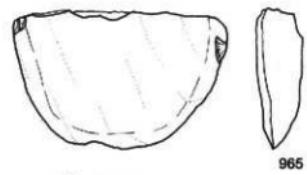
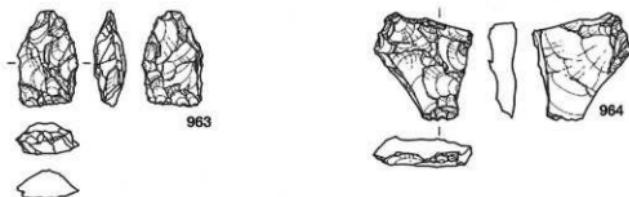
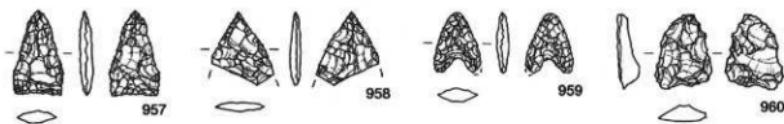
975は正面に1cm弱の深さのくぼみがみられる。欠損品のため、詳しい情報は不明である。

滑石製品（第164図、976～979）

滑石製品、破片等、10数点の出上があったが、加工痕のみられるもの、原形を留めるもの1点を図化した。976～978は形態より、石錐と考えられる。

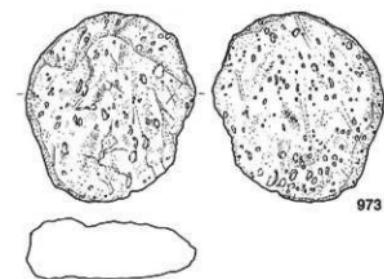
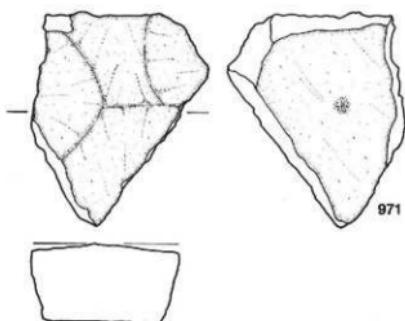
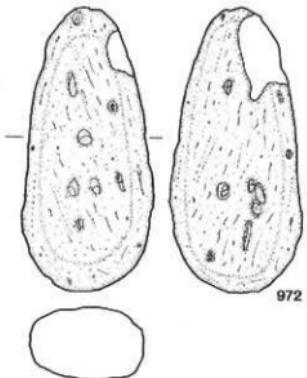
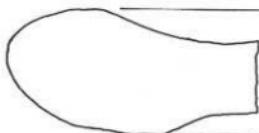
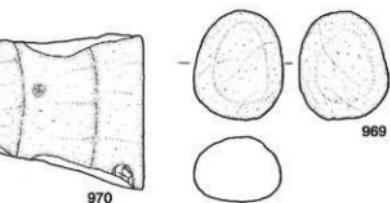
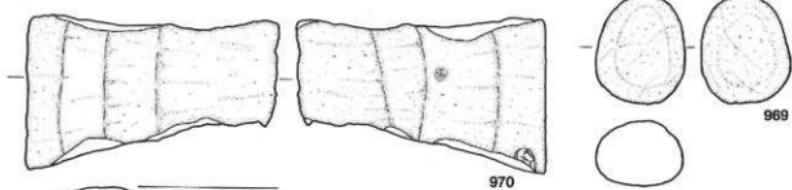
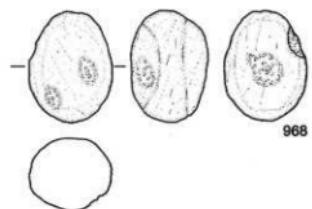
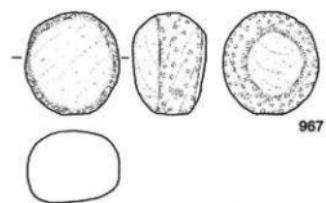
これらは、時期が不明な点が悔やまれるが、同一形態であり、用途的にも同一と思われる。

976は、表裏面に小型のノミ状の様な工具で加工されたような痕がわずかに観察できる。全体が5mm程度の均等な厚さを呈しており、1.5mm程の深さの溝が側辺に一周にわたりて入っている。全体的に丁寧に仕上げられており、また重量が4.0gを計る。977は、表面は欠損、剥落が多く、幅が5mm程度のノミ状の様な工具痕がかすかにみられる。一周にわたり、1～2mm弱の深さの溝が入っており、側辺中央部にはそれに伴って3箇所交差する溝が作られている。裏面は内弯しており、上部と下部には形成の為と考えられる研磨痕がみられる。978は気泡の多い素材を用いている。下部



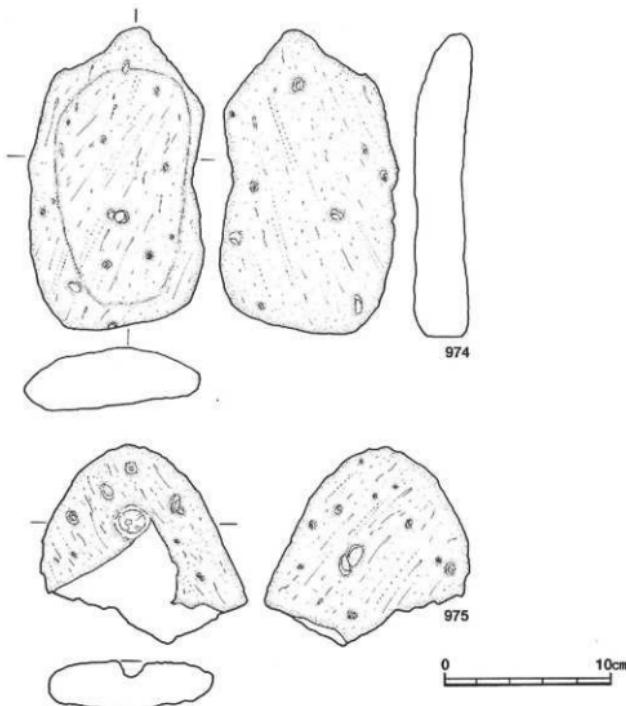
0 5cm

第161図 出土石器 (1)



0 10cm

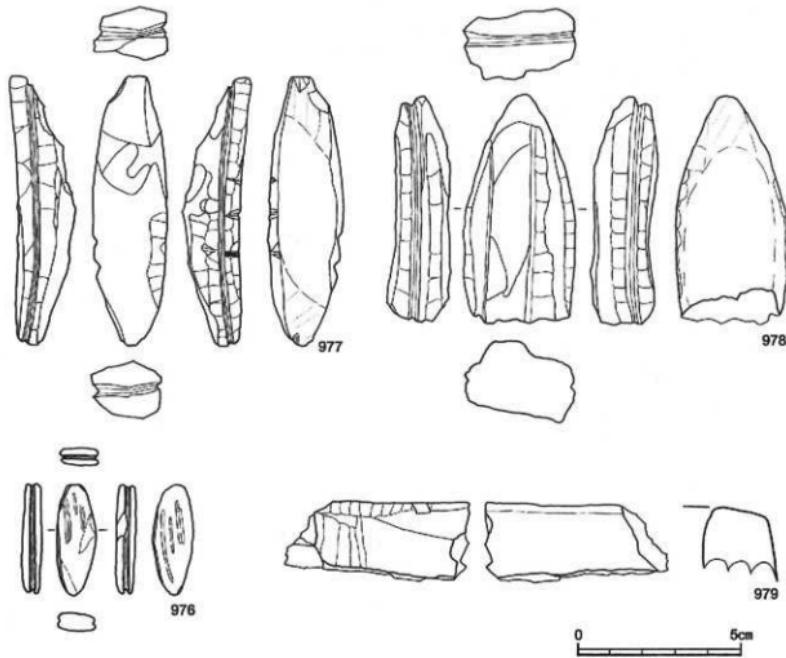
第162図 出土石器 (2)



第163図 出土石器 (3)

が欠損しているが、側辺部のノミ状加工痕と、ほぼ一周にわたる溝により977と同じ性格であろう。表面中央部が同じ幅で隆起しており、滑石製石鍋の鍔の部分の転用品である可能性が高い。979は、滑石製石鍋の口縁部である。表面、口唇部は、幅の狭いノミ状工具による加工痕がうすくみられる。裏面は、細かな加工の後、丁寧に磨かれている。

ほぼ全ての遺物がⅢ層から出土しており、古代から中世の時期に該当する。滑石は長崎県西彼杵半島が主な産地であり、中世に滑石製石鍋としてほぼ全国に流通した。県内の遺跡からも滑石製石鍋出土の報告が多数あり、また、滑石の特性を活かした転用品や、滑石製品の出土も報じられている。宇都上遺跡でも多数の滑石片や、977のように転用を考えさせる遺物が出土している。中世の交流や流通経路を知る上で、重要な遺物である可能性が高い。



第164図 出土石器 (4)

第29表 宇都上遺跡石器観察表

標印番号	通物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
161	957	5410	打製石器	玉髓	E7	N'a	2.6	1.5	0.3	1.0	
	958	8342	打製石器	安山岩	E10	N'b	2.3	1.8	0.3	1.0	
	959	6763	打製石器	糸ノ木津留	B3	N'a	1.9	1.4	0.4	1.0	
	960	7185	打製石器	頁岩	F9	N'a	2.3	1.7	0.6	2.0	
	961	9353	スクレイバー	黒曜石斜尾	D9	N'b	5.2	3.4	0.9	9.0	
	962	8392	スクレイバー	黒曜石糸ノ木津留	C8	III	2.5	3.2	0.9	9.0	
	963	8788	スクレイバー	チヤート	D8	N'b	2.9	1.8	0.9	5.0	
	964	8791	スクレイバー	ハリ賀安山岩	D8	N'b	3.7	2.8	0.7	7.0	
	965	6087	磨製石斧	頁岩	C4	N'b	4.3	6.6	1.2	50.0	
	966	4116	磨製石斧	粘板岩	C3	IV	6.9	4.3	1.3	60.0	
162	967	7483	鐵石	花崗岩	E9	N'b	6.4	5.7	4.4	240.0	
	968	7436	鐵石	花崗岩	D6	IV	6.9	5.1	4.6	210.0	
	969	6324	磨石	花崗岩	D6	III	6.8	5.4	4.2	220.0	
	970	6405	石皿	花崗岩	E10	土坑内	9.7	15.4	9.0	1690	
	971	7526	石皿	花崗岩	D6	N'b	13.3	10.9	4.9	930.0	
	972	4593	輕石製品	輕石	R2	N'a	18.8	10.7	3.7	170.0	
	973	4848	輕石製品	輕石	C3	N'b	11.3	10.3	3.5	148.0	
163	974	2498	輕石製品	輕石	B2	N'a	17.6	8.1	4.5	220.0	
	975	679	輕石製品	輕石	B2	N'a	12.2	10.6	2.7	110.0	
164	976	3147	滑石製品	滑石	D9	III	3.4	1.2	0.6	4.0	
	977	575	滑石製品	滑石	D9	III	8.4	2.2	2.1	40.0	
	978	650	滑石製品	滑石	E8	III	7.0	3.4	2.1	51.0	
	979	3143	石鍋	滑石	D10	N'a	2.5	5.6	2.2	37.0	

第3節 古代～中世の調査

古代～中世の遺構・遺物はII層で検出された。遺構はC～E-6～12区で道跡6条、溝状遺構7条、土坑37基が検出された。

遺物は土師器・陶磁器・滑石製品が出土した。

道跡（第166図）

道跡はC・D-6・7区、D-8・9区で検出された。溝状遺構と道跡の区別は、硬化面が顕著なものを道跡として分類した。C・D-6・7区に5条、D-8・9区に1条が検出された。

道跡1

C・D-6区、II層で検出された。検出された幅は0.8～1.6mで、硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向N-71°-Eを測り、総延長は12mである。

道跡2

C・D-6区、II層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで、硬さや締まり具合は部分により異なっている。主軸方向N-38°-Eを測り、総延長は10.4mである。

道跡3・4

C-6区、II層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで、硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向N-70°-Eを測り、道跡1と同方向である。総延長は4.8m、14mである。

道跡5

C-7区、II層で検出された。検出された幅は0.8～1.0mで、硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向N-38°-Eを測り、道跡2と同方向である。総延長は6mである。

道跡6

D-8・9区、II層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで、硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向南北方向に走り、総延長は約5mである。

溝状遺構（第166図）

溝状遺構はD・E-8～11区で7条検出された。主軸方向は南北方向と東西方向、弯曲するものに分かれる。

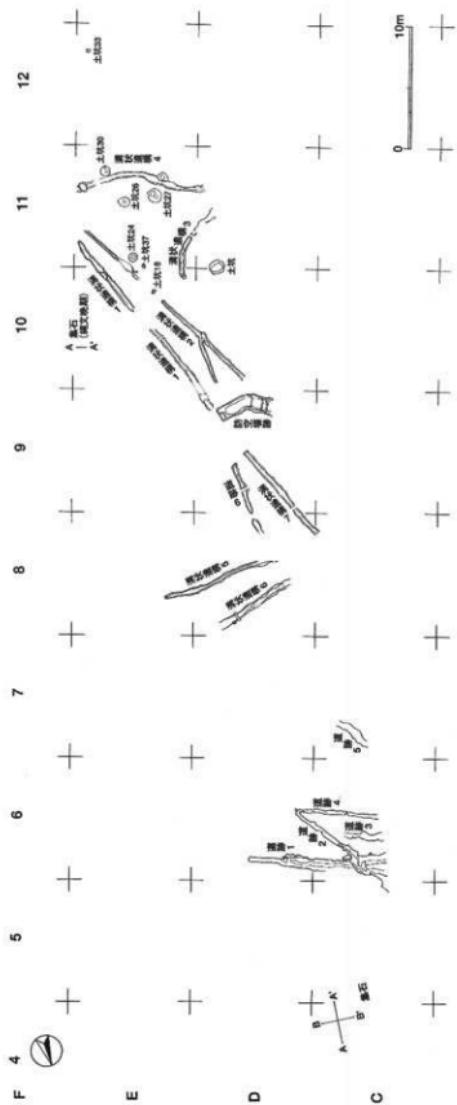
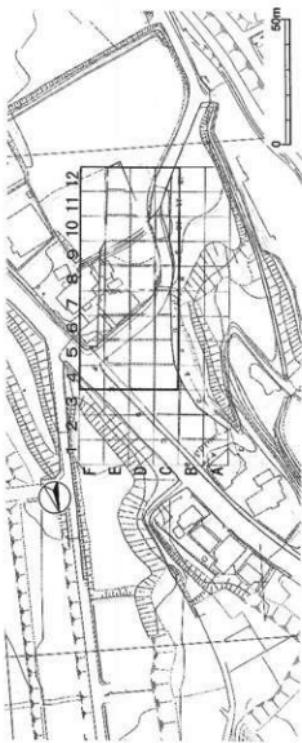
南北方向

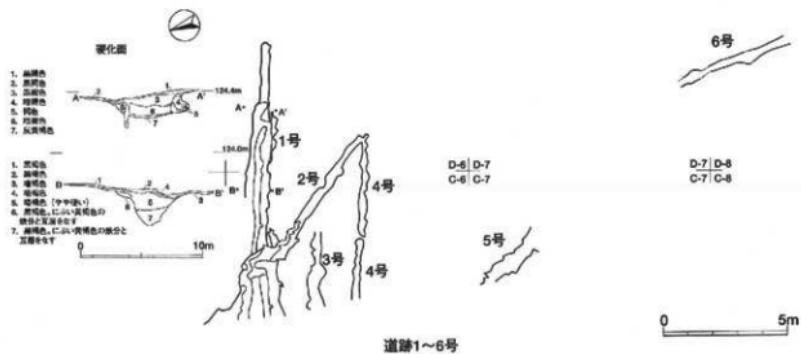
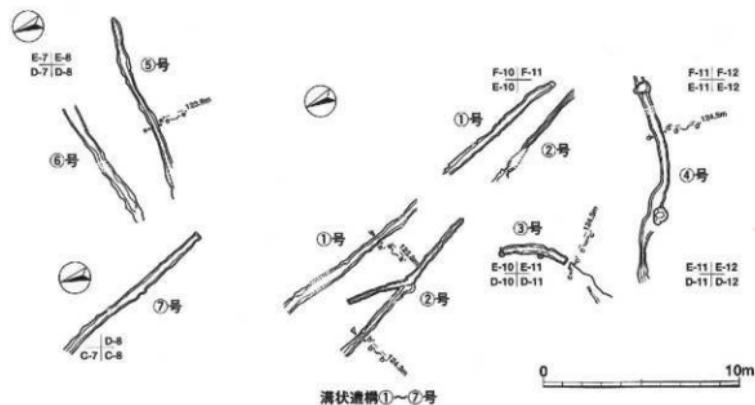
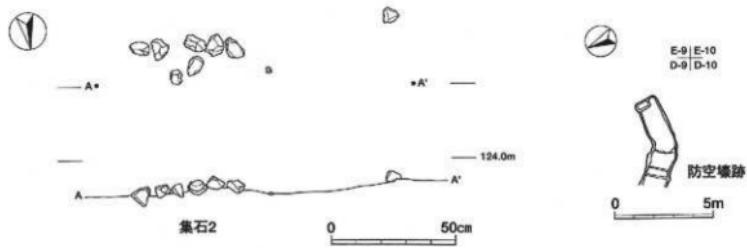
南北方向に走る溝状遺構は1・2・7の3条である。幅は0.5～0.7m、0.4～0.5m、0.5～0.7m、総延長は18m、17.5m、9mを測る。1・2はD・E-10・11区、7はD-7・8区で検出された。

東西方向

東西方向に走る溝状遺構は4～6の3条である。幅は0.5～0.7m、0.4～0.5m、0.5～0.7m、総延長は11m、10m、6.8mを測る。4はE-11区、5・6はD・E-8区で検出された。

第165図 造構配図





第166図 集石(2)・防空壕跡・溝状構造①～⑦号・道跡1～6号

土坑（167図）

土坑は遺跡内で37基検出されたが、特徴のある8基を図示した。

土坑18

E-10区、II層上面で溝状遺構2を切るような状況で検出された。外径は40×28cm、深さは56cmを測る楕円形を呈した土坑である。

土坑24

E-11区、II層上面で検出された。外径は76×70cm、深さ128cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土上部に礫や瓦が出土した。瓦から近世の遺構と考えられる。

土坑26

E-11区、II層上面で検出された。外径は84×76cm、深さ136cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土の状況から近世の土坑と考えられる。

土坑27

E-11区、II層上面で検出された。外径は116×108cm、深さ184cmを測るほぼ円形で深い土坑である。底部は二重になる。埋土中に遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

土坑28

D-10・11区、II層上面で検出された。外径は128×104cm、内径96×60cm、深さ20cmを測る楕円形の浅い土坑である。

土坑30

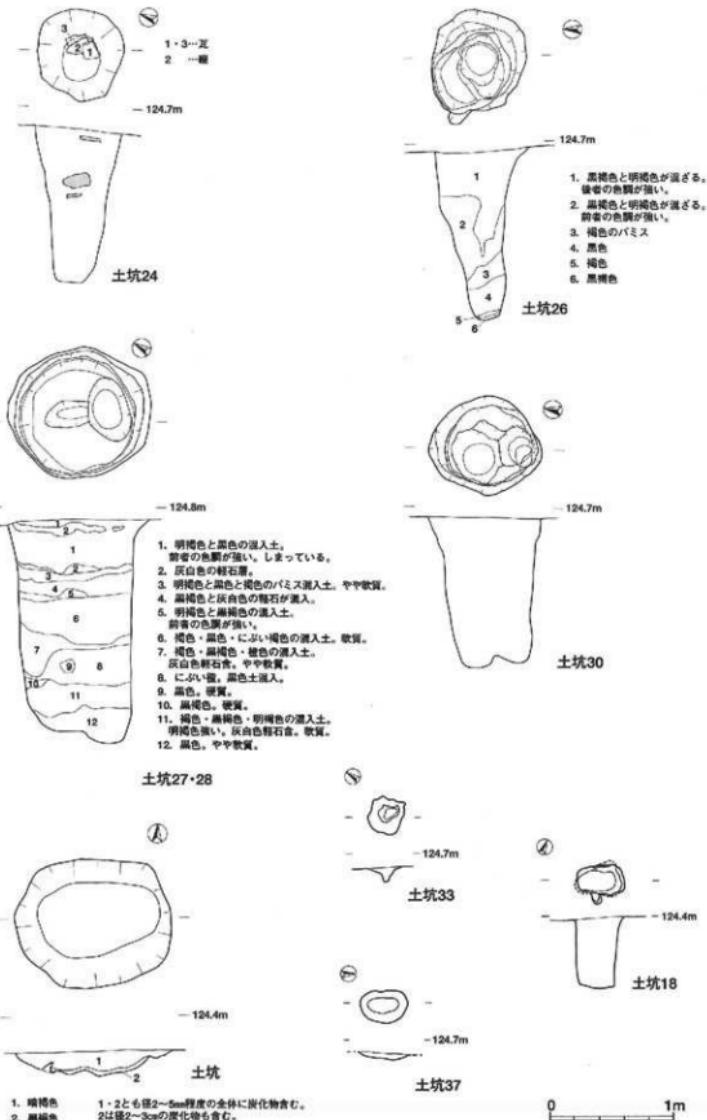
E-11区、II層上面で検出された。外径は92×80cm、深さ124cmを測るほぼ円形の土坑である。底部は二重になる。埋土中に遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

土坑33

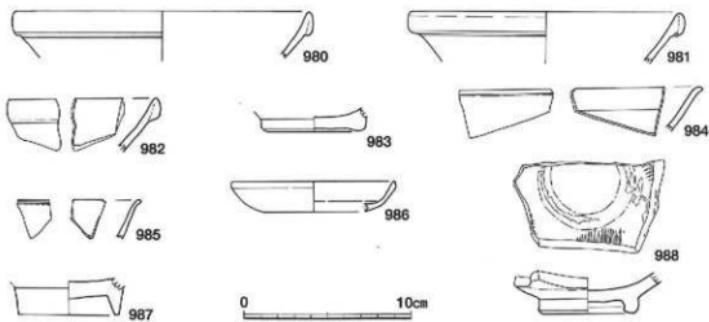
E-11区、II層上面で検出された。外径は32×28cm、深さ12cmを測るほぼ円形の浅い掘り込みをもつ土坑である。

土坑37

E-11区、II層上面で検出された。外径は40×26cm、深さ4cmを測る楕円形の浅い掘り込みをもつ土坑である。



第167図 土坑



第168図 中世出土遺物

中世の出土遺物

中世の出土遺物としては白磁・青磁が出土しており、その出土量は少ない。時期的にはすべて11世紀後半～12世紀後半の範疇に相当するものと思われる。

980～986は白磁の碗である。980～982は玉縁口縁で、胎土は灰白色を呈する。釉は灰色味を帯びた白色である。983は980～982のような玉縁口縁を呈する碗の底部である。高台は幅広で、削り出しが浅いため底部は内厚である。釉は外表面まで施釉されており、以下高台内面まで路胎する。984・985は口縁部を外側に外反させ、上端部を平坦気味につくるものである。胎土は茶色味を帯びた灰白色で釉は白色を呈する。987は口縁部が984・985のような形状を呈する碗の底部である。高台は細く高く直立する。胎土は灰白色で、釉の外表面は体部と高台の境までかけられるもので、以下は高台内面まで路胎する。

986は白磁の皿である。口縁部は直口し、外面には明瞭な棱が入る。胎土は粗く、微細な白色粒子が混じる。

988は同安窯系青磁の碗である。口縁部は欠損しているがわずかに外反するものと思われる。胎の色調は部分的に異なり、灰色もしくは灰褐色を呈する。釉は外表面までかかり、以下は高台内面まで路胎する。内面には幅広で粗い緋の柳目文を施す。見込みには重ね焼きの際の高台痕が残る。

第30表 中世出土遺物観察表

種類 番号	遺物 番号	器種	取上番号	出土区	層位 遺構	胎土	釉 (業)	露胎	焼成	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
	980	白磁	碗	1026	D-9	III	灰白色	灰釉 白色	—	良	18.1	—	玉縁口縁
	981	白磁	碗	940	D-9	III	灰白色	灰釉 白色	—	良	10.7	—	玉縁口縁
	982	白磁	碗	497	D-9	III	灰白色	灰釉 白色	—	良	13.7	—	玉縁口縁
	983	白磁	碗	1606	E-11	III	灰白色	灰釉 白色	—	良	16.6	—	—
168	984	白磁	碗	6284	E-12	III	灰白色	灰釉 白色	腹部から 高台内面	良	—	6.2	— 柳文
	985	白磁	碗	859	D-9	III	灰白色	灰釉 白色	—	良	—	—	島文
	986	白磁	皿	548	D-8	III	灰白色	灰釉 白色	高台脇から 高台内面	良	—	6.0	—
	987	白磁	皿	394	D-8	II	灰白色	灰釉 白色	—	良	9.6	6.0	1.8
	988	青磁	碗	999	D-8	III	灰色 灰褐色	灰釉 綠褐色	腹部から 高台内面	良	—	5.8	同安窯系 内面に柳目文 見込みに重ね焼きの高台痕あり

第VII章 発掘調査のまとめ

鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡では、旧石器時代から中世までの長い期間にわたる生活跡が検出され、それぞれの時期において重要であるが、鷺ヶ迫遺跡の縄文時代・古墳時代、北原中遺跡の縄文時代晩期・古墳時代、宇都上遺跡の縄文時代が主な生活跡であった。以下、遺跡ごとに時代を追って簡単にまとめてみたい。

鷺ヶ迫遺跡

旧石器時代～縄文時代草創期

遺構は疊群・落とし穴が検出され、遺物はナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・スクレイバー・細石刃核・細石刃・楔形石器等が出土した。その他、植刃器が出土した。この植刃器は県内で初出土であり、特筆すべきものである。共伴遺物に細石刃や小型ナイフ形石器があるが、検討が必要である。Ⅶ層からは1点のみであるが、無文土器が出土した。

縄文時代

縄文時代の遺構は落とし穴・集石が検出された。落とし穴は埋土内に遺物がみられなかったが、埋土より縄文時代早期該当の落とし穴と判断した。遺物も集中して出土したが、土器の主体は春日式土器であった。

石器は土器と同様の出土状況であった。石器は、石鐵・石槍・石匙・スクレイバー・楔形石器・石錐・石核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・石皿・砥石・輕石製品などが出土している。この中で、特筆されるものに磨製石錐がある。IV層の早期該当層から2点が出土した。現在、県内では37か所の遺跡が知られている。また、楔形石器・石錐も貴重なものである。

古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はⅢa層で検出された。遺構はD-4・5区、C-D-27区、C-50・51区で竪穴住居跡が6軒検出される。その他、土坑14基、古道4条、溝状遺構15条が検出された。

遺物は成川式土器（甕形土器・壺形土器・高坏・壠形土器）、手捏土器と石器（凹石・敲石・磨石・石皿・台石・輕石製品）が出土した。

竪穴住居跡6軒検出され、住居の形態は方形プランを基本とし、花弁状住居跡も検出された。

北原中遺跡

縄文時代

縄文時代の遺構は集石が5基検出され、落とし穴はⅢa層上面で検出されたもので、数10個の赤化した拳大の礫が散布した状態で検出されたもので掘り込み等はみられないものであった。周辺に縄文時代晩期の遺物が多く同時期の集石と判断した。遺物も土器・石器が集中して出土した。土器の主体は晩期の人佐式土器・黒川式土器・組織痕土器であった。

石器は土器と同様の出土状況であった。石器は、石鐵・スクレイバー・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石などが出土している。この遺跡の特徴は、剥片石器が少なく礫石器が主体であったことである。石錐は石材が豊富で県外の黒曜石等の使用もみられた。石斧の特徴は総数21点が出土

したが、磨製石斧は1点のみで、残りは全て打製石器であった。また、その大半が有肩石斧であることである。土掘り具としての使用が考えられている有肩石斧が多くかったこと、凹石・蔽石・磨石が多く出土したことは、晩期の特徴を良く表していると考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はⅢ a 層で検出された。遺構はC・D-7区、C・D-20~23区で竪穴住居跡が8軒検出された。その他、土坑6基、焼土1か所、溝状遺構7条が検出された。竪穴住居跡は3m前後の方形プランを呈したもので、内部施設の判明したものはなかった。

宇都上遺跡

縄文時代・古墳時代・古代～中世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構・遺物は、集石2基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石錐・石斧・蔽石等の石器が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し、古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され、また、第2次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

この遺跡で特筆するものに、滑石製品の石錐があげられる。石錐の鍔の転用品で螺旋形の形態を呈し、側辺に溝を彫り込んだものである。石錐に分類したが使用が不明のものである。

第31表 繩文時代磨製石器一覧表

No.	遺跡名	所在地	数量	時代	標高	文献	備考
1	奥ノ仁田	西之表市安城	1	草創期	133m	2	粘板岩
2	鬼ヶ野	西之表市安城	5	草創期	74m	3	泥岩・2孔有(1)
3	三角山I	中種子町砂中	5	草創期	243m	34	ホルンフェルス、頁岩
4	前原	鹿児島市松元町福山	9	早期	177m	4	頁岩
5	岩本	指宿市小牧	1	早期	48m	5	頁岩
6	小牧3A	指宿市小牧	3	早期	110m	35	粘板岩
7	柳原西	枕崎市木原	1	早期	60~70m	6	粘板岩
8	志風頭	南さつま市加世田内山田	34	早期	61m	1	頁岩
9	ヘゴノ原	南さつま市加世田武田	1	早期	55m	7	頁岩
10	祝原	南さつま市加世田川畠	1	早期	64m	36	頁岩(赤色)
11	宇治野原	南さつま市金峰町白川	1	早期	90m	10	頁岩
12	木落	南さつま市金峰町白川	1	早期	54~62m	11	頁岩
13	南ノ谷	知覧町東別府	3	早期	160~170m	8	粘板岩・頁岩
14	鷹爪野	川辺町上山田	29	早期	130m	9	頁岩
15	瀬戸原A	日置市伊集院町竹之山	1	早期	188m	12	頁岩
16	塚ノ越	日置市吹上町	1	早期	19m	37	粘板岩
17	薩摩城跡	姶良町西新田	1	早期	107m	13	ハリ質安山岩
18	倉間B	志布志市志布志町内ノ倉	1	早期	119m	14	頁岩、局部磨製石器
19	中丸	鹿屋市大浦町	1	早期	70m	15	頁岩
20	打馬平原	鹿屋市打馬平原	1	早期	65m	16	鉄石英、局部磨製石器
21	桜崎B	鹿屋市白水	2	早期	108m	17	頁岩
22	西丸尾	鹿屋市白水	1	早期	65m	38	粘板岩
23	原口岡	鹿屋市杏平町下名東	5	早期	30m	18	頁岩
24	益畑	鹿屋市串良町	1	早期	46m	19	頁岩・住居内
25	鶯ヶ追	鹿屋市花岡町	2	早期	130m	本文	頁岩
26	横高尾	錦江町大根古神川	1	早期	198m	20	粘板岩
27	大中原	錦江町大根古	2	早期	232m	21	頁岩
28	荒田原	錦江町田代麗	4	早期	293m	22	頁岩
29	ホケノ原	錦江町田代鄰ノ原	7	早期	217m	23	粘板岩
30	日守	西之表市安城	1	早期	75m	24	粘板岩・表採
31	牛ノ原	中種子町増田	1	早期	98m	25	頁岩
32	三角山I	中種子町砂中	7	早期	243m	34	頁岩、砂岩
33	三角山II	中種子町砂中	3	早期	255m	26	頁岩・2孔有(1)
34	石ノ峯	南種子町中之上	2	早期	253m	26	頁岩
35	横峯C	南種子町烏間	3	早期	160m	27	頁岩
36	龍魔坂	南種子町西之	1	早期	120m	28	頁岩・表採
37	鏡龜	南種子町	1	早期	102m	29	頁岩・2孔有
38	上中段	曾於市末吉町深川	3	早期	82m	30	頁岩
39	十文字	志布志市志布志町内ノ倉	1	後期	247m	31	頁岩
40	熊平小田	南種子町烏間	17	後期	86m	32	粘板岩
41	住吉貝塚	知名町住吉	1	晚期?	50m	33	砂岩・粘板岩1孔有(1)

文献

- 1 加世田市教育委員会 1999 「志鳳頭遺跡・奥名野遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 2 西之表市教育委員会 1995 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 3 西之表市教育委員会 2004 「鬼ヶ野遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 4 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 「前原遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(118)
- 5 指宿市教育委員会 1978 「岩本遺跡」 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 6 加世田市教育委員会 1997 「ヘゴノ原遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 7 枕崎市教育委員会 1993 「溝ノ下遺跡・桜原西遺跡」 枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 8 知覧町教育委員会 2003 「前原道路群」 知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 9 川辺町教育委員会 1998 「鹿爪野遺跡」 川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 10 金峰町教育委員会 1992 「宇治原原遺跡」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 11 金峰町教育委員会 1991 「木落遺跡・高源守遺跡」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 12 施見島県立埋蔵文化財センター 2005 「瀬戸ノ頭A遺跡ほか」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(85)
- 13 始良町教育委員会 2002 「旭城跡」 始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 14 志布志町教育委員会 1983 「倉園B遺跡・十文字遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 15 鹿児島県教育委員会 1989 「中ノ丸遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)
- 16 鹿屋市教育委員会 1988 「打馬平原遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 17 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 「桙崎B遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 18 吾平町教育委員会 1995 「原山岡遺跡」 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 19 串良町教育委員会 2005 「益畠遺跡」 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 20 大根占町教育委員会 1999 「横高尾遺跡」 大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- 21 根占町教育委員会 2000 「大中原遺跡」 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 22 川代町教育委員会 1995 「荒田原遺跡」 川代町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 23 川代町教育委員会 2001 「ホケノ原遺跡」 川代町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 24 西之表市教育委員会 1999 「日守遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 25 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996 「牛ノ原遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
- 26 施見島県立埋蔵文化財センター 2004 「三角山II・III・IV遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(63)
- 27 南種子町教育委員会 1996 「石ノ峯遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 28 南種子町教育委員会 2000 「横峯C遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 29 南種子町教育委員会 2004 「龍巣坂遺跡・今平遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 30 南種子町教育委員会 2006 「錢兔遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 31 末吉町教育委員会 1986 「上中役遺跡ほか」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 32 南種子町教育委員会 2002 「柳平小H遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 33 知名町教育委員会 2006 「住吉塚」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 34 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006.1「三角山遺跡群(3)」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(96)
- 35 施見島県立埋蔵文化財センター 1996「小牧3A遺跡・岩本遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 36 加世田市教育委員会 2003 「祝原遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
- 37 吹上町教育委員会 1990 「塚ノ越遺跡、鳥遺跡、内門塚遺跡」 吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 38 鹿児島県教育委員会 1992 「西丸山遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)

科学分析

放射性炭素年代測定結果報告書
(AMS測定)
鷺ヶ迫遺跡

(株)加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

鷺ヶ迫遺跡は、鹿児島県鹿屋市花岡町鷺ヶ迫に所在する。

(2) 測定の意義

遺構の年代と遺構間の前後関係、出土試料の年代を明らかにする。

(3) 測定対象試料

測定対象は、X II層出土の炭化物（1：IAAA-70456）、D-5区の住居3号から出土した木炭（2：IAAA-70457）、D-27区の住居1号から出土した木炭2点（3・4：IAAA-70458・70459）、D-14区の土坑から出土した炭化物（5：IAAA-70460）、合計5点である。試料は採取後、乾燥させ、アルミホイルに包み、さらにビニール袋に入れて保管された。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDII-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ

酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹⁴C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{14}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴A_S : 試料炭素の¹⁴C濃度 : (¹⁴C/¹²C)_S または (¹⁴C/¹²C)_R

¹⁴A_R : 標準現代炭素の¹⁴C濃度 : (¹⁴C/¹²C)_R または (¹⁴C/¹²C)_E

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度 (¹³A_S=¹³C/¹²C) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{14}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの¹⁴C濃度 (¹⁴A_S) に換算した上で計算した値である。(1) 式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{14}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{14}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{14}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(7) 測定結果

X II層出土の炭化物 (1 : IAAA-70456) の ^{14}C 年代が 4420 ± 40 yrBP, D - 5 区の住居 3 号から出土した木炭 (2 : IAAA-70457) の ^{14}C 年代が 1730 ± 30 yrBP, D - 27区の住居 1 号から出土した木炭 2 点 (3・4 : IAAA-70458・70459) の ^{14}C 年代が 1590 ± 30 yrBP, 1550 ± 30 yrBP, D - 14区の土坑から出土した炭化物 (5 : IAAA-70460) の ^{14}C 年代が 2920 ± 30 yrBPである。暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、1 が $3270 \sim 2930$ BCに含まれる年代であり縄文時代中期前葉から中葉, 2 が $250 \sim 345$ ADであり古墳時代前期後半から中期前半, 3 と 4 が $420 \sim 550$ ADに含まれる年代であり古墳時代後期, 5 が $1200 \sim 1050$ BCであり縄文時代晚期前葉に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19, 355-363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37(2), 425-430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
Reimer, P.J. et al. 2001 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAAA Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA - 70456 #1784 - 1代替	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：1 (参考) δ ¹³ Cの補正無し	Libby Age(yrBP) : 4,420 ± 40 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -21.46 ± 0.48 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -423.2 ± 2.6 pMC(%) = 57.68 ± 0.26 $\delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -419.0 ± 2.5 pMC(%) = 58.10 ± 0.25 Age(yrBP) : 4,360 ± 40
IAAA - 70457 #1784 - 2	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：2 (参考) δ ¹³ Cの補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,730 ± 30 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -23.58 ± 0.61 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -193.9 ± 3.0 pMC(%) = 80.61 ± 0.30 $\delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -191.5 ± 2.9 pMC(%) = 80.85 ± 0.29 Age(yrBP) : 1,710 ± 30
IAAA - 70458 #1784 - 3	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：3 (参考) δ ¹³ Cの補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,590 ± 30 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -28.38 ± 0.53 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -180.1 ± 3.1 pMC(%) = 81.99 ± 0.31 $\delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -185.8 ± 3.0 pMC(%) = 81.42 ± 0.30 Age(yrBP) : 1,650 ± 30
IAAA - 70459 #1784 - 4	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：4 (参考) δ ¹³ Cの補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,550 ± 30 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -24.59 ± 0.44 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -175.7 ± 3.0 pMC(%) = 82.43 ± 0.30 $\delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -175.0 ± 2.9 pMC(%) = 82.50 ± 0.29 Age(yrBP) : 1,540 ± 30
IAAA - 70460 #1784 - 5	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：5 (参考) δ ¹³ Cの補正無し	Libby Age(yrBP) : 2,920 ± 30 $\delta^{13}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -22.39 ± 0.47 $\Delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -305.2 ± 2.7 pMC(%) = 69.48 ± 0.27 $\delta^{14}\text{C} (\text{\textperthousand})$ = -301.4 ± 2.6 pMC(%) = 69.86 ± 0.26 Age(yrBP) : 2,880 ± 30

参考

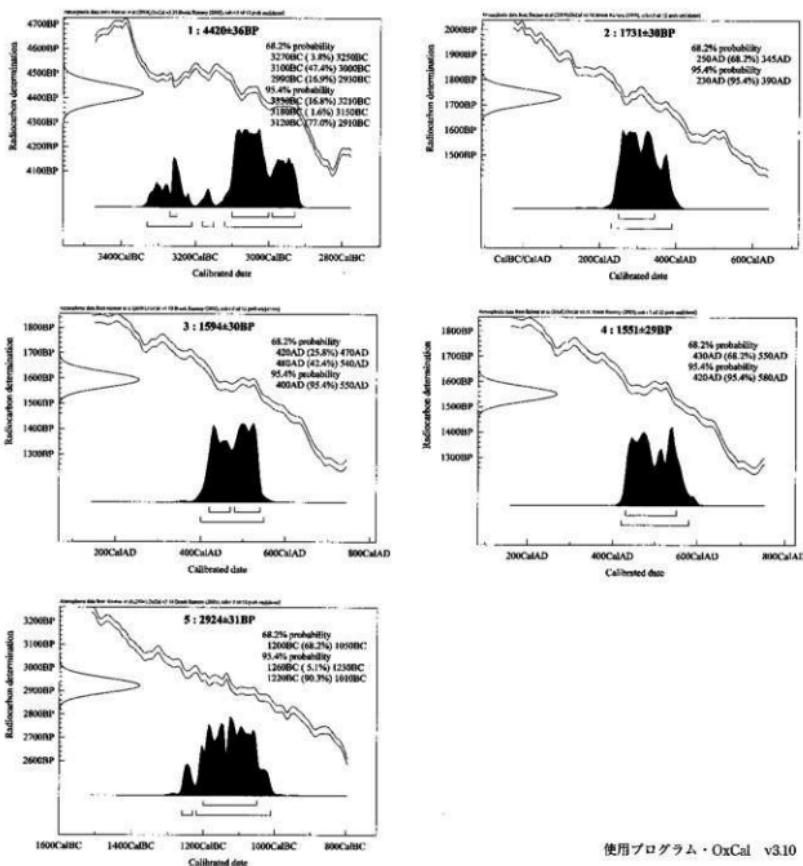
IAAA - 70456に関しては、代替試料を処理し測定した結果になります。

参考資料：暦年較正用年代

IAAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA - 70456	1	4420 ± 36
IAAA - 70457	2	1731 ± 30
IAAA - 70458	3	1594 ± 30
IAAA - 70459	4	1551 ± 29
IAAA - 70460	5	2924 ± 31

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

放射性炭素年代測定結果報告書
(AMS測定)
鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡

株加速器分析研究所

(1) 測定の目的

遺跡内の住居跡や遺構の年代とその前後関係、集落の継続期間、遺物の年代を明らかにする。

(2) 測定対象試料

鷺ヶ迫遺跡のD-5区の住居3号内から出土した木炭（1：IAAA-70879）、C・D-27区のⅢb層から出土した木炭（2：IAAA-70880）、北原中遺跡のD-14区の土坑内から出土した炭化物（3：IAAA-70881）、C-15区のⅣa層から出土した炭化物（4：IAAA-70882）、合計4点である。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・上等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HIO₄II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹⁴Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{14}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{14}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{S} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_\text{S} - {}^{13}\text{A}_\text{PDB}) / {}^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴A_S：試料炭素の¹⁴C濃度：¹⁴C/¹²C_S または ¹⁴C/¹³C_S

¹⁴A_R：標準現代炭素の¹⁴C濃度：¹⁴C/¹²C_R または ¹⁴C/¹³C_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度 (¹³A_S=¹³C/¹²C) を測定し、PDB（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と注記する。

また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの¹⁴C濃度 (¹⁴A_S) に換算した上で計算した値である。(1) 式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{14}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_\text{N} = {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{14}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{14}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{N} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (\%)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age ; yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

(6) 測定結果

鶴ヶ迫遺跡のD-5区の住居3号内から出土した木炭（1：IAAA-70879）の ^{14}C 年代が 1680 ± 30 yrBP, C-D-27区のⅢb層から出土した木炭（2：IAAA-70880）の ^{14}C 年代が 1550 ± 30 yrBP, 北原中遺跡のD-14区の土坑内から出土した炭化物（3：IAAA-70881）の ^{14}C 年代が 1580 ± 40 yrBP, C-15区のⅣa層から出土した炭化物（4：IAAA-70882）の ^{14}C 年代が 2050 ± 30 yrBPである。暦年較正年代（ $1\sigma = 68.2\%$ ）は、1が $330 \sim 420$ AD, 2が $430 \sim 560$ AD, 3が $430 \sim 540$ AD, 4が 110 BC～0BC/ADである。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

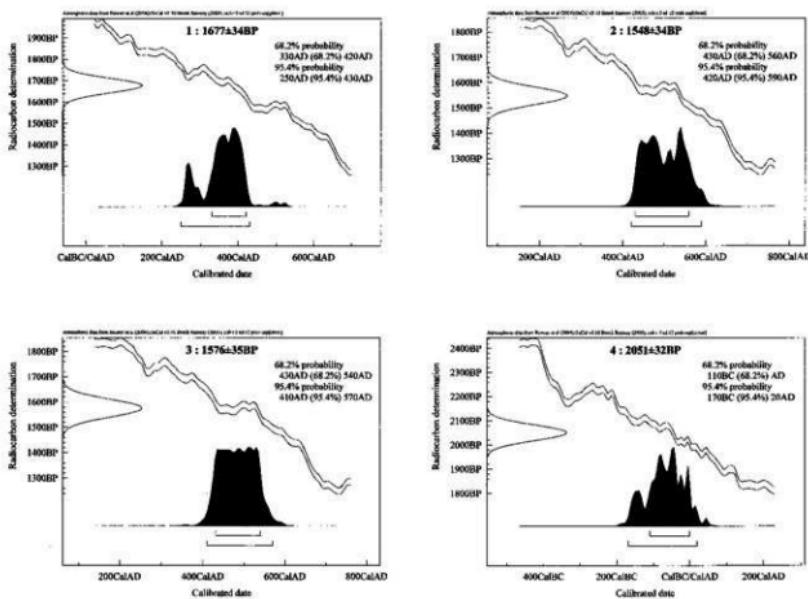
IAAA Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA - 70879	試料採取場所：鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：1	Libby Age(yrBP) : 1,680 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -25.25 ± 0.72 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -188.4 ± 3.4 $\text{pMC}(\%)$ = 81.16 ± 0.34
#1851 - 1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -188.8 ± 3.2 $\text{pMC}(\%)$ = 81.12 ± 0.32 Age(yrBP) : 1,680 ± 30
IAAA - 70880	試料採取場所：鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：2	Libby Age(yrBP) : 1,550 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -24.32 ± 0.92 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -175.3 ± 3.5 $\text{pMC}(\%)$ = 82.47 ± 0.35
#1851 - 2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -174.2 ± 3.1 $\text{pMC}(\%)$ = 82.58 ± 0.31 Age(yrBP) : 1,540 ± 30
IAAA - 70881	試料採取場所：北原中遺跡 試料形態： 試料名(番号)：3	Libby Age(yrBP) : 1,580 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -32.71 ± 0.90 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -178.2 ± 3.6 $\text{pMC}(\%)$ = 82.18 ± 0.36
#1852 - 1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -191.1 ± 3.2 $\text{pMC}(\%)$ = 80.89 ± 0.32 Age(yrBP) : 1,700 ± 30
IAAA - 70882	試料採取場所：北原中遺跡 試料形態： 試料名(番号)：4	Libby Age(yrBP) : 2,050 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -28.74 ± 0.73 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -225.3 ± 3.2 $\text{pMC}(\%)$ = 77.47 ± 0.32
#1852 - 2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -231.3 ± 2.9 $\text{pMC}(\%)$ = 76.87 ± 0.29 Age(yrBP) : 2,110 ± 30

参考資料：歴年較正用年代

IAAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA - 70879	1	1677 ± 34
IAAA - 70880	2	1548 ± 34
IAAA - 70881	3	1576 ± 35
IAAA - 70882	4	2051 ± 32

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：歴年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCAL v3.10

放射性炭素年代測定結果報告書
(AMS測定)
鷺ヶ迫遺跡

株加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置と立地

鷺ヶ迫遺跡は、鹿児島県鹿屋市花岡町に位置する。標高約1000m級の山地から西に延びる標高約120~130mの台地上に立地する。

(2) 測定対象試料

測定対象試料は、鷺ヶ迫遺跡の竪穴住居跡1号から出土した炭化物 (No.1 : IAAA-62496), B-3区土坑埋土から出土した炭化物 (No.3 : IAAA-62497), D-5区円形土坑埋土から出土した炭化物 (No.5 : IAAA-62498), C-D-27区竪穴住居跡1号埋土から出土した木炭 (No.7 : IAAA-62499), D-5区竪穴住居跡3号から出土した木炭4点 (No.9 : IAAA-62500, No.11 : IAAA-62501, No.13 : IAAA-62502, No.15 : IAAA-62503), 合計8点である。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表した。

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{As} - {}^{13}\text{A}_{\text{R}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{R}}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{As} - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{13}\text{As}$ ：試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度： $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\text{s}}$ または $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\text{s}}$

${}^{13}\text{A}_{\text{R}}$ ：標準現代炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度： $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\text{R}}$ または $({}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{As} = {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と記す。

また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{A}_{\text{s}}$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ${}^{13}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{13}\text{A}_{\text{s}} = {}^{13}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{13}\text{As} \text{として } {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$${}^{13}\text{A}_{\text{s}} = {}^{13}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{13}\text{As} \text{として } {}^{13}\text{C} / {}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_{\text{s}} - {}^{13}\text{A}_{\text{R}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{R}}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{13}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age ; yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

(6) 測定結果

鶴ヶ迫遺跡のC～D-27区竪穴住居跡1号から出土した炭化物（No.1 : IAAA-62496）と木炭（No.7 : IAAA-62499）の ^{14}C 年代はともに 1530 ± 30 yrBPである。暦年較正年代（ $1\sigma = 68.2\%$ ）は440AD～600ADに含まれ、古墳時代後期から飛鳥時代前半に相当する。B-3区土坑埋土から出土した炭化物（No.3 : IAAA-62497）の ^{14}C 年代は、 1910 ± 30 yrBPである。暦年較正年代は60AD～130AD（68.2%）であり、弥生時代後期に相当する。D-5区円形土坑埋土から出土した炭化物（No.5 : IAAA-62498）の ^{14}C 年代は 1240 ± 30 yrBPである。暦年較正年代は690AD～750AD（33.0%）・760AD～820AD（27.5%）・840AD～860AD（7.6%）であり、飛鳥時代末から平安時代前期前半に相当する。D-5区竪穴住居跡3号から出土した木炭4点（No.9 : IAAA-62500, No.11 : IAAA-62501, No.13 : IAAA-62502, No.15 : IAAA-62503）の ^{14}C 年代は、それぞれ 1740 ± 50 yrBP, 1720 ± 30 yrBP, 1690 ± 30 yrBP, 1660 ± 30 yrBPである。4点の暦年較正年代は230AD～425ADに含まれ、340AD～380ADが共通する年代であり、古墳時代中期に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く、同一遺構から出土した ^{14}C 年代も近似することから妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363
- Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389
- Reimer, P.J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAAA Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA - 62496 #1609-1代替2	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：1 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,530 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -27.11 ± 0.59 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -173.1 ± 3.2 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 82.69 ± 0.32 $\delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -176.7 ± 3.0 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 82.33 ± 0.30 Age(yrBP) : 1,560 ± 30
IAAA - 62497 #1609-2	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：3 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,910 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -28.65 ± 0.86 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -211.1 ± 3.3 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 78.89 ± 0.33 $\delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -217.0 ± 3.0 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 78.30 ± 0.30 Age(yrBP) : 1,970 ± 30
IAAA - 62498 #1609-3	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：5 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,240 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -29.89 ± 0.87 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -142.7 ± 3.4 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 85.73 ± 0.34 $\delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -151.3 ± 3.1 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 84.87 ± 0.31 Age(yrBP) : 1,320 ± 30
IAAA - 62499 #1609-4	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：7 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,530 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -29.26 ± 0.92 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -173.0 ± 3.5 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 82.70 ± 0.35 $\delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -180.2 ± 3.1 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 81.98 ± 0.31 Age(yrBP) : 1,600 ± 30
IAAA - 62500 #1609-5	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：9 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age(yrBP) : 1,740 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -33.21 ± 0.87 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -195.0 ± 4.8 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 80.50 ± 0.48 $\delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -208.5 ± 4.5 $\text{pMC}(\text{\%})$ = 79.15 ± 0.45 Age(yrBP) : 1,880 ± 50

IAAA - 62501 #1609-6	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡	Libby Age(yrBP) : 1,720 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -28.51 ± 0.83
	試料形態：木炭	$\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -192.8 ± 3.4
	試料名(番号)：11	pMC(%) = 80.72 ± 0.34
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -198.6 ± 3.1
		pMC(%) = 80.14 ± 0.31
		Age(yrBP) : 1,780 ± 30
IAAA - 62502 #1609-7	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡	Libby Age(yrBP) : 1,690 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -31.93 ± 0.80
	試料形態：木炭	$\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -189.8 ± 3.1
	試料名(番号)：13	pMC(%) = 81.02 ± 0.31
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -201.3 ± 2.8
		pMC(%) = 79.87 ± 0.28
		Age(yrBP) : 1,810 ± 30
IAAA - 62503 #1609-8	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡	Libby Age(yrBP) : 1,660 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、(加速器) = -33.15 ± 0.86
	試料形態：木炭	$\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -187.1 ± 3.3
	試料名(番号)：15	pMC(%) = 81.29 ± 0.33
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -200.6 ± 2.9
		pMC(%) = 79.94 ± 0.29
		Age(yrBP) : 1,800 ± 30

参考

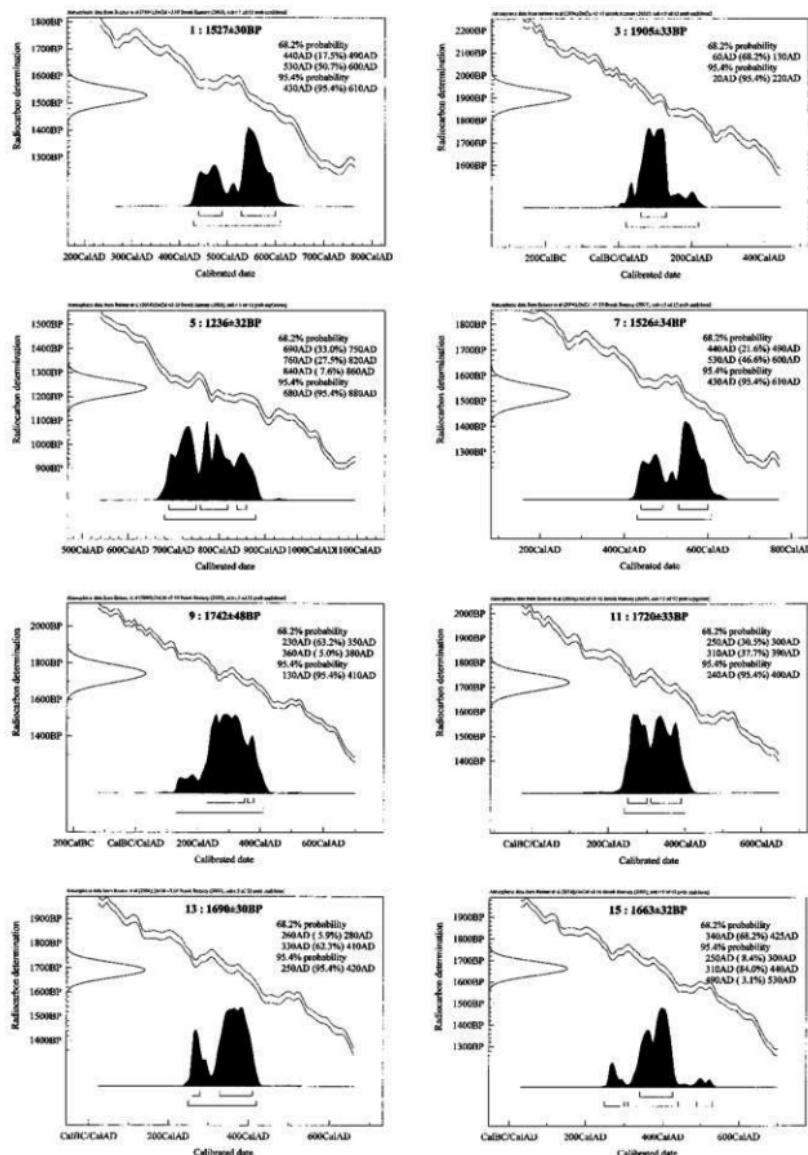
IAAA - 62496に関しては、代替 2 の試料のみを処理し測定した結果になります。

参考資料：歴年較正用年代

IAAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA - 62496	1	1527 ± 30
IAAA - 62497	3	1905 ± 33
IAAA - 62498	5	1236 ± 32
IAAA - 62499	7	1526 ± 34
IAAA - 62500	9	1742 ± 48
IAAA - 62501	11	1720 ± 33
IAAA - 62502	13	1690 ± 30
IAAA - 62503	15	1663 ± 32

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：曆年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

写 真 図 版



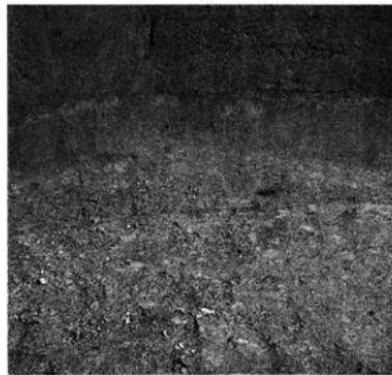
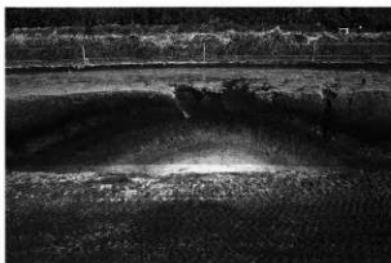
遺跡遠景（北から）平成16年



遺跡遠景（北から）平成18年



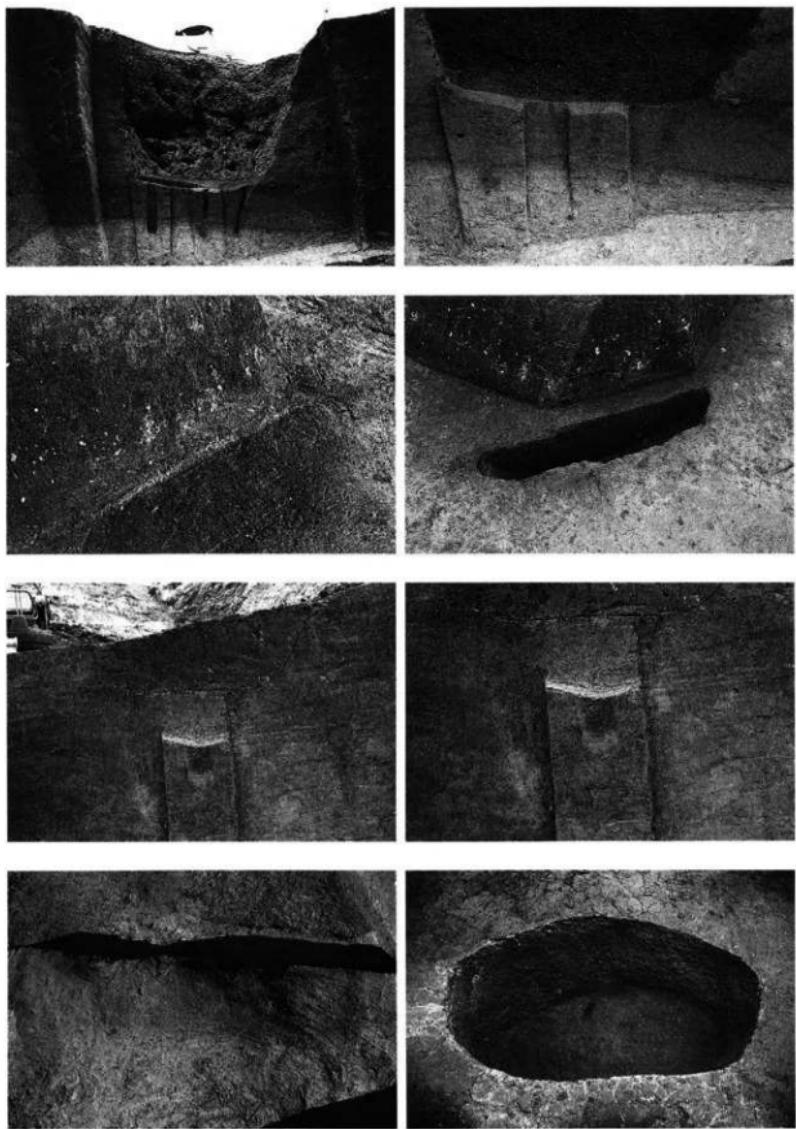
遺跡全景



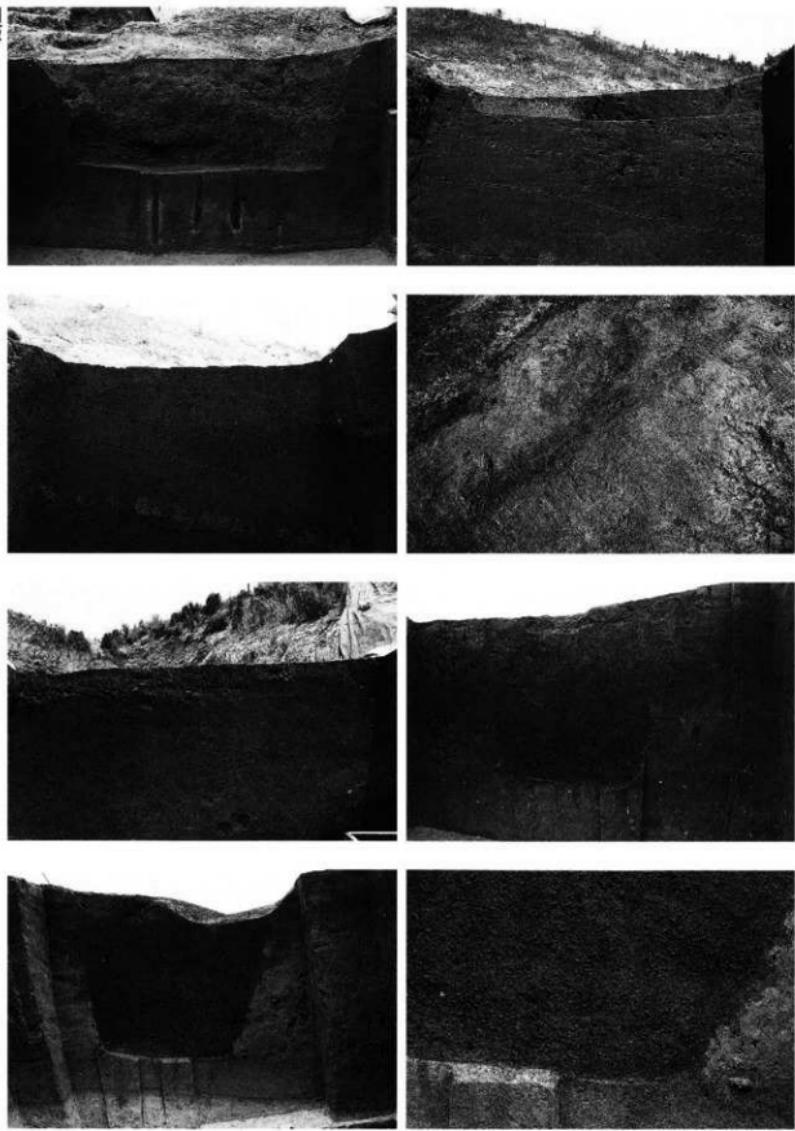
土層



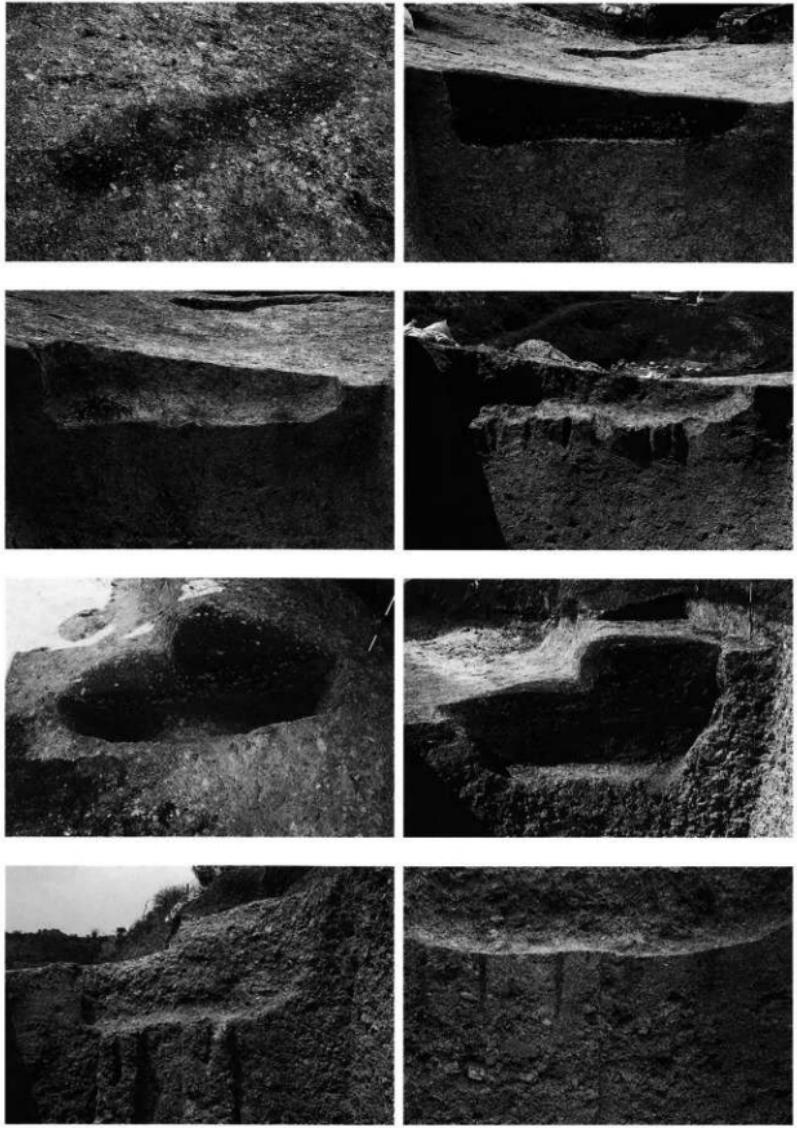
落し穴 1～4号



落し穴 4～9号



落し穴 9~13号



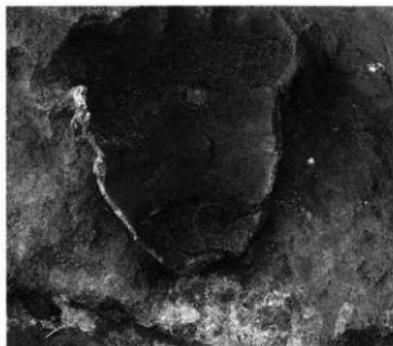
落し穴 14~15号



砾群



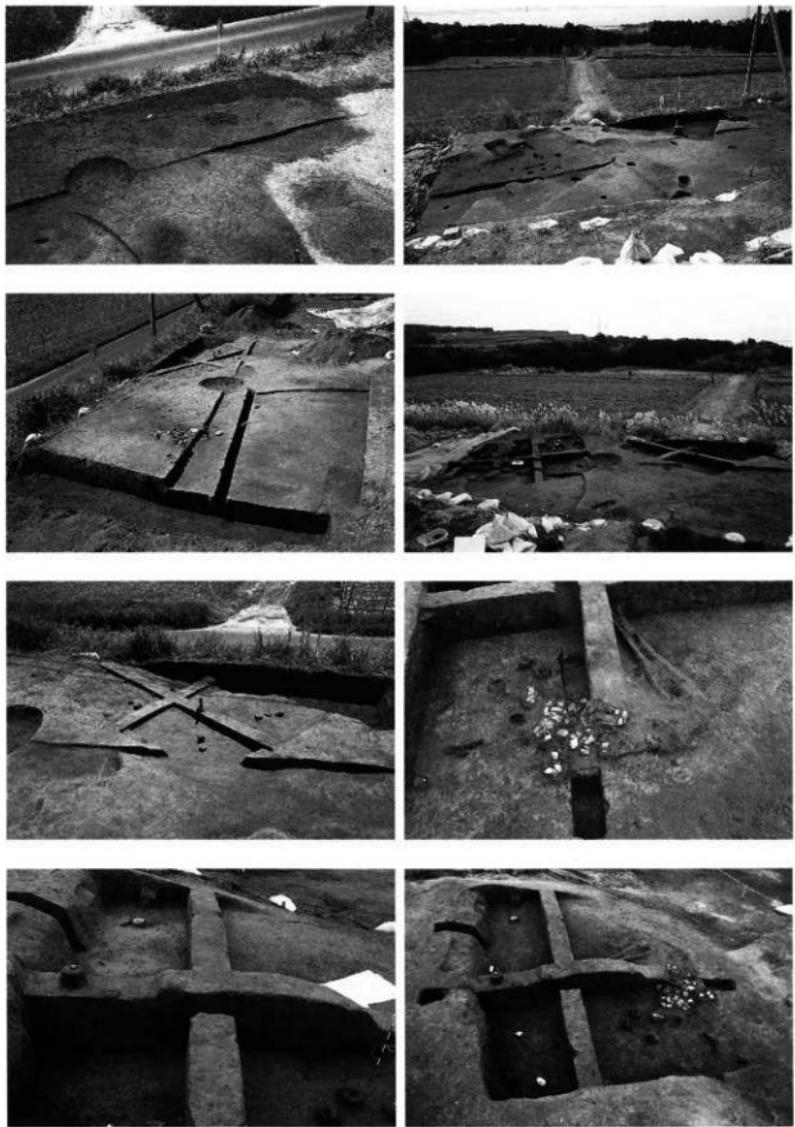
旧石器時代地形



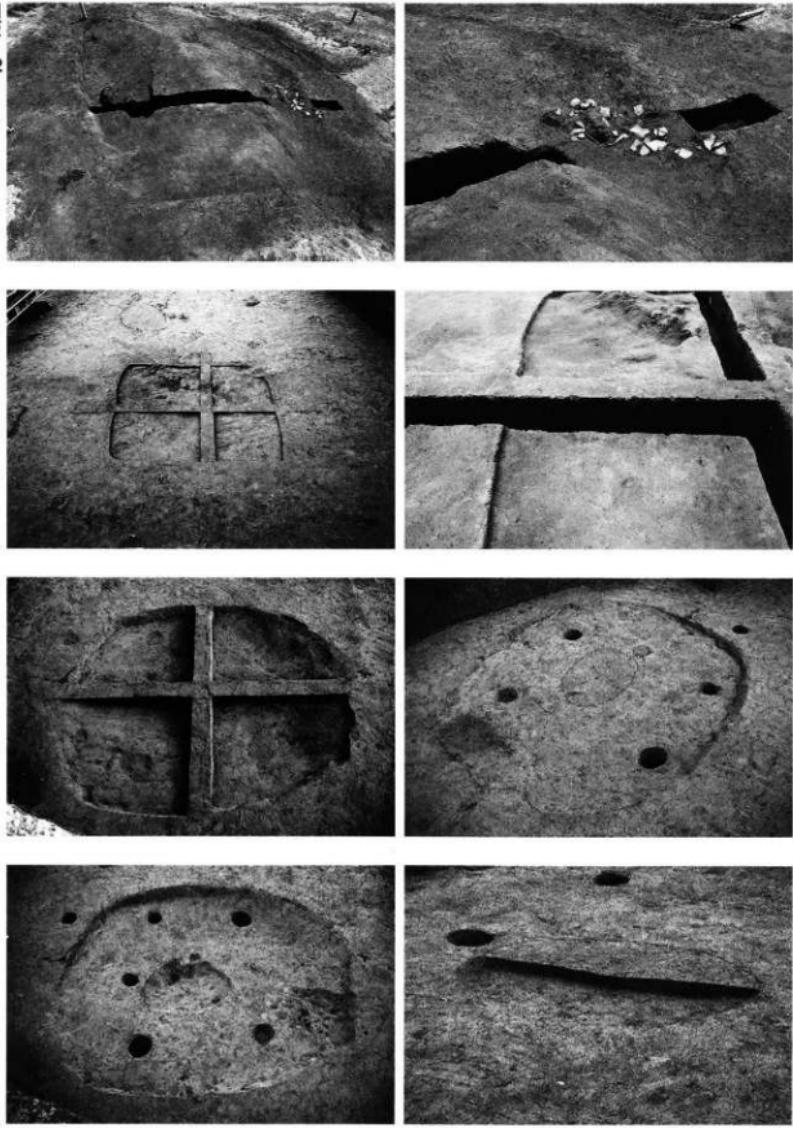
縄文時代遺物出土状況



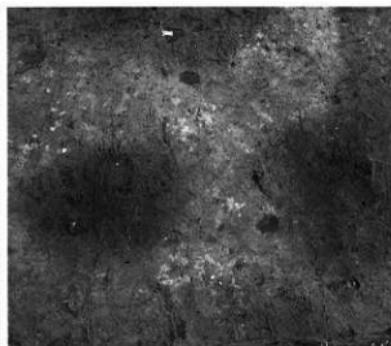
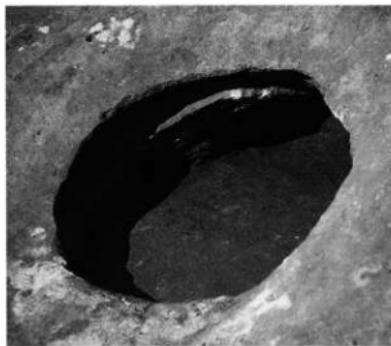
縄文時代落し穴 1・2号



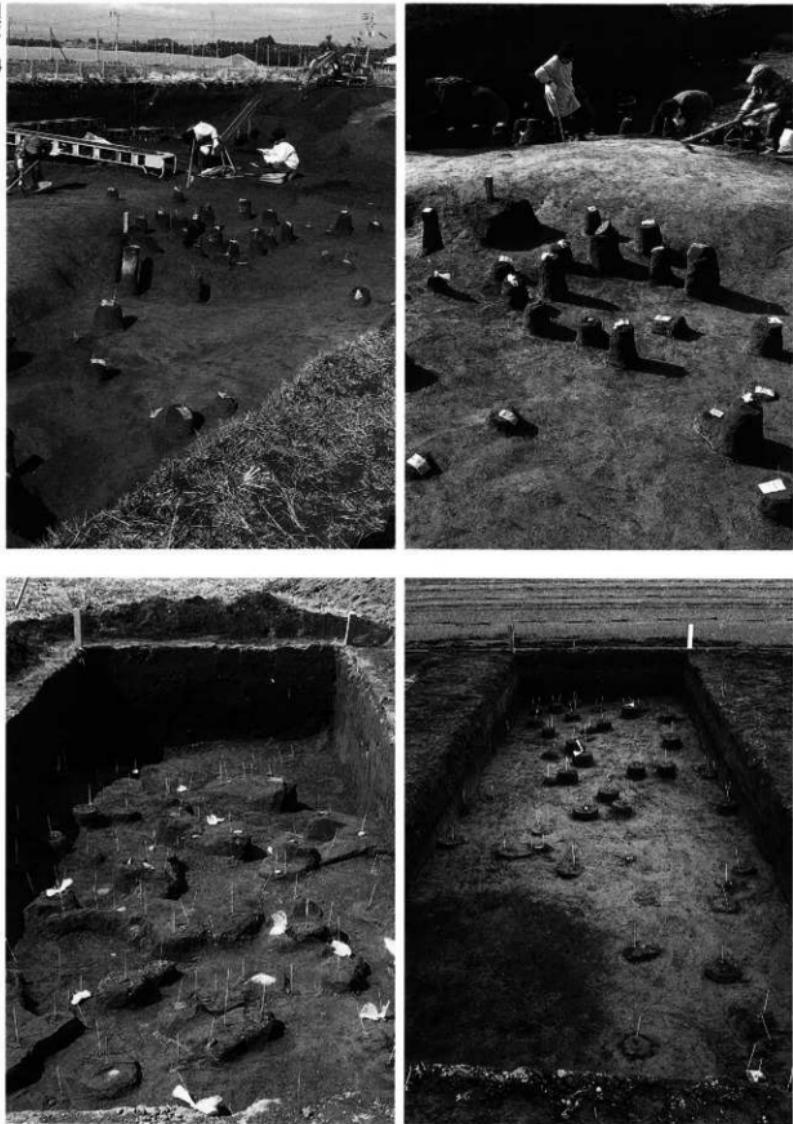
古墳時代住居跡



古墳時代住居跡



土坑



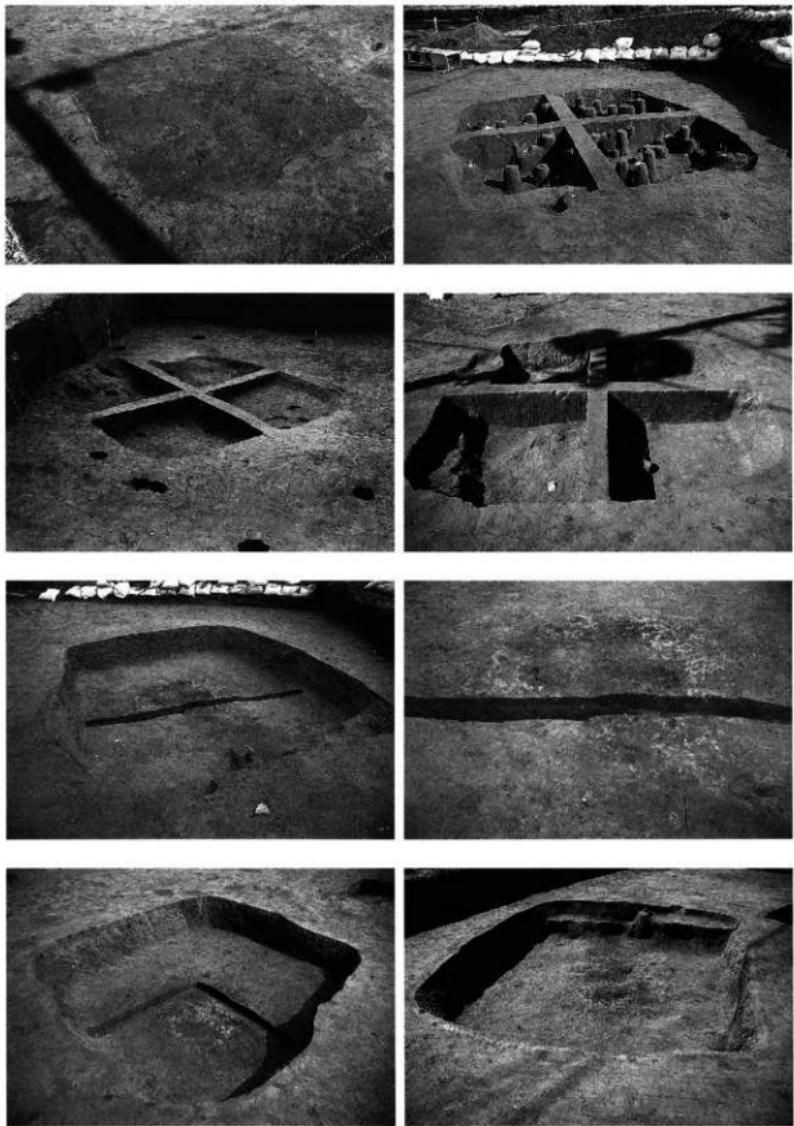
遺物出土状況



縄文時代遺構



土層



古墳時代住居跡



古墳時代住居跡